

建築設計製図優秀作品集 2025

「祭礼のあとで
―八日市場本町通り商店街に残された時間―」
磯部莉緒

「塩のほどき」磯部莉緒・大野紗矢香・酒井 優

「都市型リゾート機能を有したホテル」松原 愛・渡辺 徹

「フィリピンマニラにおけるセルフビルド建築の提案」金井和奏

「ひらかれた浦賀、つながる半島。」
石井結葵子・佐藤彼方・野中奈桜・山田海月・和田武士

「温泉熱と景観資源を軸とした温泉街の再編に関する建築提案」門谷采実

「環境と住宅を考える ―水辺に建つ住宅―」岡田沙雪・柴田祥輔・馬場洋登

「点、線、面から空間をつくる」
今村日向・金子美祐・草野瑠輝斗・小山凜果・杉野聖実・
橘 千京・照井可楽子・新田颯人・根本安菜

「海の駅」大塚望夢・加藤広樹

「首都圏空港群の再編に向けた新空港の提案
―MICE を併設した海上空港の設計―」富永玲央

「一級建築士対応製図コース」久保田諒・栗飯原翔

「水辺に佇むマイ・スペース+ others」片桐巧己・土屋桜子・内海そら

「岩瀬から広がる「輪・環・圏」 ―自転車を中心とした都市のかたち―」大野紗矢香

「街のアートミュージアム」森田裕斗・木村花漣

日本大学理工学部 海洋建築工学科

建築設計製図優秀作品集 2025

CONTENTS

1年生（ベーシックデザイン演習）	2
2年生（デザイン演習Ⅰ、デザイン演習Ⅱ）	8
3年生（デザイン演習Ⅲ、建築計画及び演習）	16
4年生（総合演習）	27
卒業設計	33
修士設計	41
コンペ受賞歴一覧	48

1 年生（後期：ベーシックデザイン演習）

【担当】 佐藤 信治
江川 香奈
長谷川洋平
菅原 遼
金子 太亮
木内 厚子
高野 洋平
田中 克典
田中 厚三

ベーシックデザイン演習 （後期）

第1課題

「ミクロの世界に立ってみよう」
（出題：佐藤信治）

【課題趣旨】

課題は普段見慣れたものの視点を変える訓練から始まります。皆さんの体が身長15～18mm位の大きさにまで小さくなったとします。見慣れていた文具や家電など手に取ることでできる小さなものがまるで未来都市や巨大な構築物のように見えるでしょう。ミクロの大きさになった皆さんは普段は外側から見ているものの中に自由に入りし内部空間をじっくりと眺めることができます。見たことのない空間に入り周りの質感や表情を見つめます。細部まで想像してください。さまざまな驚きや発見があるでしょう。内部空間にあなた自身が立ち最も魅せられた光景を表現してください。空間は意外なところにも存在します。あなたが見つけたこの内部空間を丁寧に描いてください。そして絶妙のタイトルをつけその空間の特質を説明してください。

【提出物】

- (1) ケント紙に描いた作品。裏面に①担当講師氏名、②学生番号＋氏名、③描いた対象物とタイトルを記入
- (2) 作品タイトルと空間の説明文を記した A5サイズレポート用紙1枚。レポート用紙の最初に、同じく上記を記入

【採点基準】

- (1) 描く対象物への着眼点（誰でも知っている身近なものでありながら、一見とてもそのようには見えないという視点を選んでください）
- (2) 表現の密度
- (3) 説明の適切さ
- (4) 必ずどこかに立っていることがわかるような視点であること

第2課題

「点、線、面から空間をつくる」
（出題：菅原 遼、江川香奈）

【課題趣旨】

これまでの課題をとおして、空間のスケール感や表現方法の基礎について学びました。今回の課題では、シンプルなエレメントを組み合わせて、空間やその造形を考察し、模型や図面を用いてアイデアの具体化を試みます。ここでは、空間は線材や面材といった部材の集合によって成立させます。もちろん模型として成立することが前提ですが、構造は重要視しなくても良いので、より純粋にここにあるべき空間を導き出してください。計画地は本学テクノブレース15の吹き抜けです。以下を参考にしながら、具体的な使い方（機能）や造形のテーマは各自で設定してください。

- ・空間的機能の例：屋内の休憩スペース、レポートの作業場、グループ学習のスペース、友人との語りの場、カフェなど
- ・形態操作の例：反復、相似、増幅、入れ子、ずれ、回転、反転、連続、流れ、貫入、断片、隙間など

【学習目標】

- (1) 計画地に赴き、実際の空間を体感する。
- (2) エスキース（計画のスケッチ）と模型製作を繰り返すことで完成品を作り上げる過程を理解する。
- (3) 「かたち」ではなく、「空間」をつくることを意識する。
- (4) デザインの主旨を、言葉（文章）、スケッチ、模型で表現する。

【採点基準】

- (1) 表現したいコンセプトやイメージが実現されているか。
- (2) スケール感を把握しているか（空間に人物模型を置いて、空間と人との関係を示すこと）。
- (3) 水面を設けた人は、水の魅力を生

かしているか。

- (4) 模型やデザイン主旨をきちんとつづけているか。

第3課題

「水辺に佇むマイ・スペース
+ others」
（出題：金子太亮、田中克典）

【課題趣旨】

マイ・スペースは文字通り自分の空間でありながら、+（プラス）の要素が求められます。それは社会や環境、自分以外の誰かとの接点を想定し、その場所を共有することです。誰は1人でも複数人でもかまいませんが、そこで起こるコミュニケーションにより「空間」や「場所」に新たな意味が生じるのです。個の空間を考えると同時に、仲間と、あるいは地域と共有できる建築、その場所に存在する意義を持った建築、そしてそこを訪れる人々に「素敵なかを」を与えられる提案を期待します。

【設計条件】

計画地は、本学キャンパスより東葉高速線船橋日大前の北約600mの坪井近隣公園内に位置する。南側は遊歩道に、北側は調整池に面した、間口20m×奥行22mのなだらかな傾斜をもつ水辺空間である。休日はジョギングする人、家族で憩う人など、公共な広場や公園的な機能として賑わいがある。該当敷地は公園広場と水辺との間の水際に位置し水陸の環境要素と計画内容がどのような関係をもって魅力ある場所と成り得るかを計画するものとする。

- (1) 「マイペース」という定義は住まうスペースではなく、趣味や遊び、自身のアトリエやギャラリー、リスニングルームなどプライベートに活動する場所をイメージする。各自でストーリーを設定すること。自身がかわるスペースであれば設定は自由。

- (2) 「+（プラス）」はマイスペースを中心とし、社会や環境、誰かとの共有の場をプラスすることを意味する。誰かを招いたり、地域の人と活動する場、周囲へ情報発信する場としてもよい。自分以外の人や社会と共有されうる価値を付与すること。

- (3) 水辺を積極的に利用する。水辺の水質はきれいな状態と想定する。建物と水辺との動線は必ず確保し、水辺と岸辺、陸地など場所性をとらえ、関係を深める提案を行う。
 - (4) 計画地：千葉県船橋市坪井町1371
 - (5) 敷地面積：300㎡（約90坪）
 - (6) 延床面積：30～100㎡（ピロティ・外部階段・テラス・バルコニー・庇等は面積不算入）
 - (7) 構造：自由
 - (8) 階数：自由（ただし周辺環境を留意した高さとする）
- ・地盤は表層から支持地盤となり得る良好なものとする。
 - ・電気・ガス・上下水道は供給済み。
 - ・建築基準法、都市計画法などの関係法規は適用外とする。

【提出物】

- A2判ケント紙横使い4、5枚。以下の①に1枚、②～⑤に3、4枚を当てる。
- ①表紙：設計趣旨や計画説明を文、図（スケッチ・パース等）、写真で構成。
 - ②配置図：1/100（建築物を屋根伏で表現し、道路、隣地、遊歩道、池との位置関係を示す）
 - ③平面図：1/50（各階平面図。1階平面図には外構計画を表現する）
 - ④断面図：1/50（2面以上。1面は水際線を横断し、水域と建物との関係を表現する）
 - ⑤立面図：1/50（4面以上）
 - ⑥模型：1/50（プレゼンテーション用。池・遊歩道など周囲もきれいに作成し、建築はこの地盤にしっかり固定すること。現物提出、採点後返却。写真は①に貼付）

ベーシックデザイン演習 第1課題
ミクロの世界に立ってみよう

■講評

●永野柚菜「音楽ドーム」：透明な囲まれた空間に突き出た棒。よく見るとそれはCDケースの中からの情景です。近頃見なくなったCDケースから、光るディスクの様子がよくわかります。とくに周囲にあるぼやけた表現などが丁寧に描かれています。

●金子美祐「立入禁止」：未来の宇宙基地のような情景です。これはタイトルのように謎の秘められた空間が描かれています。一体何なのでしょう？

これは、近年、夏によく見るハンディファンでした。怪しげな構図でありながら羽やその周りの格子が丁寧なタッチで描かれています。

●石橋 芯「切符の行方」：ヒントは船橋なんとかと文字が読めます……。日付もありますね、9月25日！ そうです、これは授業前日に大学に訪れた記録です。これは上部にあるローラーから切符が自動改札機の中に落とされていく様子なのでしょう。なお、課題は余裕を持って作成したいものですね。

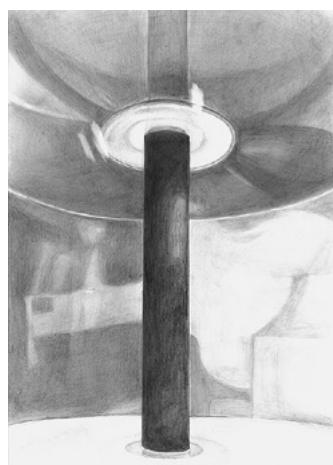
●内海そら「銀の槽」：この作者はどこにいるのでしょうか。無機質な光るサイドベースの中に居るように見えます。よく見るとこれは洗濯機の洗濯槽をのぞき込んだ情景のようです。

●常山貴一「紙の旅路」：この作品は、SF映画を思い起こさせるような未来的な構図です。画面の右上から右下に円を描くように機械が並んでいるようですが丁寧に描かれています。これは、コピー機の紙詰まり時に、いったん開けた内部構造をダイナミックに表現しています。できれば、ミクロ人の立ち位置が分かる構図だといいですね。

●田中元気「メンテナンスルーム」：レインメーカーなののでしょうか、なかなかよく考えられた構図です。さてこれは一体何のでしょうか。これは、鉛筆削りの内部からちょうど鉛筆の芯を削り出しているシーンです。そうすると、落ちてきているのは削りかすですが、残念ながら金ではないようですね。

●氏家優芽「思い出の記録庫」：この作品は、なにやら怪しい雰囲気を感じさせている未来的な構図です。さてこれはどう判断したらいいのでしょうか。これは、めがねケースの内部に収まっているめがねです。白く飛んだ表現がなにやら他の惑星から来た宇宙船のようにも見えてなかなか秀逸です。

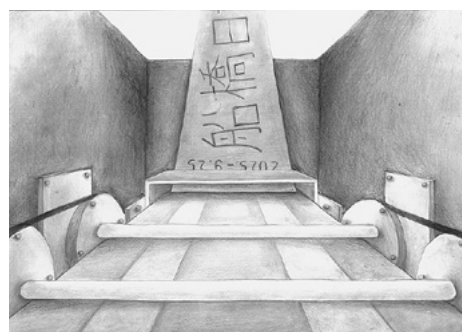
●上田悠生「発明の種」：表現がいい仕事していますね。この作品は、SF映画のクライマックスに出てくる決闘の場面のような構図です。これは、白熱電球の中をよく観察したことで見られる情景です。近年は、LED照明になり白熱電球の内部構造をよく見ることはありませんが、やはりエジソンは偉い人でしたね。（佐藤信治）



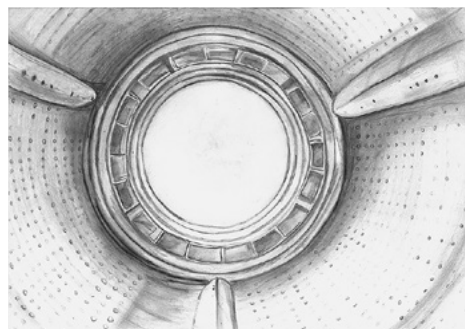
永野柚菜「音楽ドーム」



金子美祐「立入禁止」



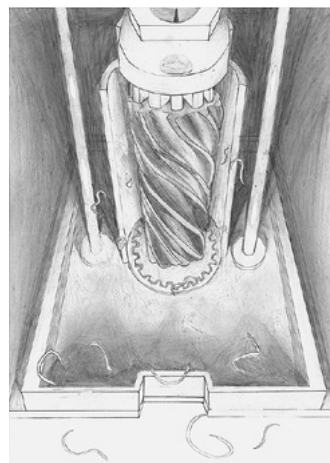
石橋 芯「切符の行方」



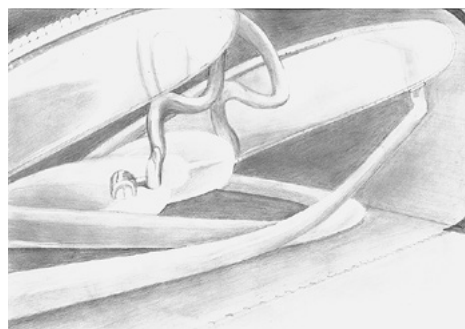
内海そら「銀の槽」



常山貴一「紙の旅路」



田中元気「メンテナンスルーム」



氏家優芽「思い出の記録庫」



上田悠生「発明の種」

点、線、面から
空間をつくる

■講評

●今村日向「流—Flowring Light—」
：多数の直線の部材とその隙間から造り出された曲面が、やさしい光と影を纏った空間を創っている。曲面を、間隔を持たせて重ねることで、より多様な空間を創り上げている。

●金子美祐「～軌跡～」：アプローチ階の上下方向のそれぞれに線材が伸びやかに回転しながら配されている。中央の階段は、この2つの異なる空間の違いを強調しつつ、緩やかにつなぐアクセントになっている。

●草野瑠輝斗「交差する軌跡」：さまざまな方向に、拡散と集中を繰り返す、流動的な空間を造っている。またこのことは、集まる人数単位によって居場所や距離感が調整できる、キャンパスの実現に寄与している。

●小山凜果「光層の間」：床でもあり天井でもある三角形のフレームは、光と風を通すようにできている。水平方向に複数の高さに亘って広がっているため、さまざまな高さで浮遊感を体験

することができる。

●杉野聖実「Ripple Step」：フレームにほぼ満たされているが、どの空間にいても密実な印象を与えない。このフレーム群は空間全体の居心地の良さに寄与するだけでなく、入口側から奥側に向かって上がれる機能性も有する。

●橘 千京「The Lineage of Light」：複数の線材を束ねた「面」が、時にはまとまり、時には扇状に広がり、計画敷地内に重力にとらわれず配置された作品。目線の抜け方や光の落ち方も面白そうな空間ではある。

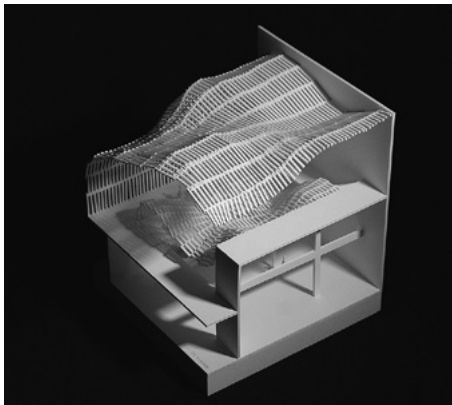
●照井可楽子「上へ上へ自由に」：不規則に配置、積層された面材の階段は、視覚的にも空間的にも相互に干渉し合い、一つのまとまりを持った場をつく

り出している。最上部まで登り切った体験は、凝縮された空間から、広がりのある場所へと踏み出す開放的なものになる。

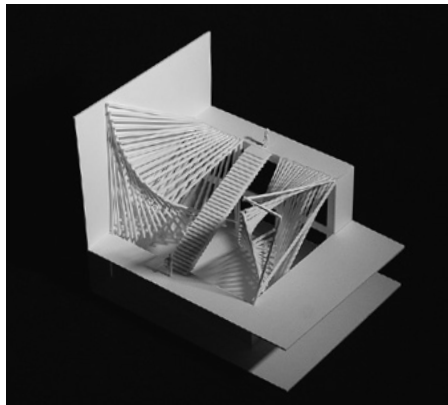
●新田颯人「時間と次元」：線材を用いて筒状のフレームを形成しつつ、その枠から発散するような連なりが特徴的な作品。有機的な構成は、空間を体験する学生たちに発想力を生み出しそうな期待感がある。

●根本安菜「発展の卵」：まるで無重力空間の中に浮かぶように配置された球体は、神秘性をも感じさせる。夜、外からテクノスペース15を見たときに、ぼんやりと内部で明かりが灯り、浮かぶ、この作品を眺めてみたい。

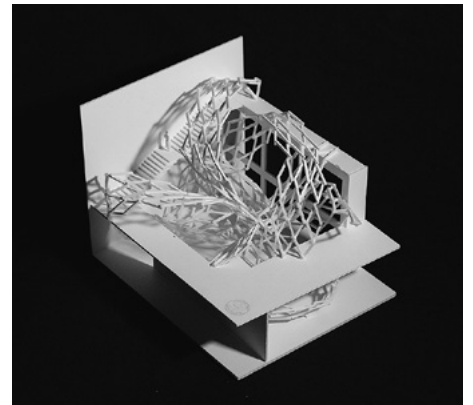
(江川香奈、菅原 遼)



今村日向「流—Flowring Light—」



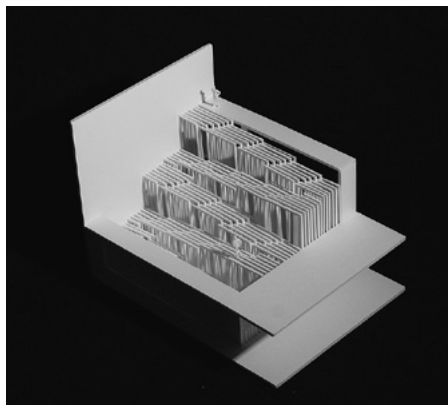
金子美祐「～軌跡～」



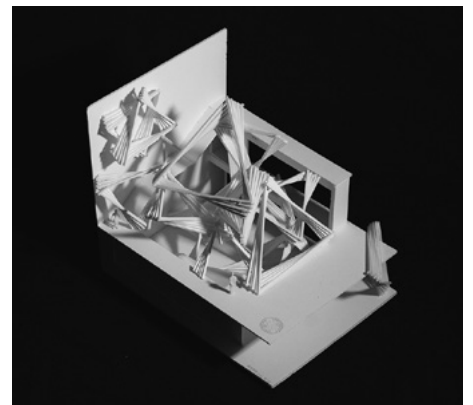
草野瑠輝斗「交差する軌跡」



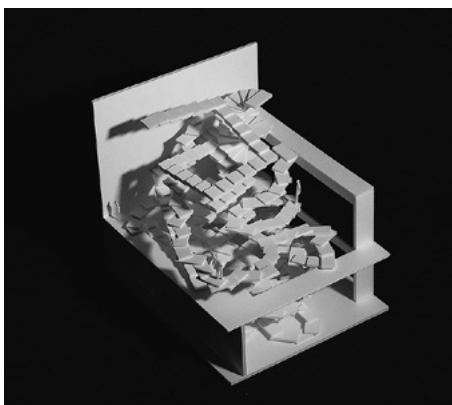
小山凜果「光層の間」



杉野聖実「Ripple Step」



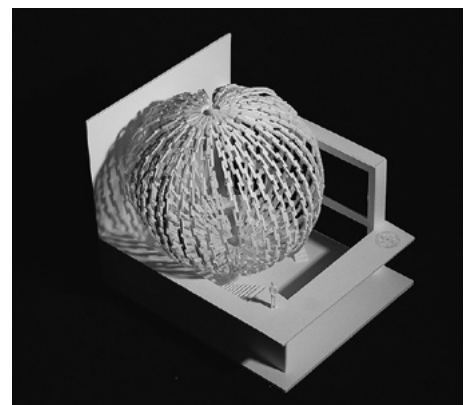
橘 千京「The Lineage of Light」



照井可楽子「上へ上へ自由に」



新田颯人「時間と次元」



根本安菜「発展の卵」

片桐巧己

「波打つ地形」

■コンセプト

この空間は、自分が読書を楽しむ場と、老若男女問わずすべての人が自然の中で読書やゆっくりとした時の流れを楽しめる場だ。

自分自身が青春を過ごした自然豊かな田舎の風や光、水の流れなどを思い出しながら設計した。

抜け感があり自由で、どこか滑らかさ・軽さがある建築を目指した。屋根

は波の形にし、ランダムな大きさにすることで人工物要素が消え、地形に馴染むように。また、地下の図書館は、太陽の位置によってさまざまな光が差し込むようなつくりになっている。人々は陽の光の様子を味わいながら読書を楽しむことができる。

360度どこから見ても、見え方が変わることにこの建築の面白さがある。また、周りに高い建物がない環境に合わせ、低い建物にすることで景観が損なわれない。

■講評

「波打つ地形」は、作者がゆったりと時を過ごし、読書を楽しむための書庫空間である。others には同じく読書を好む人々のほか、明確な目的を持たず静かに時間を過ごしたい人々を想定しており、その受け皿としてふさわしい場の在り方が丁寧に検討されている。

メイン空間となる書庫を地下に配置することで静けさや落ち着きを確保し、水面から着想を得た波打つスラブを地

形に見立てて屋根としている。その起伏は周辺環境に穏やかに馴染みながら、隙間から差し込む光を地下空間へ導き、地上と地下を緩やかに結び付けている。

また、外観では高さを抑えた低い軒によって来館者を静かに迎え入れ、動線に沿って地下へ導いた先で大きな空間と光に出合わせることで、豊かな体験のピークを創出している。屋根という一つの要素が、周辺環境への応答、建築の造形、採光計画、そして空間体験の演出を一貫して担うことで、建築全体に明快な統一感を与えている。

一つの着想を空間、光、環境との関係へと丁寧に展開し、高い完成度で建築的テーマを実現した秀逸な提案である。
(高野洋平)

日建学院賞

「自由」

「抜け感」

-CONCEPT-

この空間は、自分が読書を楽しむ場と、老若男女問わずすべての人が自然の中で読書やゆっくりとした時の流れを楽しめる場だ。

自分自身が青春を過ごした自然豊かな田舎の風や光、水の流れなどを思い出しながら設計した。

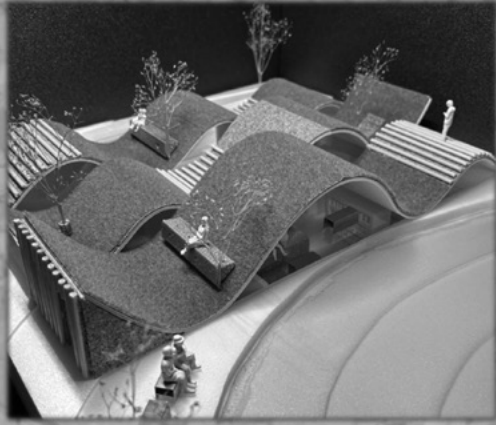
波打つ地形



-FEATURES-

抜け感があり自由で、どこか滑らかさ・軽さがある建築を目指した。屋根は波の形にし、ランダムな大きさにすることで人工物要素が消え、地形に馴染むように。また、地下の図書館は、太陽の位置によって様々な光が差し込むようなつくりになっている。人々は陽の光の様子を味わいながら読書を楽しむことができる。

360度どこから見ても見え方が変わることにこの建築の面白さがある。また、周りに高い建物がない環境に合わせ、低い建物にすることで景観が損なわれない。



水辺に佇むマイスペース+others	
表紙	
1年 高野先生	
5030 片桐巧己	



土屋桜子

「小さな書齋」

■コンセプト

カフェテリアのように休憩できるスペースと図書館のような本があるスペースを組み合わせたような施設とした。三角形の建物をランダムにいろいろな方向に向かせることで、池や周辺の木々等、どこに座るかによって見える景色が変わる。また屋根が斜めになっていて一つひとつの空間が一直線には見えないので、自分だけの空間を作り出

せるようにした。

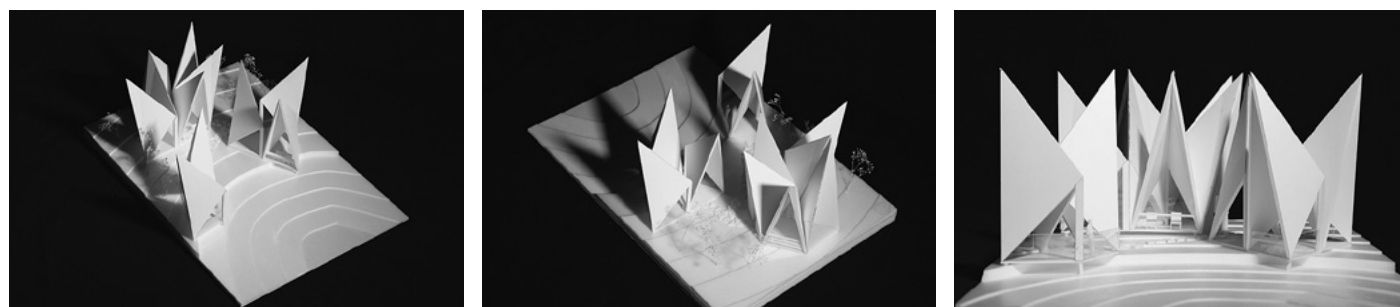
空間を区切るように、扉を設置するのではなく、一つのつながった空間にした。そうすることで天井をくぐるごとに日の差し込み方などが変わって、先に進みたくなるようなデザインにした。池の近くには東屋を設置し、本を読むだけでなく、外の風を感じながら、景色を望めるようにした。また屋根の角度を急にすることで、外を向いたときの天井が高くなり、広く感じられるようにした。

■講評

本をきっかけに人々が集まることのできる居場所の提案である。土屋さんの提案は、建築全体を構成するユニットの発明により、魅力ある空間が創出されている点を高く評価した。具体的

にみると、一つのユニットは正三角形の平面に、2枚の三角形を合わせた急勾配の屋根を架ける構成となっており、それらの組み合わせによって、多様な平面形をもつ建築群が生み出されている。さらに三角形を合わせた屋根は、ユニットが組み合わせることで複雑に折り重なって現れ、一つながりの空間を緩やかに分節している。また開口部は、多方向に開き空間が奥へ続くことを期待させると同時に、身を隠せるような心地の良い居場所を提供している。F・キャンデラの屋根を想起させる魅力のある造形を持った屋根群は、木々に囲まれたフォリーのように、水辺の環境の価値を高めることに寄与している。
(長谷川洋平)

日建学院賞



内海そら

「水辺で育まれる、体験の洞」

■コンセプト

水辺に佇む洞窟をモチーフとした、子どものための体験型施設である。子どもを主な対象としつつ、大人も含めた地域の人々が自然に関わる交流の場にした。

数々の遺構、遺物が発見されている船橋市坪井周辺の土地性を、地層のように積層する段状空間として建築化した。洞窟は内部に閉じるのではなく、

水辺に向かって断面がひらかれているデザインとした。

段差や居場所の連続は、「入る・登る・留まる」といった体験を通して、場所への記憶を育む。

個の居場所から他者と共有する空間へと緩やかにつながる構成で、マイスペース + others を体験として表現した建築とした。

1階から3階までを一体の空間として捉え、立体的な広がりを持つ、居場所をつくっている。段差は移動のための階段であると同時に、腰を掛けたり、滞留することができる。

■講評

水辺に佇む洞窟のイメージに加え、敷地周辺に遺構が残るという条件を契機に、積層的な空間構成へと展開した提案である。段状に連なる空間は「入る・登る・留まる」といった身体的行

為を誘発し、上下階を一体的に捉えた立体的なつながりに本計画の強度がある。とりわけ、蟻が巣穴を広げるように、気積や明るさ、景色、内部の連続性を手がかりに、一つの塊から発掘するように空間を導き出している点は評価できる。また、各所に生まれる「たまり」や「抜け」が空間体験にリズムを与えている点も興味深い。さらに、視線の抜けや断面的な重なりが、空間同士の関係を多層的に感じさせている。スタディ模型を重ねた検証も空間の説得力に寄与している。水辺が洞窟内部へと入り込む構成が加わっていれば、内外の関係はより豊かなものとなっただろう。今後も身体的な感覚を大切に、設計を続けてほしい。（金子太亮）

日建学院賞

水辺で育まれる、体験の洞

計画趣旨

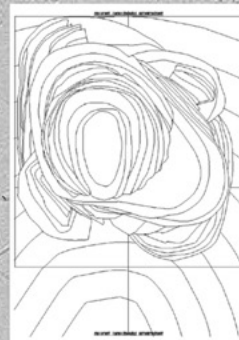
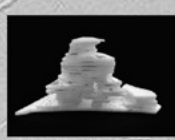
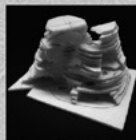
水辺に佇む洞窟をモチーフとした、子どものための体験型施設である。子どもを主な対象としつつ、大人も含めた地域の人々が自然に関わる交流の場にした。

数々の遺構、遺物が発見されている船橋市坪井周辺の土地性を、地層のように積層する段状空間として建築化した。洞窟は内部に閉じるのではなく、水辺に向かって断面がひらかれているデザイン。

段差や居場所の連続は、「入る・登る・留まる」といった体験を通して、場所への記憶を育む。個の居場所から他者と共有する空間へと緩やかにつながる構成で、マイスペース + others を体験として表現した建築。

スタディ模型

設計プロセスにおける1/100スケールのスタディ模型とその断面。実際の空間の「たまり」や「抜け」を確認できた。



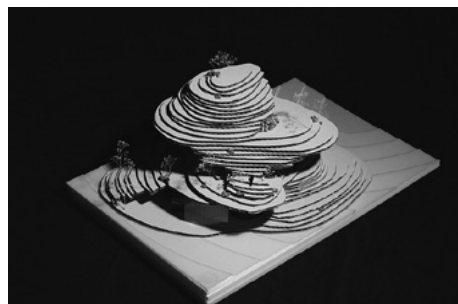
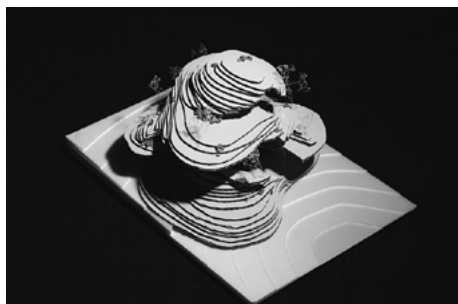
配置図 S=1/100



層状の構成によって、上下階が視覚的・空間的につながる建築。1階から3階までを一体の空間として捉え、立体的な広がりを持つ居場所をつくっている。

段差は移動のための階段であると同時に、腰掛けたり滞留できる。

水辺に佇むマイスペース + others	
表紙	
一年 金子先生班	
5018 内海そら	



2 年生（前期：デザイン演習Ⅰ、後期：デザイン演習Ⅱ）

	前期	後期
【担当】	佐藤 信治 江川 香奈 菅原 遼 奥村梨枝子 金子 太亮 川久保智康 船曳 桜子 森田 敬介 門間 正彦	長谷川洋平 江川 香奈 勝又 洋 川久保智康 船曳 桜子 星 裕樹 森田 敬介 門間 正彦 山田 晶子

デザイン演習Ⅰ（前期）

第2課題

「環境と住宅を考える

ー水辺に建つ住宅ー」

（出題：金子太亮、川久保智康）

【課題趣旨】

社会的な背景を踏まえて現代の家族像や生活スタイルを念頭に、周辺環境を考慮した住宅設計を行います。敷地は江東区門前仲町付近、江戸時代の埋立地に造られた運河の大横川に面した古くからある街区を設定しています。都心で利便性が高いと同時に、富岡八幡宮や深川不動尊の門前町など江戸の下町風情や足跡を残した地域です。大横川護岸沿いの散歩道とレベル差を有しながらも視覚的なつながりを持っています。敷地をA～Cから選択し、その特性を捉えた計画をしてください。

【学習目標】

現代の家族像や、その暮らし方について考察／住空間のスケールや基本寸法を習得／エスキースからプレゼンテーションまでのプロセスを学ぶ／製図記号等の図面表記を習得／住宅としての機能だけでなく空間的魅力を考察／現地調査を通じて敷地の特性を読む

【敷地条件】

〈敷地A〉江東区永代2-1-7周辺
準工業地域、建ぺい率:60%、容積率:300%、その他:第3種高度地区、準防火地域、下町水網地域
〈敷地B〉江東区門前仲町2-1周辺
商業地域、建ぺい率:80%、容積率:400%、その他:第3種高度地区、準防火地域、下町水網地域
〈敷地C〉江東区牡丹3-24-4周辺
準工業地域、建ぺい率:60%、容積率:300%、その他:防火地域、下町水網地域
〈敷地A～C共通事項〉
・最高高さ制限10m以下
・構造は自由
・地盤は良好

【設計条件】

- ・家族の生活スタイルを各自設定する。
- ・家族構成は2～6人程度、年齢や性別、職業などの属性は各自設定する。
- ・キッチン、ダイニング、リビング、風呂・洗濯室、主寝室、個室、便所、その他を適切に計画する。
- ・動線を熟考して計画する。家事動線に十分配慮する。収納を適切に設置。
- ・駐車スペース（最低1台）を家族構成に応じて適切に計画する。
- ・家族の距離感や関係に配慮する。気配が感じられる距離を取り入れる等。
- ・現地調査を実施し、敷地の特性や方位を踏まえた計画とする。
- ・内部と外部の境界について意識する。
- ・延床面積120㎡～200㎡程度とする。
- ・階数制限なし、最高高さ制限厳守。

デザイン演習Ⅱ（後期）

第1課題

「街のアートミュージアム」

（出題：勝又 洋、船曳桜子）

【課題趣旨】

東京、城東エリアの計画地において、街のアートミュージアムを計画するものである。タイトルに「街の」とつけているのは、街の顔となり、地域とつながりを持つ建築の提案を求めるためである。アートミュージアムが街にどのような影響を与えるのか、選定した展示コンテンツにふさわしい空間の質はどうあるべきか、敷地の特性を読み取り、より具体的なイメージを膨らませながら、この場所「ならでは」のアートミュージアムの提案を期待する。

【計画敷地および周辺条件】

住所：東京都江東区毛利2丁目13-7
敷地面積：3,323㎡
・敷地内および敷地南側に位置する、既存の「貯木場（レプリカ）」および「じゃぶじゃぶ池」は撤去・整備の

- 上「南側広場」として利用されるものとする。提案の内容によっては既存施設を残した計画も可とする。
- ・敷地西側の公園内通路を通じて、車両の進入が可能である。
- ・敷地東側の横十間川・遊歩道との関係を考慮。既存堤防の形状変更可。
- ・用途地域:第一種住居地域、容積率:300%、建ぺい率:60%、準防火地域。
- ・電気・ガス・上下水道完備、地盤良好。

【設計条件】

- ・延床面積：約1,000㎡。
- ・構造形式は自由。階数は地上2階建て程度、必要によって地階も可。

【展示コンテンツ】

- ・立地環境からどのような展示コンテンツがふさわしいかを考察すること。街のアートミュージアムとしてふさわしい展示テーマを各自選択し、具体的に設定すること。
- ・主要なコンテンツとして建築、彫刻、絵画、音楽、文学、演劇、映画、メディア芸術などが挙げられる一方で、漫画、アニメ、絵本など身近な題材もアートとして評価されている。自由な視点でテーマを設定してよい。

第2課題

「地域とつながる都市型集合住宅」

（出題：門間正彦、山田晶子）

【課題趣旨】

- 東京・城東エリアの住宅地における80人のための新しい暮らしを考えるものである。単なる居住空間の集合体ではなく、居住者の新しいライフスタイルに対応し、かつ居住者と地域の人々との交流の場として機能する「地域がつながる」魅力的な都市型集合住宅の提案を求める。計画に当たっては、とくに以下のことに配慮すること。
- ・80人のための新しい暮らしを提案すること。
- ・入居者を具体的に想像して提案すること。例えば4人家族20世帯の80人

が集まった暮らしや、6畳一間に1人で暮らし、コモンスペースを充実させた80人のシェアハウスのような暮らしなど、集まって住むことの意味を考えた提案とする。

- ・居住者間の交流や、居住者と地域の人々が交流できるような公共空間を計画する。その際にコワーキングスペースやギャラリーのような、地域の人々も利用できる施設を計画しても構わない。
- ・水辺環境との関わりを考えた提案とすること。

【計画敷地および周辺条件】

住所：東京都江東区牡丹2丁目1-2
計画敷地面積：敷地A：3,156㎡、敷地B：3,236㎡
・敷地A、敷地Bのいずれかを選択し「集合住宅」を計画する。もう一方の敷地は「公園・広場」として計画する。- ・敷地は、準工業地域および準防火地域に指定されている。また、建ぺい率を70%（防火地域内における耐火建築物等の加算を含む）、容積率を300%とするが、本課題においては延床面積の限度を4000㎡とする。
- ・電気・ガスおよび上下水道は完備しており、地盤は良好である。

【設計条件】

- ・地上2階建て以上を条件とし、5階建て程度までの中層集合住宅とする。
- ・住戸形式はフラットタイプのほか、メゾネットタイプ、トリプレットタイプなど、立体的な住戸形式としてもよい。

【周辺環境への配慮】

- ・居住者は北側道路（幅員約15m）、古石場川親水公園のいずれの方向からも、徒歩でアプローチできるようにすること。
- ・水との関わりを積極的に考え、「親水公園」「集合住宅」「公園・広場」を一体として捉えた外構計画を考えること。

デザイン演習Ⅰ 第2課題
環境と住宅を考える
—水辺に建つ住宅—

岡田沙雪

「ずらす、詰む、つなげる」

■コンセプト

仕事上のパートナーのような関係の二人（ライターと写真家など）が仕事を行ったり軽く休息をとったり誰かとミーティングをしたりできる空間を目的とした。

縦方向の動線は階段室にまとめ、横方向・同じ階での動線はユニットの連結部分を上手く利用して生み出した。そこまで大きくない空間である一つ

つつのユニットを上手く居心地のよい空間にしていくためにガラス窓を用いて閉鎖的になりすぎしてしまうことのないようにした。

高さ2500・奥行2500・幅4000のユニットを用いて考えた。この寸法は、キッチンやリラックススペースが平均的な家具の寸法を考えたときに成り立つようになど検討した結果である。

同じブロックを用いる秩序のある側面と、バラバラにずらして組み立てるという秩序のない側面を持ち合わせた建築物を考えた。

■講評

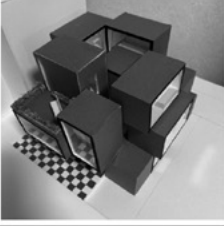
私の授業では「設計課題で一人でも多い成功体験」によるクラスの底上げを目指し、短い課題期間の中でも作業時間を確保するために、コンセプトとプランの早い決定を最も大切なことのひとつとしています。具体的には、1回目のエスキースで必ず10個のテーマを提出し、2回目のエスキースで3つに絞り平面図またはデザインを無理に絞り出すこと、そして提出1週間前の清

書図面の完成をクラスのコミットメントとしています。岡田さんの作品は、2回の授業ですでに『仕事上のパートナーが寝泊まりする住居』という変わったコンセプトとユニット形式のボリュームを組合せる計画の原型ができていました。授業ではデザインの明確な理由を求めています、ユニットの大きさと組合せの理想を探して沢山のスタディーを重ね、実際にあっても話題を呼びそうな建物にすることができました。あっさりしたキャラクターの岡田さんですが、スタディーを繰り返す熱意の重要さを伝えることができたと感じています。設計の仕事を熱く楽しく歩んで行ってほしいと願っています。（森田敬介）

日建学院賞

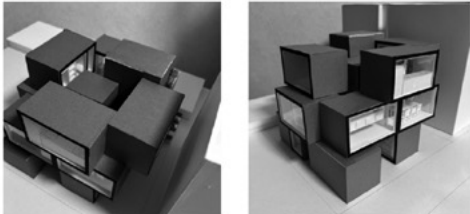
形状
等しい寸法、構造のブロックで構成されており、中銀カプセルタワービルのようなユニットを意識したつくりとなっている。

積み上げ方、ガラス窓の配置などにも模型段階で複数回試行を行い最終的な形状を決定した。



作業室
二つある作業部屋のみユニットを縦で使用することで集中して作業するのに最低限必要な広さと、天井が高いことで解放感を演出した。





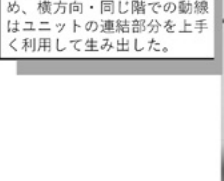
タイトル
タイトルは今回の課題においての作業やこの案に至った思考みたいなものを組み込んだ。同一形状のユニットを用いて今回の課題を考えると決めるとき、それをいかにずらして面白味を生み出すのか。どのように詰んで理想の形へと持っていくか。各部屋ごとの繋がりが生活する人の動線をどのようにつなげていくのかなど考えなくてはならないことが多く大変ではあったがその工程こそが今回の設計課題のミソで重要な点だと思いそれが踏めかつ分かったりやすく伝わるようにした。

コンセプト
仕事上のパートナーのような関係の二人（ライターと写真家など）が仕事を行ったり軽く休息をとったり誰かとミーティングをしたりできる空間を目的とした。



ずらす、詰む、つなげる

縦方向の動線は階段室にまとめ、横方向・同じ階での動線はユニットの連結部分を上手く利用して生み出した。



三段目



そこまで大きくない空間である一つ一つのユニットを上手く居心地のいい空間にしていくためにガラス窓を用いて閉鎖的になりすぎしてしまうことの無いようにした。

二段目



一段目



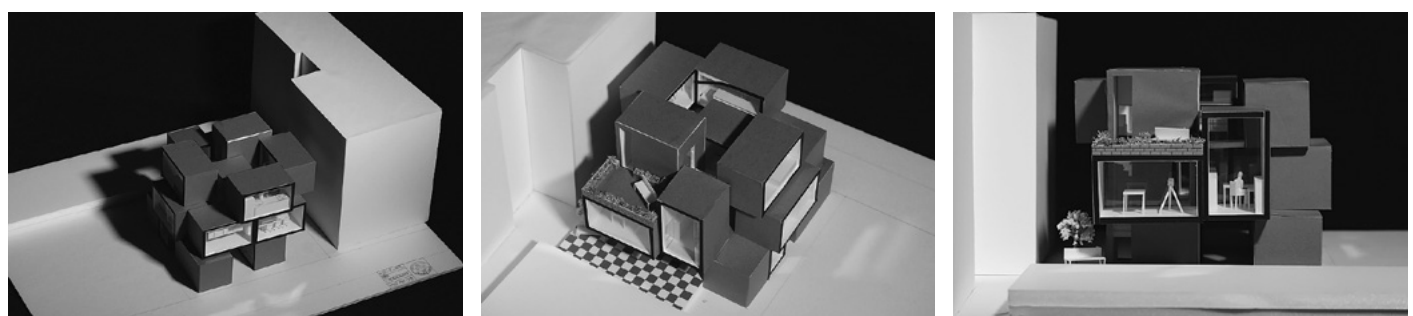
目線
道路側から川の方で一階部分に空きを作ることで建物を通してや建物へ入るときにまっすぐ公園や川の景色が見えるようになっている。



水辺に立つ住宅	
表紙	
二年 森田先生班	
4023 岡田沙雪	

ユニット
高さ2500・奥行2500・幅4000のユニットを用いて考えた。この寸法は縦で置いたときにある程度部屋として成立する大きさであること、キッチンやリラックススペースが平均的な家具の寸法を考えたときに成り立つようになど検討した結果このようになった。幅が4000であり2500の二個分の5000ではないことも建築物の形状を考えたときに秩序の無い側面を生み出すことができて良かったと思っている。

同じブロックを用いる秩序のある側面と、バラバラにずらして組み立てるという秩序の無い側面を持ち合わせた建築物を考えた。壁はコンクリート打ちっぱなしのような無機質なものにしたい模型ではそれを表現した。



柴田祥輔

「つながりの家」

■コンセプト

敷地を訪れたとき、自然と都市を結ぶ「つなぎ目」のように感じた。そこで、自然と都会、家族と家族、誰かと作品といった「つながり」をテーマに据えた。単にすべてを横並びにつなぐのではなく、家族同士は吹き抜けを介して縦に緩やかにつなげ、プライベートな空間と見知らぬ誰かとはあえてつながりを切るなど、それぞれの「つな

がりの距離感」を丁寧に設計している。

地下のギャラリーは街行く人に覗いてもらえるよう道路に大きく開き、作品の気配が街ににじみ出る。一方、作業場は外からの視線を遮りながらも、住まいとは吹き抜けを通して静かに連続する。

屋根はスロープ状に立ち上がり、誰でも登れるテラスとして自然と都会をつなぐ。建築そのものが風景そして環境の一部となり、人と都市、自然と生活をつなぐ場所となることを目指した。

■講評

都市と自然のあいだに位置する敷地を捉え、「つながり」を軸に関係性を編み直した提案である。家族間は吹き抜けを介して縦に緩やかにつなぎつつ、ギャラリーや屋上テラスを通して街を受け入れる構成により、内外の関係を

段階的に調整している点に本計画の強度がある。さらに、川からの船によるアクセスを取り入れることで、水辺交通の将来を見据えた視点を持ち込み、都市スケールでの接続を示している点も評価できる。見せる／遮るを操作しながら距離感を設計している点は、境界を層として扱う姿勢として有効である。CG や3D プリンターを用いたスタディにより空間の連続性やスケール感を丁寧に検証していた点も良い。その上で、家族・街・水辺といったそれぞれの関係性が、光や素材、開き方の違いとして空間に表れることで、計画の意図はより明確になるだろう。今後も関係性を編む視点を軸に、設計を深めてほしい。

(金子太亮)

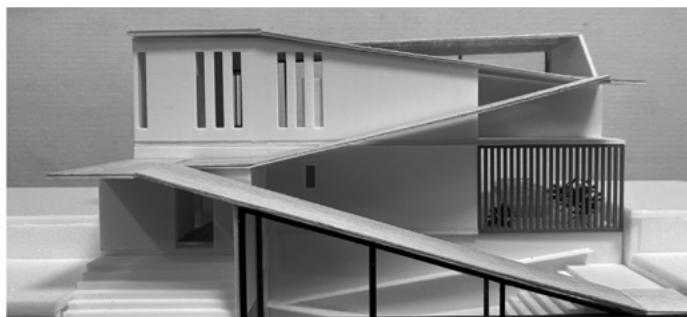
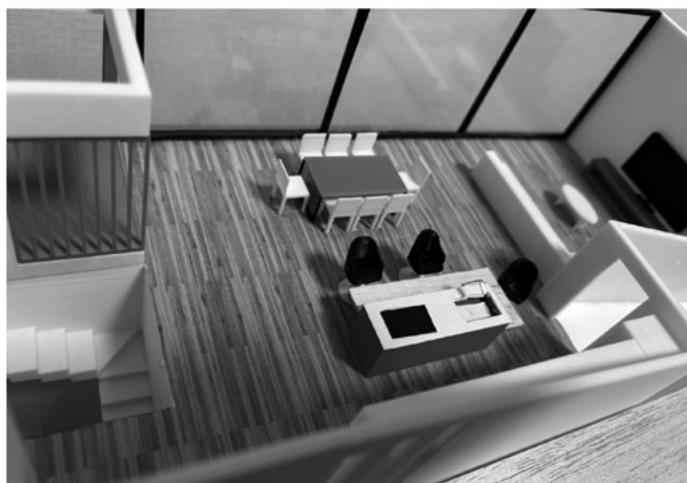
日建学院賞

つながりの家

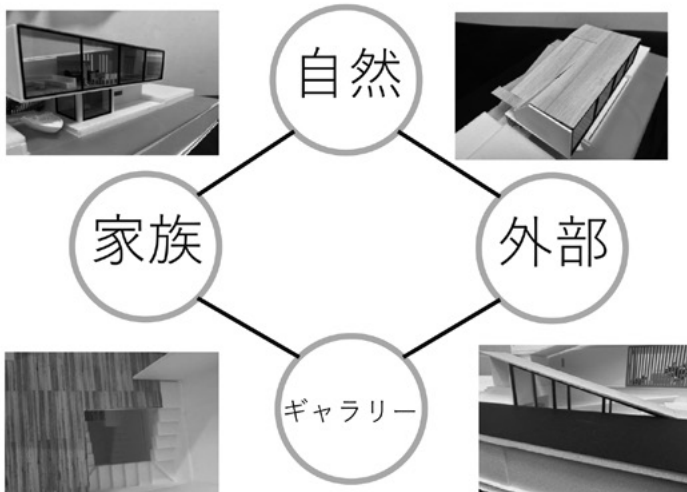
～自然と家族と誰かのあいだ～

CONCEPT

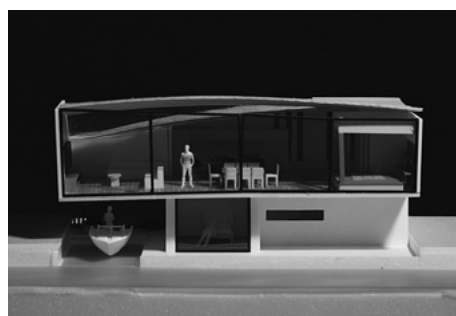
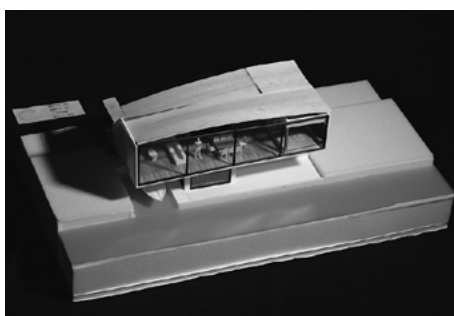
駅に近く、片側を道路、もう片側を川に面した細長い敷地を訪れたとき、自然と都市を結ぶ「つなぎ目」のように感じた。そこで本計画では、自然と都会、家族と家族、誰かと作品といった「つながり」をテーマに据えた。ただし単にすべてを横並びにつなぐのではなく、家族同士は吹き抜けを介して縦に緩やかにつなげ、プライベートな空間と見知らぬ誰かとはあえてつながりを切るなど、それぞれの「つながりの距離感」を丁寧に設計している。地下のギャラリーは街行く人に覗いてもらえるよう道路に大きく開き、作品の気配が街ににじみ出る。一方、作業場は外からの視線を遮りながらも、住まいとは吹き抜けを通して静かに連続する。屋根はスロープ状に立ち上がり、誰でも登れるテラスとして自然と都会をつなぐ。建築そのものが風景そして環境の一部となり、人と都市、自然と生活をつなぐ場所となることを目指した。



DIAGRAM



水辺に立つ住宅	
プレゼンテーションボード	
二年 金子師班	
4055 柴田 祥輔	



デザイン演習Ⅰ 第2課題
環境と住宅を考える
—水辺に建つ住宅—

馬場洋登

「光の断片」

■コンセプト

計画地を実際訪れてみて、親水空間と周りの建築物の調和というのが自分には感じられなかった。そこで、自然につながり、互いを引き立てるような空間づくりを目指すために、敷地を削り、公園とのアクセスを可能にすることで調和を表現した。

この住まいは、美術収集家としての活動と、個人の生活空間とが、重なり

合いながらも独立性を保つように設計されている。

今回の課題では、ルーブル美術館のデザインを住宅というスケールに落とし込んでオマージュし、美術収集家のための住まいとして再構成した。制作の過程で、外側／内側での素材の違い・採光のバランス・景観の配慮を意識した。外側／内側での素材の違いでは、外側は硬い、反射する美術館のような静けさ／冷たさを表現し、内側は柔らかさ、安心感、落ち着きを表現する素材を選定した。

■講評

親水空間と周辺建築の関係に着目し、その場集まる人々を建築へと引き込むことで、新たな関係性を生み出そうとする提案である。敷地操作によって公園側からのアクセスを確保し、水辺

に集う人々と連続する構成は、美術収集を外へと開いて見せる住まいとして有効に機能している。生活空間と収集空間を分節しつつ重ねる構成も興味深く、折半構造による空間表現には独自のセンスが感じられる。ルーブルのガラスのピラミッドを参照し、美術館的視点から住宅へ読み替えた着想も的確であり、収集家の住まいとしての性格が外観に表れている点も評価できる。その上で、その発想が設計者の嗜好に留まらず、施主像としての思想や活動にまで踏み込むことで、建築としての必然性はより明確になるだろう。今後も自身の関心を空間として結実させる姿勢を大切に、設計を続けてほしい。
(金子太亮)

日建学院賞

- 光の断片 -

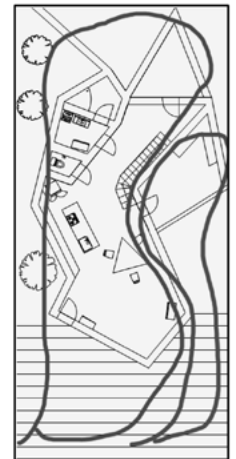
Concept

計画地を実際訪れてみて、親水空間と周りの建築物の調和というのが自分には感じられなかった。そこで、敷地削り、公園とのアクセスを可能にすることで調和を表現した。



特徴

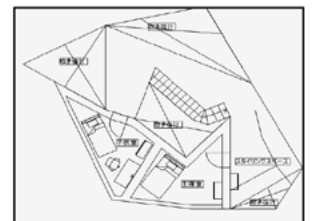
この住まいは、美術収集家としての活動と、個人の生活空間とが、重なり合いながらも独立性を保つように設計されています。図の青いラインで囲った部分がプライベートな生活空間、赤いラインが美術収集家としての空間です。



1F

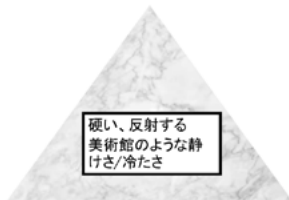
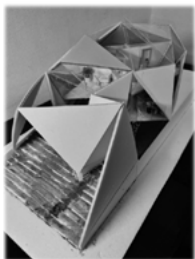
インスピレーション

このような形になった背景には、私自身が奇抜で独創的なデザインを好むという個人的な嗜好があります。中でも特に心を打たれたのが、ルーブル美術館の建築デザインだ。今回の課題では、ルーブル美術館のデザインを住宅というスケールに落とし込んでオマージュし、美術収集家のための住まいとして再構成しました。



2F

景観の配慮

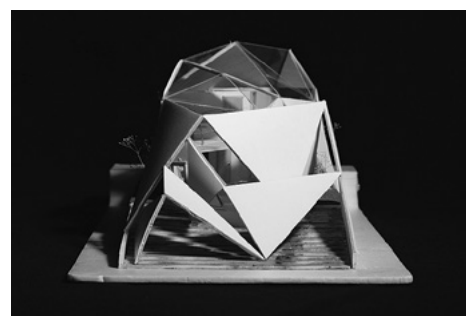
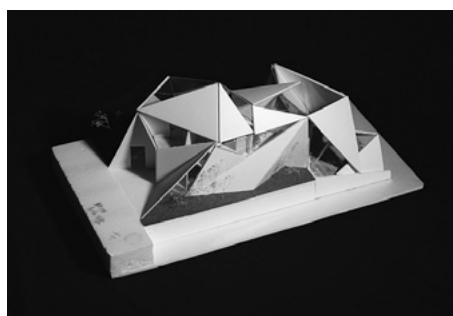
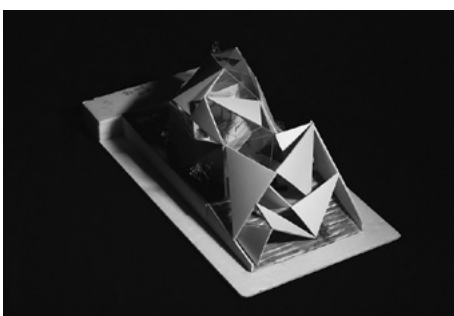


硬い、反射する
美術館のような静
けさ/冷たさ



柔らかさ、安心感、
落ち着き

水辺に建つ住宅	
表紙	
2年 金子先生班	
4092 馬場洋登	



森田裕斗

「旅路の環」

■コンセプト

効率や速度が優先される現代において、身体的な体験や自然との関係は、次第に薄れつつある。そうした状況に対し、本作品は、イギリスの彫刻家であるリチャード・ロングの代表作「A Line Made by Walking」に示される「歩くことによる創作」から着想を得ている。彼の作品に費やした半生を遡るように、来訪者は空間を巡りなが

らその歩みを追体験する構成となっている。草原に刻まれた足跡のように配置された4つの台形空間と中心の円環は、歩みの反復と自然の循環を象徴する。「旅路」は彼の探求の過程を示し、「環」は自然の循環と創作の連続性を表すものであり、人と自然の関係性を問い直す場となることを目指した。また、歩くという行為を通して、時間の積み重なりや空間の変化を体感的に捉え、鑑賞の在り方そのものを静かに問いかける。

■講評

アートミュージアムの骨子は、展示空間と動線計画、そして『アートが存在』である。森田氏は、20世紀を代表する美術家であるリチャード・ロングをテーマに挑んだ。

自然物である石や木を集め直線や円形で構成する作品コンセプトを『歩く』と解き、直方体を斜めに切り取った台形の展示室を『足跡』と見立てた。操作は小さいが、視線に自由度が生まれる。来館者が足跡を辿れば環が現れ、

立ち止まり、また歩きだす。足跡→環→足跡→環へと、作品のスケールや形態を考慮しつつ、ずらしを加えながら、つなげることで、展示空間と動線を無理なくまとめ上げている。

中心を貫く軸線から対称に、管理部門（裏）とカフェ（表）に振り分けている構成も明快で、敷地との余白部分には駐車場と、遊歩道へと降りていくテラスを配し無駄がない。

最後の展示室は、線的な作品が横十間川へと大きく高く開いてゆき、来館者はまさに終わりのない旅路へと踏みだす。

他者を読み解いて自身の設計に昇華させる感触を掴んだのではないかと思う。
(船曳桜子)



木村花漣

「江戸切子浮彩美術館 ～伝統と生きる空間～」

■コンセプト

指定された敷地は、猿江恩賜公園内にあり、自然がとても豊かで世代を問わず多くの人にさまざまな目的で利用されている。計画地周辺で伝統とされる江戸切子を主とした美術館を建て、長い歴史を守り次の世代へと受け継がれることを計画とした。

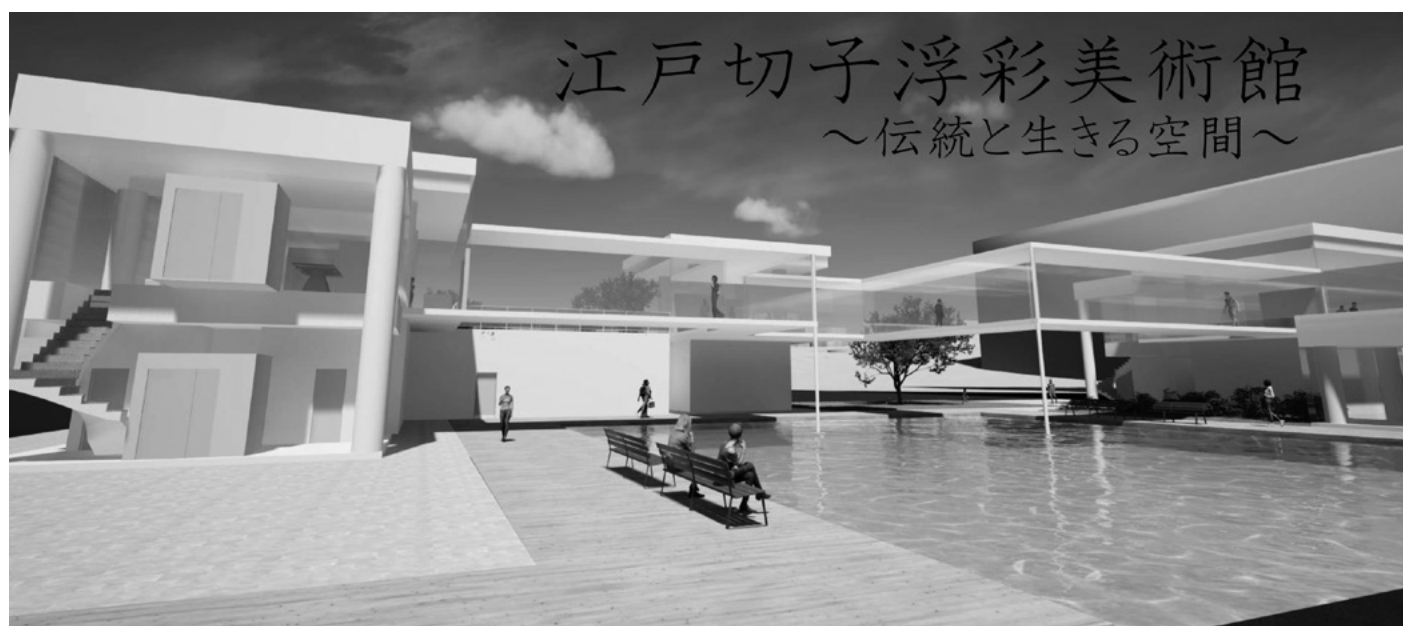
江戸切子の持つ特色としてガラスに

描かれた文様は光を反射させ万華鏡のような輝きを持つことから展示室のある建物の壁面をガラス張りかつ文様を加えることで自然の光を取り込み、光により鑑賞空間を作った。用途ごとに建物を個別化し水辺を囲むよう配置。空中回廊でつなげ複数の動線からそれぞれの建物の役割を明確に表し、利便性を追求した。水辺や植栽があふれる自然的空間に人工的な「ガラス」を配置することで多くの人の関心を引き、江戸切子というものを知ってもらうきっかけとなしてほしいと考えた。

■講評

計画地は中央にそれ相当規模の水盤を有し、また同時に横十間川にも隣接していた。私たちの班ではこの水盤の積極的な活用を促し、何らかの目的で水辺を再生させることを与条件の一つとした。木村案は江戸切子の作品展示を主題に、この地域に存在する複数の

硝子工房とのネットワークやワークショップ等のイベントを組み合わせることで、江戸切子の魅力をここに集約し、また発信しようというものであった。地域性を踏まえると現実性やその意義が強く感じられ、東京の下町の文化の継承や発信として大きな仕組みを提示できた。また建築の構成としては、地上部は公園として開放しながら、再生された水盤の周囲に展示室や工房を2階レベルで点在させ、それらを空中回廊でつないでいる。そしてさらに横十間川へとつながる。この回廊は水盤との近しい関係性にとても魅了を感じられた。江戸切子の色彩や透明感、そして水辺との親和性、緻密な検討を積み重ねた秀作といえる。（川久保智康）



01 技術の後世につたえる

建物は猿江恩賜公園内にあり、世代を問わず利用されていることから計画地周辺で伝統とされ、現代まで受け継がれている江戸切子を知ってもらいその長い歴史を守ることを計画として考えた。

展示室



工房



空中回廊



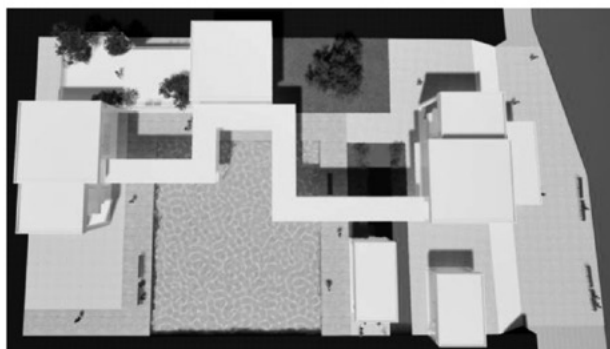
レストラン



02 散りばめられた伝統

計画地周辺には江戸切子の工房やショップが複数設置されている。美術館がそれらの中心となるよう、また計画地内での配置計画では建物を用途ごとに個別にし、それらを空中回廊などで繋げた。

配置図



長澤悠真

「街になる家」

■コンセプト

まず始めに計画敷地およびその周辺地域について敷地調査を行いました。門前仲町周辺ではファミリー世帯の減少が地域課題としてありました。そこで、多様な家族の暮らしができる集合住宅を提案しました。特定の街を書いたものではなく、都市の中に点在している商業機能や建物を考えました。そこでこの計画では、まちに横並びで存

在している建物を、90度回転させ、集合住宅の中に縦方向に重ねていくことを考えました。そして、その考えを集合住宅の階構成として落とし込みました。下層から「育ちの階」「働く階」「つながる階」「遊ぶ階」と、階ごとに異なる住まい方やそれに対応する商業機能を組み合わせ、建物全体で一つの「街」を形成することで地域とのつながりと新たなコミュニティの創出を目指しました。

■講評

『地域とつながる都市型集合住宅』とはなんだろうか。長澤氏は、門前仲町で近年減少傾向にあるファミリー世帯を呼び込むための魅力的な用途をいくつか挙げてダイアグラムを垂直的に配したのちに、それを水平に変換している。あえてそうしたのは個体で分散させるのではなく、多層にして吹き抜けでつなげることで「多様」な関係が生まれるとした。

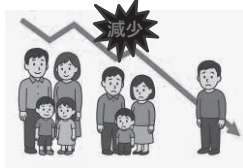
階が上がるにつれてアクセスや流れが悪くなる欠点はあるが、最上階をBBQ テラスにするなど屋上の利点を活かす構成や、光と風を取り入れて住人の一体感を生む吹き抜けで解消する試みを、丁寧に作られた模型やパースによって説得力を持たせた。

それぞれの階の個性が平面プランに表れているかはいささか足りないところもあったが、素材や色など、入居者の住環境を配慮した要素を与えることで無機質になりがちなグリッドプランが楽しげになっている。

もともと、建築の機能や用途を抽象化しグリッドで組み立てることを得意とする彼が、今後、そのスタイルを崩すところも見てみたい。（船曳桜子）

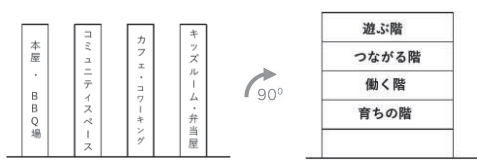


～問題～



ファミリー世帯減少

～Diagram～



街に点在する生活機能

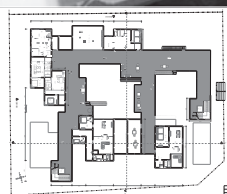
集合住宅の階構成

-----> 多様な世帯を受け入れる空間構成

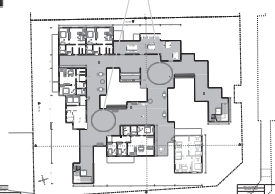
～Concept～



階ごとに共有廊下もただ廊下ではなく人と人がつながる暮らしの舞台として機能します



二階平面図



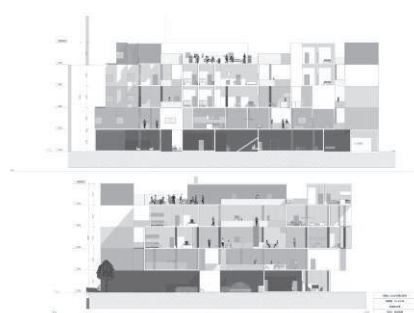
三階平面図



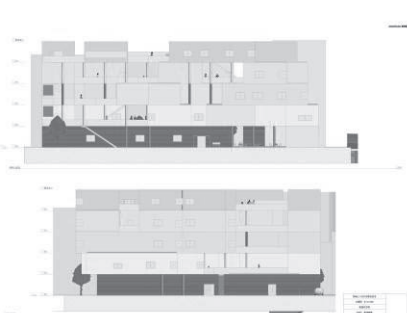
階ごとに柱や外壁の素材・色をすることで、視覚的に場所の違いが分かりやすくなり、住人が自分のいる階を自然に認識できるよう工夫しています。



吹き抜けを各階ですらして配置することで、上下階の住人の視線や気配が完全に遮断されず、部分的につながりが生まれる。



断面図



立面図

吉澤莉杏

「繋がり余白」

■コンセプト

本作品は、集合住宅における人と人、人と地域の関係を「距離」という視点から捉え直した計画である。敷地は人通りの多い道路側のにぎわいと、落ち着いた水辺環境を持つ川側という対照的な環境を持つ。この環境のグラデーションを建築内部にも取り込み、空間の中で段階的に距離感が変化する構成を提案した。建物は複数の住戸の箱を

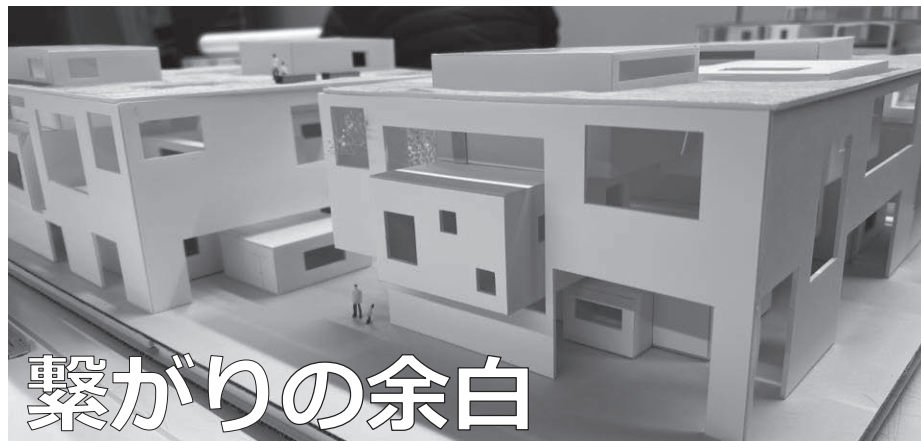
大きな外殻で包む入れ子構造とし、住戸同士をずらして配置することで生まれる余白を共用空間として活用している。これにより視線や動線が過度に重ならない、緩やかなつながりが生まれる。また住戸内にも入れ子構造を取り入れ、水回りと個室を中心にまとめることで家族の気配を感じながら暮らせる距離をつくった。公共から私的へと連続する空間の中で、居住者が関係性を選びながら暮らせる集合住宅を目指している。

■講評

入れ子構造による空間設計は、公的空間と私的空間の領域を重層的に交差させ、住居空間と都市活動領域の境界を曖昧化する意図が認められる。本手法自体は建築分野で広く用いられており新規性は限定されるものの、開口部の取り方や外部ボリュームの突出、隙間空間を介した光や風の導入など、空間的距離感の制御が精緻に行われてい

る点が評価される。また、各戸のプランニングにおいても水回りを中心とした入れ子構造が採用されており、家族の存在感を共有しつつ生活できる配置が意図されている。

一方、周辺の親水公園や広場との相互関係および中間領域における具体的な活動創出については十分に明示されていない。これらの点は居住者の主体的判断に委ねられる可能性が示唆され、設計者として地域社会との連携や空間活用へのアプローチをさらに検討する余地があると考えられる。しかしながら、課題趣旨を的確に把握し、建築空間の余白を立体的に捉える姿勢とその表現力に関しては高く評価できる。
(勝又 洋)



繋がり余白

Concept

集合住宅における人と人、人と地域との関係を「距離」という視点から捉え直し、入れ子構造によって近づきすぎず遠すぎない関係を生む空間構成を提案している。

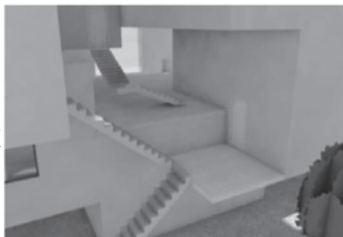
Diagram



1住戸を1つの箱としてとらえ、それらの向きや高さをずらしながら入れ子状に重ねることで、住戸間や地域との関係性を調整する立体的な構成としている

『隣人との距離』

“近づきすぎず、遠すぎない関係”
入れ子状にずらして配置した住戸によって、視線や動線が重なりすぎない、緩やかな隣人関係をつくる。



『公共と私的の距離』

“段階的なあいだ”

大きな箱と住戸の重なりによって、公共から私的へと連続的に変化する空間のグラデーションを生み出している。



『地域との距離』

“開かれた境界”

道路や水辺に対して開いた共用空間を介し、住民と地域が無理なく関われる距離感をつくっている。



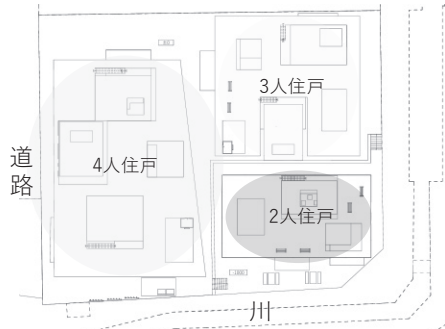
『同じ世帯での距離』

“近さが生む、自然な交流”

住戸内は水回りと最小限の個室のみを中央にまとめ、その他の空間を連続させることで、家族が互いの気配を感じながら過ごせる距離感をつくっている。



配置図



断面図



道路側から川側に向かって、4人世帯、3人世帯、2人世帯の順に並べている。道路側には子どもが安心して過ごせる広場を設け、川側には水辺と向き合う屋上空間を計画し、その中間には用途を限定しない多目的室を配置。これらの共用空間が異なる距離感を生み出し、居住者が関係性を選択しながら暮らせる住環境とした。

3 年生（前期：デザイン演習Ⅲ、後期：建築計画及び演習）

デザイン演習Ⅲ（前期）

第 1 課題

「海の駅」

（出題：佐藤信治、桔川卓也）

【課題意図】

海の駅とは、国土交通省により登録された、「海から、誰でも、いつでも、気軽に、安心して立ち寄り、利用でき、憩える」船舶係留施設である。離島振興策からスタートして、当初は大型のヨット、モーターボート等の利用環境整備や情報のネットワーク化・提供を目的に設置が推進された。誰もが利用できる船舶係留施設、施設の予約受付案内担当者の配置、公衆便所の設置の 3 点が必要最低登録要件となっている。このような行政的解釈から『海の駅』とは、休憩施設と地域振興施設が一体となった施設であり、単体としての機能に加えて海の駅ネットワークの構築が図られた結果、以下の 3 つの機能が浮かび上がってくる。

- (1) 休憩機能 海路利用者が 24 時間自由に利用できる休憩施設の提供
- (2) 情報発信機能 来館者に対してその地域の文化・名所・特産物などを活用したサービスの提供
- (3) 地域連携機能 それぞれの地域（町）の核となり、海路を介した地域（町同士）連携の促進

計画地：みなとみらい

「山下ふ頭周辺地区」

港の散歩や海の眺めを楽しめる場所を広く計画し、誰もが訪れるだけで楽しめる居場所をつくってもらいたいと思います。また、都市型である敷地の特徴を捉え、開放的な海のイメージ、港と街が一体的に感じられる新たなシンボルとなる施設を提案してください。

【設計条件】

- (1) 敷地条件
敷地形状、接道条件、周辺状況は、別添図面を参照。電気・ガス・上下水

道は整備されている。地盤は軟弱であり、杭基礎とするが、耐圧盤下の表現は不要。敷地設定範囲外への提案については、各班ごとの指導による。

(2) 建築条件

構造形式は自由。下記程度の規模であれば、建ぺい率・容積率の考慮は不要。基本的に隣地および道路境界より 1 m 以上セットバックさせる。

(3) 計画諸元

- ①建築面積：約 30,000㎡（内水面含む）
- ②建築諸室：延べ床面積の目安：合計約 2,500㎡（延面積の上限±20%）
・客用部門（約 2,300㎡）：玄関（300㎡）、休憩ラウンジ（300㎡以上）、カフェ（350㎡）、物販販売施設（400㎡）、観光案内・地域情報発信スペース（250㎡）、多目的室（200㎡）、軒下スペース（300㎡以上）、24 時間トイレ（170㎡以上）、授乳室・おむつ替え室（30㎡）、荷解きスペース（50㎡）、事務室・会議室（40㎡）
・管理部門（約 200㎡）：館長室（20㎡）、給湯室＋従業員化粧室（10㎡）、更衣室（30㎡）、廊下・倉庫（50㎡）
- ③屋外施設：
・規模、内容等については、創意工夫により提案を行うこと。・海をテーマに多世代交流の場とし、コンサートや多くの人でにぎわう催し物の開催に対応できる設えとする。・雨天や夏季にも利用できる一部半屋外の広場とする。

【提出物】

- (1) 表紙：作品タイトル、設計趣旨（テキスト・ダイアグラム、パース、スケッチ、模型写真等で明快かつ視覚的に表現）
- (2) 配置図（縮尺 1/500）：建築物は屋根伏とし、外構計画を表現
- (3) 平面図（縮尺 1/200）：各階平面、室名は凡例をつけて略号も可。1 階平面図には周辺の外構も記載
- (4) 立面図（縮尺 1/200）：4 面すべて、影や素材等を表現
- (5) 断面図（縮尺 1/200）：2 面以上、

水域と建物との関係がわかること（南北、東西それぞれ）

※水域まで入れる断面図のみ 1/300 とする

- (6) 模型（縮尺 1/200）：模型提出のほか、模型写真 2 カット以上を表紙にレイアウト
- (7) 内観パース：手描きでも CG でも表現方法は自由。1 カット以上

第 2 課題

「水族館」

（課題担当：佐藤信治、小平純子、勝又 洋）

【課題趣旨】

海の駅の隣接敷地に水族館を計画します。山下ふ頭周辺地区は、老若男女が集まり、新たな文化や価値を生み出す拠点として存在しています。

現代にふさわしい魅力的な水族館とは何でしょうか。生態系を扱う建築物としては、昨今の環境問題を軽視した建築をすることはできません。海辺の生態系を扱うことを通じて、これからの時代の「水族館」という施設の在り方を考察してみてください。

【課題のポイント】

- (1) 敷地条件の把握 立地、敷地の大きさ、施設規模、既存動線の位置を把握し、計画概要を捉える。
- (2) 水族館機能の把握 観客スペースと管理スペースの関係性。
- (3) 水族館機能の検討 教育、研究、展示、アミューズメント機能の関係性。
- (4) コンセプトの創出 説得力のあるコンセプトに基づく海と陸を結び新しい水族館の創出。
- (5) コンセプトの表現 コンセプトを具体化する水際空間の設計、屋外展示を含む造形性と表現力。
- (6) 地域再開発的配慮 敷地に隣接する第 1 課題の海の駅と後期課題の宿泊施設との連動性。

- (7) プレゼンテーション 上記各段階で何を考え選択したか、過程と結果を表現する。

【計画諸元】

- (1) 敷地面積：約 12,000㎡（予定）
- (2) 延床面積：約 5,500㎡
- ①パブリック部門：約 3,000㎡
（観覧室、レクチャールーム、レストラン＋カフェ、ミュージアム、休憩ロビー・休憩ラウンジ、エントランスホール＋廊下、来館者用化粧室）
- ②管理部門：約 2,500㎡
（展示水槽、作業室、飼育室＋研究室、荷解きスペース、事務室、会議室、館長室、宿直室、給湯室＋従業員化粧室、更衣室、管理エントランス＋廊下、機械室）
- ③屋外施設：
（導入施設、駐車場施設、その他のランドスケープ）

【提出物】

- (1) 図面
表紙
配置図：縮尺 1/500
各階平面図：縮尺 1/200
立面図（2 面以上）：縮尺 1/200
断面図（2 面以上）：縮尺 1/200
- (2) 模型および写真
①模型 縮尺 1/200
②写真 キャビネ判 4 点以上とする。
- (3) 図面提出仕様
A1 判横使い、左綴じ。コンセプトおよびゾーニング図、面積表並びに写真を貼ったものを表紙とし、レイアウト、着色は自由。図面表現は CAD を基本とし他の表現との併用も可とする。

建築計画及び演習（後期）

第 1 課題

「都市型リゾート機能を有したホテル」
（出題：小林直明）

	前期	後期
【担当】	佐藤 信治 長谷川洋平 小平 純子 勝又 洋 桔川 卓 高野 洋平 筒井 紀博 村山 一美	佐藤 信治 長谷川洋平 小林 直明 朴 世鎮

【課題趣旨】

前期第1課題に引き続き、同じ計画地内の隣接敷地に「都市型リゾート機能を有したホテル施設」の提案を求めるものです。敷地は、山下公園、横浜中華街、横浜港大さん橋、みなとみらい、赤レンガ倉庫などの横浜を代表する観光スポットが点在し、回遊性をもった「まち」が形成されています。横浜市によるIRの再開発計画が一時中断していましたが再開予定です。今回敷地も含め国内外の観光客誘致も期待されるエリアといえます。

リラクゼーション&ホスピタリティをどのようなデザインおよび機能・用途で感じさせ、周辺環境および歴史に呼応し、かつ海と自身が設計した海の駅、水族館との相乗効果をどのように図るのがか問われます。

【設計条件】

- (1) 計画地 敷地面積：20,351㎡
・敷地形状や接道条件、周辺状況等は別紙図面参照および現地調査による
- (2) 計画内容
・延床面積：22,000㎡程度、建物の高さは、31m内とするが、さらなる高層、一部客室コテージタイプ（平屋・メゾネット）も可
・一部海側に張り出した施設計画、または敷地内に海水を入り込ませたラグーン形成も可
・構造形式は自由。木耐火構造集成材または木とS造・RC造とのハイブリット構造等も可
- (3) 計画諸元
*各部門、各室面積は参考例とし、適度な設定を行うことを可とする
*駐車場50台、サービス用5台（屋外および屋内・地下階の複合も可）
- ①宿泊エリア：8,500㎡
ツイン・ダブルルーム100室程度、スイートルーム（コテージも可）10室、通路、階段、リネン室等
- ②パブリックエリア：9,300㎡

ロビー・共用スペース、レストラン、ショップ、宴会場・会議場（室）、ジム・スパ

③管理エリア：4,200㎡

裏方サービス諸室、機械室、廊下・その他

【提出物】

- (1) 図面
配置図：縮尺1/400、各階平面図：縮尺1/200、客室平面図・パース：縮尺1/50、立面図（2面以上）：縮尺1/200、断面図（2面以上）：縮尺1/200
- (2) 計画概要（表紙）
①計画コンセプトに合致したタイトル。
②設計趣旨は簡潔に分かりやすく、ダイアグラム、フロー図などを交えて、ビジュアルに表現。
- ③各階の床面積（部門別）および延べ面積を表としてまとめる。
- (3) 模型および写真
①模型は、全体：縮尺1/200。
②写真は、キャビネ判4点程度。

第2課題

「マスタープランとランドスケープ」
（出題：佐藤信治、朴 世鎮）

【課題趣旨】

計画敷地全体を扱います。海の駅と水族館、後で設計するホテルとをマスタープランによって一体的な開発としてまとめ上げてください。さらにはランドスケープデザインを加えることによって魅力ある屋外空間をデザインして、海の駅と水族館そしてホテルとが、あたかも1つの街のように相乗効果を生み出すことを目指してください。

【課題のポイント】

- (1) 車輻動線と人の動線を明確に分離し、安心して歩ける開発とする。
- (2) 客動線とサービス動線、観光バスの動線を整理してわかりやすい交通計画を作り上げる。
- (3) 駐車場は、海の駅、水族館、ホテルそれぞれに配置する。

- (4) 屋外空間においては、樹木の粗密感に配慮しながら、樹木のないエリア（開放的な広場など）と樹木の密なエリア（樹木に囲まれた心地よい木陰空間）を作り上げる。散歩道やジョギング空間にふさわしい小路の曲線形を考える。また、ベンチ、水景、四阿（あすまや／東屋）を適度な距離に配置して歩いて楽しい空間を作り出す。
- (5) 建築空間とランドスケープ空間を一体的に連続した空間としてデザインすることによって、より記憶に残る空間を作り上げる。建築内部からの風景を考えること、そしてまた、ランドスケープ空間と建築を一体的に考慮した街の風景を作り上げること。
- (6) 水際への人のアクセスを促すために、歩行者動線や親水空間の魅力を作り上げる。所々に木陰休息施設を設けることで快適に人を歩かせる工夫を行う。
- (7) マスタープランづくりではわかりやすい骨格を作り上げることが必要である。空間の軸線距離の分節を図り溜まりの空間となるノード空間の、空間と空間のつながりを

デザインするシークエンス、人の移動とともに視線の抜けを演出するビューコリドール（ビスタライン）の手法などさまざまなデザイン手法を駆使して魅力ある外部空間をデザインする。

- (8) 相模湾への眺望、伊豆半島や三浦半島の眺望、また富士山の眺望を借景としてしっかりと利用する。

第2+α課題

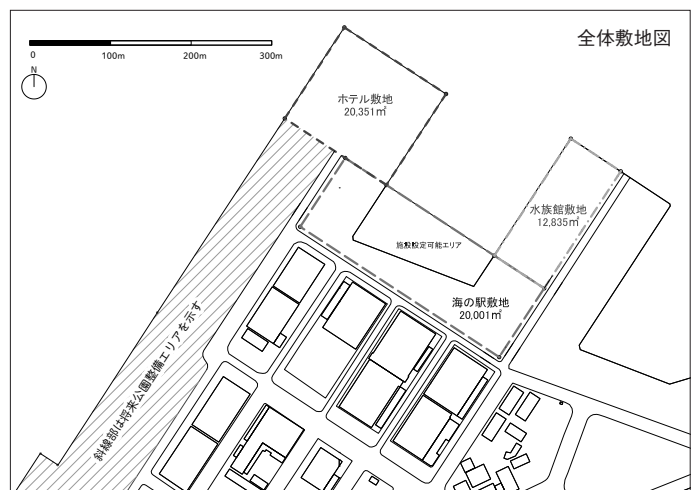
「プレゼンテーション」
（出題：佐藤信治、朴 世鎮）

【課題趣旨】

年度を通じて学習したことを総括する学習として位置づけ、これまでのすべての課題の成果を1つのプレゼンテーションとしてまとめて説明する技術を学ぶための演習です。

【課題の想定】

課題敷地のマスタープランおよび3施設の建築の設計者の立場となり、みなとみらい「山下ふ頭周辺地区」を開発して環境の充実を図り集客を図りたい開発者に対して、デザインプレゼンテーションを行う設定とします。



大塚望夢

「葉漏れ日に集う。」

■コンセプト

現代の臨海部では、内陸部に比べ緑とのつながりが希薄化している。その現状を捉え直し、海と陸の境界に緩やかな自然の移ろいを感じられる集いの場を提案する。計画地である山下ふ頭周辺は、人々が多く訪れる賑わい豊かな区域であり、都心臨海部の核となり得る可能性を有している。本計画では、「海の駅」を単なる移動の中継点や船

の係留所に留めず、都市における新たな水辺の居場所として再定義した。設計の要となるのは、海上設計特有の要素である船の動線と従来の計画要素である人の動線の融合である。両者の回遊性を高め動線を交差させることで、互いの存在を身近に感じられる空間を実現した。また、大屋根と随所に配置した木々によって生まれる「葉漏れ日」は、訪れる人々に安らぎを与え、風景と人々の営みを密接に結びつける。海側に大きく開かれた大屋根は、遠方からの視認性を確保し、海の駅としての本来の機能であるランドマーク性も備えている。海という広大な空間の中に、都市の賑わいと自然の温かみを混ぜ合わせて調和する、現代的な公共空

間となっている。

■講評

道のような木漏れ日のような海の駅の計画である。計画敷地は、山下ふ頭の最先端部、現在は新たな開発を待っている地域である。この道のような重なりの中には船だまりがあり、東西から延びている海岸線のプロムナードを延長してそれぞれがつながっている回廊としたところが評価された。

具体的には、道に囲まれた船着き場に垂直動線を設置し、船をおりた人はそのまま上部にある海の駅に向かうことができる。その後は、目的に応じて道を下っていき3方向からなるプロム

ナードへ向かうことができる。一般客などは海岸線を散策するなかで、自然にプロムナードに引き込まれていき、平坦な山下ふ頭から遠望できる。

プロムナードの重なりにある鉛直動線は円盤を重ねたようになっており、その隙間からは緑が垂れ下がっている。このため、この施設を訪れた人は鉛直に移動するなかで少しずつ変わっていく風景を堪能することができる。

形態操作をほとんど行うことなく、自然なカタチで敷地に沿うようにデザインされているため、あたかもずっと前からその場所に存在していたような施設となっていることと、機能がたくみに融合されていることが高く評価された。

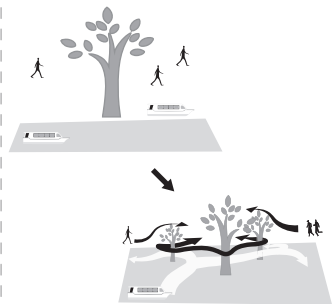
(佐藤信治)

葉漏れ日に集う。 —緑を介し人と船が集う場所—

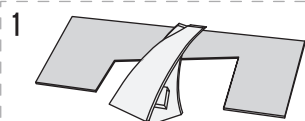


Concept

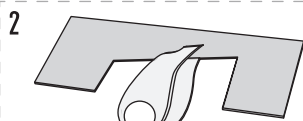
現代において臨海部の緑地空間の存在は希薄化している。本提案では、高まりつつある水と緑の親和性の需要に応え、海と陸を緩やかに繋ぎ人と船の居場所となる建築をすることで、今後の臨海部の在り方を再定義する。



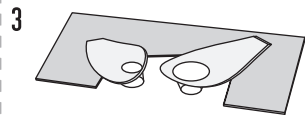
Diagram



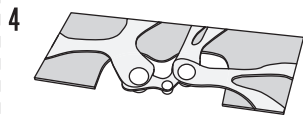
1 水辺をまたぐ大屋根を配置。海側から視認しやすく、ランドマークとしての役割を果たす。



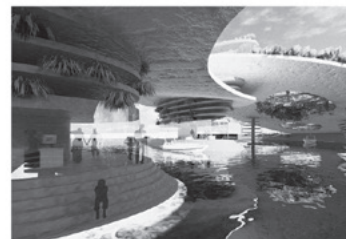
2 屋根に丸みを出し、自然的且つ柔らかな印象を生む。柱内に機能を設置することで造形と機能面を分けることができる。



3 基準となる屋根を分割し、敷地内を広く使うとともに機能部を増やすことで、単なる係留所に留まらない空間とする。



4 中央部に案内所を配置し、陸側からの動線を細分化することで多くの人と船が快適に訪れることのできる新たな居場所を形作る。



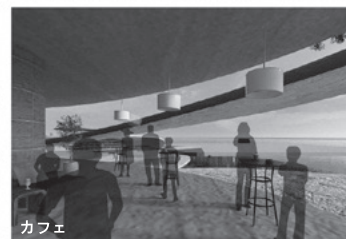
屋上テラス



受付



待合室



カフェ

加藤広樹

「船影にアーチを」

■コンセプト

計画地である山下町頭周辺は、かつて貿易と船で栄えた歴史を持つが、近年は船の利用が減少し、広大な敷地が街と海を隔てているという課題がある。本計画では、この地に再び「船の道」を復活させ、船と人が共生する新たな海の駅を提案する。私は、広大な敷地と海、そして街を一つの物語として編み出す設計手法として、横浜の異国文

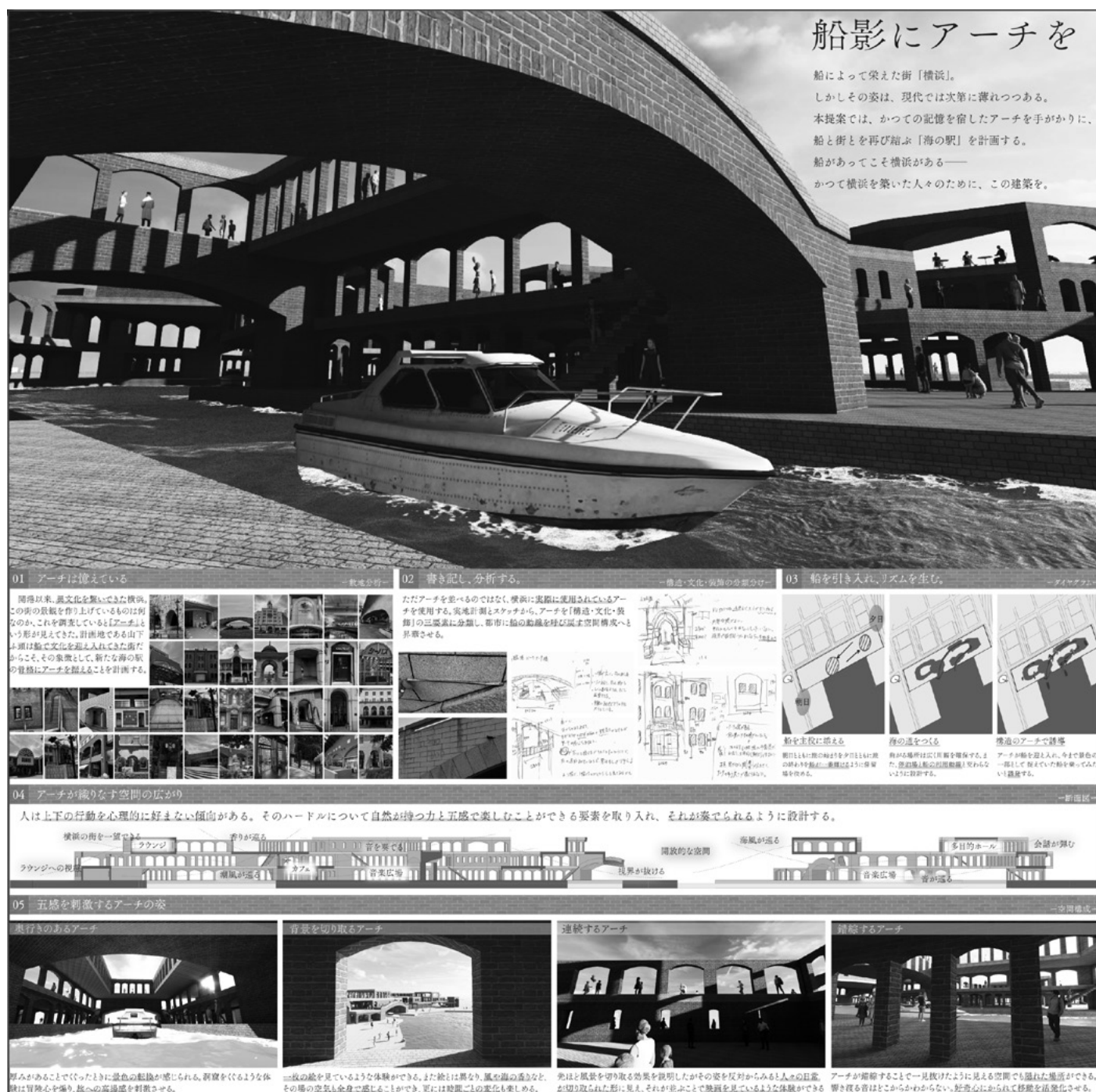
化あふれる景観を象徴する「アーチ」という形式に着目した。街の至る所に点在するアーチを空間構成の核とし、とくに「くぐる」という行為に焦点を当てることで、船と陸の動線が交錯するダイナミックな回遊性を構築する。船を引き込む巨大なアーチと、人々が歩む小さなアーチを連続的に配置し、スケールの変化によって切り取られる景色や、光、潮風、音といった五感を刺激する環境の変化を創出した。単なる観光施設ではなく、かつて船が運んだ文化や記憶を現代に蘇らせるこの装置が、海と街の境界を溶かし、横浜の新たな物語の出発点となることを目指す。

■講評

建築とは、おそらく時間間隔で存在しています。本作品はアーチの造形を記憶の媒体として活用し、海と街との新しい関係性を築く提案となっています。敷地全体に海とつながる水路を取り込み、船と人の流れが絡み合うような立体的な散策路が描かれており、リズムミカルなアーチの連続壁が構成するポケットパークが空間に奥行きを与え、アーチの隙間を通して潮風や音が通り抜け、自然と都市が融合する心地よさを体感できます。

本作品で最も評価したい点は設計プロセスです。いつでもどこでも簡単に敷地の情報を入手できるといった情報に溢れる現代において、私たちはその土地の歴史や風土を見失いがちですが、設計者は自ら街を歩き、観察し、アーチの景観特性を見出し、素材や寸法に直接触れながらスケッチを重ねていくことで、空間の誘導装置としてアーチを発見しました。アーチを歴史や文化を継承する記号として扱うことへの軽率さは否めないものの、設計者の丁寧な現地調査と観察力、そして造形へのこだわりが、作品全体に深みと説得力をもたらしており、今後も建築の本質を追求していく姿勢を期待します。

(勝又 洋)



平田寿珠

「渦咲」

■コンセプト

かつて、水族館は静的な「観察」の場であった。しかし、海に宿る生命は絶えず巡り、躍動するエネルギーに満ちている。本計画「渦咲（うずき）」は、命の循環を象徴する「渦」と、その流れが人々の営みとして結実する「花」を主題とした建築の提案である。建築は、中心から渦巻き状に広がる有機的なスラブと、花びらのようにひ

らく屋根によって構成される。内部には大小九つの水槽を配置し、とくに核となる大水槽に沿ってぐるりと巡る「回遊式動線」が、生き物との深い一体感を創出する。吹き抜けを介した多角的な観察は、常に変化し続けるダイナミックな視点を提供する。

さらに、屋外にはシネマや野鳥観察など、用途の異なる八つのテラスを展開。これら多様な「居場所」が外部へと人々の活動を拡張させ、建築を起点とした能動的な集客と交流を誘発する。屋内での沈潜した没入体験と、屋外テラスでの開放的な体験。この「渦」のような重なりが、自然と人が共に「咲く」新たな臨海部の原風景を紡ぎ出す。

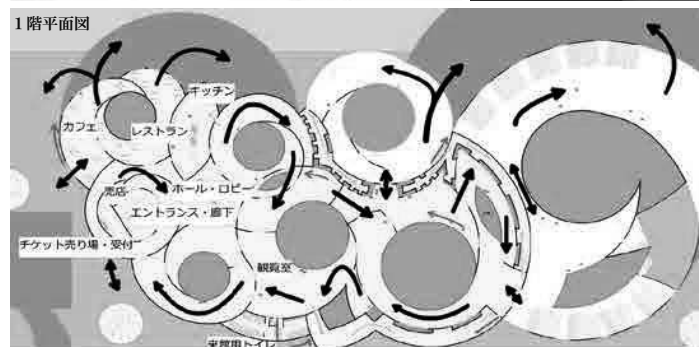
■講評

本課題は、これまでの計画とは一線を画す約5,000㎡という大規模なスケールを扱う。山下ふ頭の広大な自然と対峙しつつ、複雑なバックヤードと利用者動線を高度に両立させる難易度の高い内容である。

この規模を統率する手法として、平田案が提示した「幾何学を用いた骨格づくり」は非常に明快だ。円を起点に、その重なりから「渦」のような回遊動線を生み出すことで、建築のモチーフ

と空間体験を一体的に設計している。特筆すべきは断面計画の巧みさである。立体的な吹き抜けを介して大水槽を多角的に観察できる構成としつつ、管理者と利用者の動線を断面レベルで鮮やかに分離・整理している。

海洋建築は常に巨大な自然を相手にする。数万㎡の建築さえも自然の中では微々たる存在かもしれないが、その大きさと対峙し、いかに豊かな体験へと昇華させるかが設計の本質だ。平田案には、空間のリズム、静と動のコントラストによって、自然のスケールに負けない強さが備わっている。3年次の集大成として、諸条件を建築へと見事に昇華させた完成度を高く評価し、優秀作品に選定した。（枯川卓也）



～体験のリズムと空間～

本計画では、静かな観察空間と壮大な視界を交互に配置し、空間にリズムを生み出している。特に、通路を挟んだ後の視界が開ける演出は、訪れる人の感性を刺激する。水槽に沿ってぐるりと回る渦巻き状の動線は、常に新しい視点から生き物たちの姿を捉え、五感に響く体験を提供する。

～空間構成・ゾーニング～

中心から渦巻き状に広がる「回遊式動線」を採用し、大水槽に寄り添いながら立体的に移動する構成とした。吹き抜けを介して上下階の視線が交差することで、施設全体に一体感と視覚的な連続性を与えている。屋内は「静」の展示、屋外は「動」の展示と役割を明確化。海側に配置した用途の異なる多様なテラスは、休息だけでなくイベントや交流を促し、多角的な集客を可能にする。教育・研究エリアは、一般動線と分離しつつも緩やかに繋げ、自然な学びが交差する場を目指した。

水槽の役割

- ①入口ゾーン…親しみと癒し。淡水魚の展示。
- ②海辺の魚ゾーン…浅瀬に棲む身近な海の生き物を展示。
- ③上下から観察・浮遊感…中層を泳ぐ魚を二方向から観察。
- ④擬態と個性のゾーン…独特な姿や動きの魚を紹介。
- ⑤群れのゾーン…魚の群れの動きを体感できる展示。
- ⑥最大スケール…大型魚を立体的に観察できる大水槽。
- ⑦クラゲ・幻想のゾーン、小水槽…静けさと光に包まれた幻想的な空間。小水槽には光る・不思議な生き物。発光や擬態をテーマにした小展示。
- ⑧、⑨川の流れゾーン…流れに沿って成長を見せる展示。

テラスの役割

- 1体験スペース見学テラス…魚の様子を外から見渡せる見学・観察用のテラス。
- 2.6従業員用テラス…職員専用の屋外休憩スペース。リフレッシュや短時間の休息を目的とする。
- 3野鳥観察テラス…視野が広い場所で、四季折々の野鳥を観察できる自然体験型のテラス。
- 4カフェテラス…カフェと連続した屋上スペース。海風を感じながら飲食や会話を楽しめる。
- 5学びのテラス…ワークショップや野外授業など、教育プログラムに活用される屋外学習空間。
- 7屋外シネマテラス…夜間には映画上映などのイベントを実施可能な、特別な屋外体験スペース。
- 8リラクステラス…海を望む静かな休憩スペース。来館者がのびのびとくつろげる場所として設けられている。

四階平面図



依田怜佳

「種を編む」

■コンセプト

現代の水族館には、「見て、撮って、きれいだった」と消費される受動的な鑑賞体験が多い。過剰な情報が先回りして与えられる空間では、来館者は自ら問いを生む前に展示を受け取り、思考が深まらないまま体験が終わってしまう。本計画は、そうした水族館の在り方を見直し、水族館を「思考の種」を見つけ、育て、編み込んでいく場所

として再定義するものである。生物としての“種”を展示するだけでなく、来館者の内部に芽生える思考そのものをもう一つの“種”と捉え、その生成過程を建築空間へ落とし込む。計画地である山下ふ頭は、多様な文化や価値観が交差し、新しい視点が生まれ続ける都市の結節点であり、その混ざり合いを背景に、この場所ならではの思考のかたちを水族館として編み上げる。内部空間には、心理的・身体的・社会的という三つの視点をルートとして埋め込み、展示を単なる鑑賞対象ではなく、多角的に捉え直す体験へ転換する。地下へとゆるやかに落ちる動線や重なり合う平面・断面的構成を通じて、発見が次の問いへと連鎖し、来館者の内部

に新たな思考を芽吹かせる水族館を目指す。

■講評

2025年の3年生のデザイン演習Ⅲと建築計画及び演習は、山下ふ頭の先端にある三つの突堤部分の左側と中央の間の敷地で三つの施設を計画、設計することである。水族館はこの敷地の中で、突堤の中央で計画されている。

依田さんの作品は、ペイブリッジを望む敷地において、「種を編む」と題して展開されている。しかしながら、何が種なのかはよく分からない。そこで展開されるのは、屋根の形状変化で

行われる空間操作である。具体的には、大小さまざまな三角形の屋根を組み合わせ、その下に垂れ下がるような形状の個水槽を配置している。それを作者は編むと名付けている。人々がそのいくつかある水槽を縫うように歩くことを編むと言っているようだ。しかしながら、編むその先への展望がいまひとつ見えない。水族館の中心部に集まった観覧者たちが、さらにその外側に展開していく工夫がいまひとつ見られないのである。水族館内を自由に観覧させるという行為自体は、それほど珍しい計画手法ではないが、そこからの発展に乏しいことは全体的な形状が美しいが故にことさら残念である。

(佐藤信治)



多角的な視点を持たせ思考の生まれへ誘う

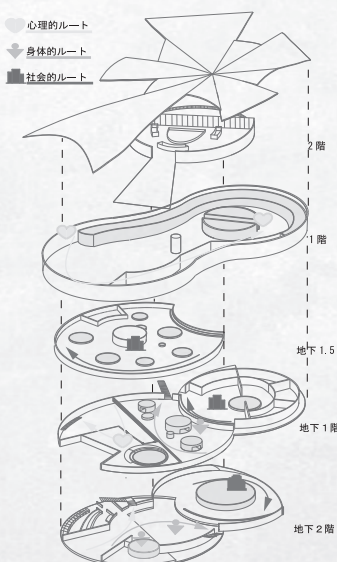
人が持つ視点の代表的である“心理的、身体的、社会的”の3要素を空間内のルートへ構成させ、消費的な水族館の見て終わる空間から思考を芽生えさせ、見て終わらない空間へと昇華させる



解放感、閉鎖間のある水槽を構成した心理的に見ることが出来る水槽、水族館を自らの身体を動かすことに身体的に新たな発見を促す水槽、この町自体と一体化させた水槽や、裏方の導線を合わせることでより俯瞰的に見ることができる社会的視点により、来館者に思想の種を持たせる。



3要素のルート構成



内観パース



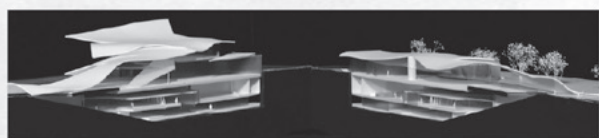
地下1階心理的ルート

下の階と吹き抜けでつながり、隣と隔てつながることにより、この空間にいないものの声とこの空間にいる魚というあいまいな空間を生み出す



地上1階社会的ルート

水族館正面に立つみなとみらいの街並みと水槽を挟み込むことにより、時代とともに変化するみなとみらいを水槽越しに体験することができる。



模型写真

建築計画及び演習 第1課題
都市型リゾート機能を
有したホテル

松原 愛

「海燈」

■コンセプト

横浜は来訪者の約9割が日帰り客であり、夜の魅力が十分に伝わっていないのが現状である。港に停泊する船の灯りや水面に映る都市の光、遠くに広がる夜景など、横浜の夜には昼間とは異なる豊かな景色が存在する。しかしそれらは主に「見る景色」として消費され、滞在体験へと十分に結びついていない。観光動線は昼間に集中し、夜

の魅力を経験する機会は限られている。そこで本計画では、夜景の光を身体的な体験へと転換するホテルを提案する。横浜の夜景は、点・線・面の光に加え、水面反射や動きによって構成される。これらを開口や水盤、吹抜といった建築操作へ翻訳し、都市の光を内部に取り込むことで、横浜の夜を五感的に体験できる空間を創出する。また、室内からは開口部を通して海と都市の夜景が広がり、テラスや水盤によって水面の反射光が空間へ取り込まれる。内外の境界を緩やかにすることで、宿泊者は室内にしながら港の光や水の変化を感じることができ、客室は都市の夜景と滞在体験を結びつける場となる。これらの体験をきっかけに利用者を街へ

と送り出し、夜の魅力を都市全体へと広げることを目指す。

■講評

観光立国を推進しインバウンドが増加する中、横浜地区には外資系ホテルブランドも含め数多くの都市型リゾートホテルが林立している。そのなかで、独自のホテルコンセプトを掲げるのが課題である。ウォーターフロント立地性を生かし、水を利用した光の建築的コントロールによって、リゾートホテルの重要なニーズである「癒

し・リラックス」を感じさせる空間を提案している。光の数ある現象を建築内外に取り入れていることで、宿泊客に対して食事、サービス等とは違った「おもてなし」を提供する新しいホテルの在り方を提案できている。人の脳をリラックスさせる「光のゆらぎ」の空間を実現する配置計画・平面計画・断面計画となっている。ホテルブランドの運営、オペレーションのサービス提供と同時に、建築自らの付加価値サービスを提供できる建築提案ともいえる。宿泊客は、昼夜問わず季節の変化によって光の空間常時体験ができる独自のコンセプトにより高い満足度が期待され、リピーターの獲得につながる事業性も見込まれる。(小林直明)



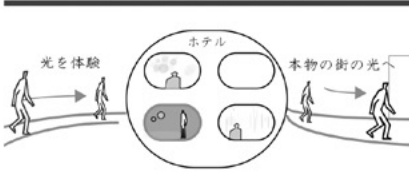
00 失われた夜の横浜体験

—背景—



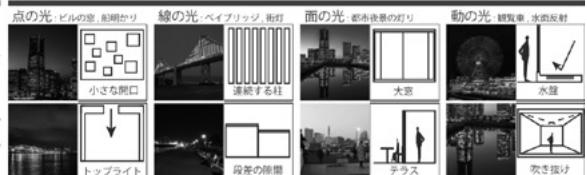
01 夜の媒介としてのホテル

—設計趣旨—



02 点・線・面と動の光

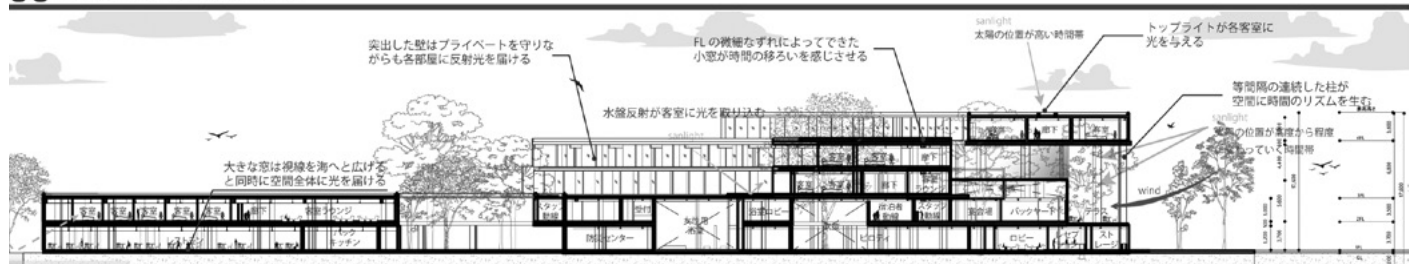
—設計手法—



横浜は約9割が日帰り客であり、豊富な観光資源に対して滞在空間が不足し、横浜の夜の魅力を改めて捉え直す必要がある。横浜で、建築が光を受け止め都市へと広げる場を計画する。横浜の夜景を構成する複数のスケールの光を点・線・面・動という特性で整理し、それを建築操作へ転写することで横浜の夜景を身体的に体験できる建築空間を構成する。

03 光を取り込む断面構成

—断面図・パース—



都市型リゾート機能を有したホテル

渡辺 徹

「Grid Hack」

■コンセプト

現代のホテルは効率を優先するあまり外界から切り離されている。決められた経路を歩むだけの滞在では、横浜という港町ならではの潮の香りや風景とのつながりも失われてしまう。この受動的な体験を変え、訪れた人が自ら居場所を選び、変化を生み出していくような、二度と同じ空間にならないホテルを提案する。

敷地全体を大きな木造格子の骨組みとし、そこに客室を少しずつずらして配置する。生じた隙間は光や風を通す庭となり、他者の気配が思いがけない交流を生む。さらに敷地内へ小川や緑を引き込み、建物の中心を雁行させて配置した。これにより、街に向かって開かれた公園のように人が集い賑わう場をつくり出す。

滞在者は動かせる壁を操作し、自然や周囲の人との距離感を自ら調整できる。内部での過ごし方が外へと滲み出し、建物の外観は刻一刻と変化し続ける。どこも同じ風景になりがちな都市空間で、人々の滞在がそのまま建築の表情を更新していく。あえて完成させず、常に成長し続ける新しいホテルの

在り方を提示する。

■講評

本提案は、パブリックとプライベートのゾーニングが明快に整理され、客室やロビーが海景や水路、庭園など周辺環境を効果的に取り込んでいる点が高く評価できる。とくに広いテラスを備えた客室構成は、滞在者に開放的で多様な過ごし方を提供し、リゾートとしての魅力を高めている。また、樹木の枝を想起させる柱表現と屋上緑化は、海辺に森を重ねるような象徴性を持ち、建築全体に一貫したコンセプトを与え

ている点が印象的である。

内部空間と外部環境との関係性を深めることで、より豊かな空間体験へ発展する可能性がある。開口部の計画を工夫することで、プライバシーを確保しながら海や緑の気配を取り込み、自然とのつながりを感じられる空間構成が期待される。また、図面表現において方位や周辺環境、諸室名称等の情報を整理することで、提案の意図や空間構成がより明確に伝わるであろう。

総じて、本提案は明確なコンセプトと高い空間提案力を備えた魅力的な作品であり、内外の関係性を深化させることで、完成度の高いリゾート建築へ発展することが期待される。

(朴 世鎮)



01 均質化する滞在 —背景—

現代のホテルは、遊覧船の動線によって管理されている。遊覧船システムがある中で、宿泊体験は均質化し、身体的な自由は制限されている。

02 選択の余地を失った港町 —敷地—

現在のホテルは、横浜らしきともいえる外観の再現と遊覧船の動線によって、均質化された空間となっている。この完成された都市空間の中に、新たな可能性を注入する。

03 ホテルの分解と再構築 —建屋操作—

既存のホテルの骨組みを分解し、新たな空間を構築する。このプロセスにより、建物の外観は刻一刻と変化し続ける。どこも同じ風景になりがちな都市空間で、人々の滞在がそのまま建築の表情を更新していく。

04 環境を呼び込む敷地計画 —敷地操作—

1. 小川とランドスケープの導入
2. 機能配置による賑わいの創出
3. コアと客室の配置
4. 雁行するコアと客室の配置

05 更新し続けるファサード —空間体験—

客室はマス目のグリッドで構成され、そのうち1マスは壁となっている。本建物の中心部で、客室配置をずらし、移動性を確保することで、風や光、他者との距離感を自ら調整できる。人々の滞在がそのまま建築の表情を更新していく。この完成された都市空間の中に、新たな可能性を注入する。



ランドスケープと プレゼンテーション

枝 夕葵・望月琢真・吉村咲穂
「Editorial」

■コンセプト

カジノ誘致が白紙となった山下ふ頭。市民の声を分析すると、求められているのは短期的な利益を追う消費的な開発ではなく、恒久的な緑豊かな環境であった。そこで本計画は「何をつくるか」ではなく「何を回復させるべきか」を問い、あえて建てないことを価値とする「ネガティブ・マスタープラン」を提示する。

高度に人工化された埋立地であるこの場所に、人為を手放した「自律する森」を導入し、人工と自然を対比させ再編集する。植栽にはミヤウキメソッドを参照し、耐潮性のマント群落、極相林、竹林を適材適所に配置。間伐材の受け入れにより林業問題にも応答し、管理に依存しない都市インフラとしての森を構築する。空間は山下公園側から「森→無形文化の空間→有形の建築群（海の駅・水族館・ホテル）」へとグラデーションに展開し、境界に水を引き込み空間の切り替わりを強調する。かつての運搬路をなぞる空中回廊には、鉄とガラスによる「楔」を支持体として打ち込む。圧倒的な自然の中でも、港が積み重ねた歴史と記憶を、人工の

痕跡としてつなぎ止める設計とした。

■講評

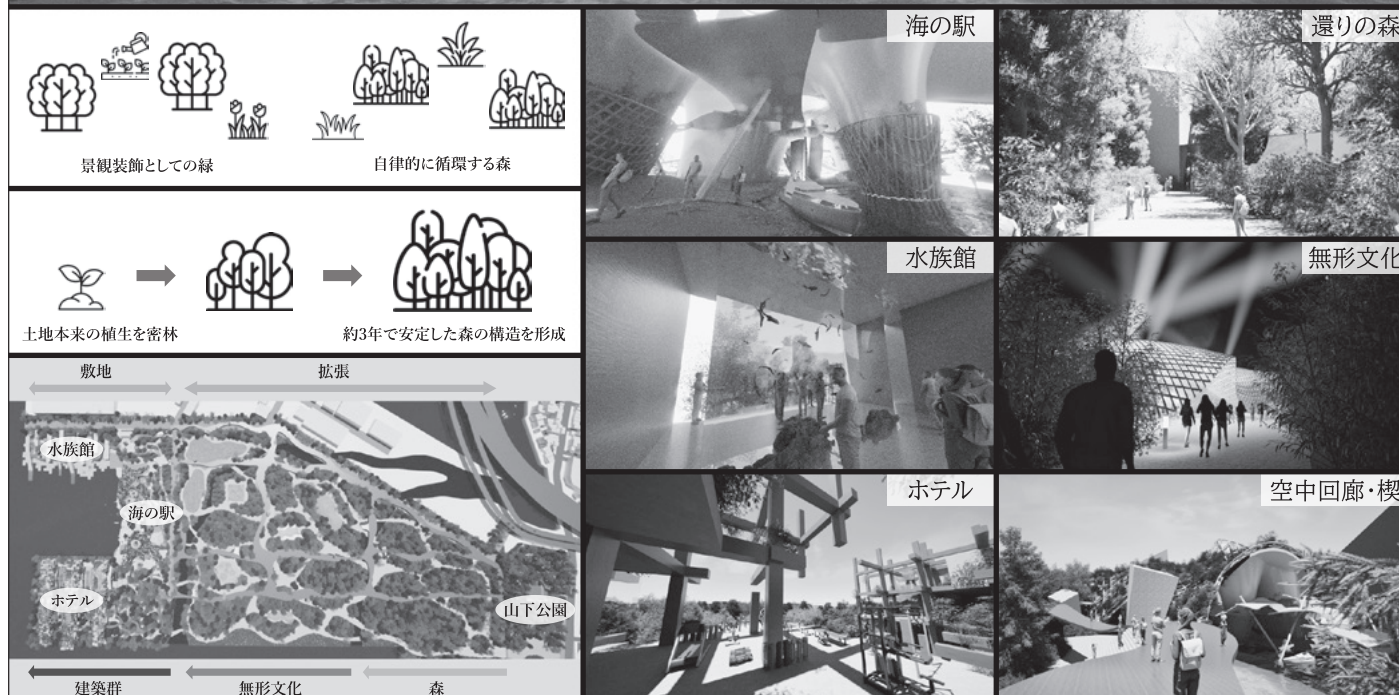
既往の大規模開発事業が限界を迎える中、実際の山下ふ頭再開発 市民検討会の意向を取り入れたことで、現実の提案にも成りえる点が高く評価された秀作である。商業性、経済性だけを重視した不動産寄りの再開発ではなく、住民は恒久的な自然豊かな緑と水空間を望んだ。その要求と、今までの山下ふ頭の流通機能の歴史もリスペクトし、さらに横浜の文化、歴史を融合させた提案である。山下公園の内陸側からランニングコストにも配慮した自律的に循環する森を形成し、山下ふ頭先端の建築群にアプローチする。その中間領

域には音楽、美術、工芸等の横浜地域独自の無形文化と歴史を体験できる施設を自然の中に設置した。それらのアーカイブを模型の夜間照明にもなるガラスモニュメントを設置した空間でつなげる。ふ頭最先端施設の海の駅、水族館、ホテルは自然との連携で木とのハイブリット構造である。最初に訪れる海の駅は自然と建築の融合を具現している。水族館は学術と連携し、魚類とそれに係わる生物資料、漁業生業にも関係した書籍も併設する施設となる。ホテルにおいては流通機能の4号倉庫上屋の鉄骨フレームを残し、流通の歴史を彷彿とさせるエントランスホールと、木造フレームが交錯した独創的な宿泊施設である。

(小林直明)



「何をつくるか」ではなく、「何を回復させるべきか」。
人工の極致である山下ふ頭に自律する森を導入し、港の記憶を未来へ繋ぎ止める。



石渡晴生・岡田海豊・村谷彩花
「水上体験都市 Re:base」

■コンセプト

本計画は、山下ふ頭および横浜港全体を対象に、人と海の関係性を再構築する提案である。開国以前、横浜は人と海とが生活で密接に結びついていたが、港湾整備や物流機能の発展により、人と海との間には距離が生まれた。さらに近年では、港湾機能の外部移転に伴い内側の港は空洞化し、新たな役割が求められている。そこで本計画では、

市民の「海と触れ合いたい」というニーズと横浜の持つ国際性に着目し、空洞化した横浜港を新たに水上レジャーの特区 WAF として位置づけ、ドラゴンボートや sailGP など国際大会の会場とすることで元来の港湾施設としてではなく親水的な港へと変える。山下ふ頭ではその拠点として人工ビーチやカヌーなどの静的体験のできる感覚体験エリア、大会の中継やホテルなど運営の中枢を担う間接体験エリア、水上バイクやウエイクボードなど本格的なアクティビティを楽しめる直接体験エリアの三つに分け、水上体験都市を形成した。これにより横浜港を「交易の港」から「体験の港」へと転換し、都市と自然が再び結びつく新たな港湾空間を目指した。

間を目指した。

■講評

横浜における、山下ふ頭の最先端地区の再開発計画という課題である。

本計画案は、機能展開を図る山下ふ頭の敷地に海の駅と水族館および都市型リゾートホテルを統合する再開発計画である。

この計画案の最大の魅力は山下ふ頭に留まらず、大きく横浜港全体を考えたところにある。既存の港湾機能の移転に伴い、空洞化した横浜港のベイブリッジから内側を海洋レクリエーション特区とすることによって、その海域を再解釈することにある。つまり、この海域をマリンスポーツやレジャーの

自由なフィールドにすることを目指している。首都圏の中で海と都市が最も近い横浜だからこそこうしたことが可能となったのである。ここではこの特区を WAF (water active front) と名付けている。具体的には、マリフィールドに SailGP やウエイクボード、ドラゴンボートの大会を誘致し、その競技を観覧するための施設を山下ふ頭に設けることを主眼としている。

このマリフィールドの中心は海の駅であるが、その入口は海廊になっており、ヨットやプレジャーボートで乗り込んだ客は、この施設を訪れ全体への期待を高める。その後は、海廊を通じてホテルや水族館へアプローチすることとなる。

(佐藤信治)



01. 横浜港の変化

計画地西側

02. 市民の声

提案計画

04. 人と海をつなぐ都市開発

ゾーニング



開国後、ふ頭の整備によって横浜は貿易港として大きな発展を遂げた。計画地の再開発には、横浜本来の姿を重視する市民の声が多い。しかしその過程で、人と海との間には物理的・精神的な距離が生じた。近年はレジャー需要が高まり、SUPなどを楽しむ人も増えている。

03. 大会会場を取り込む

設計概念

04. 港に新たな機能を与える

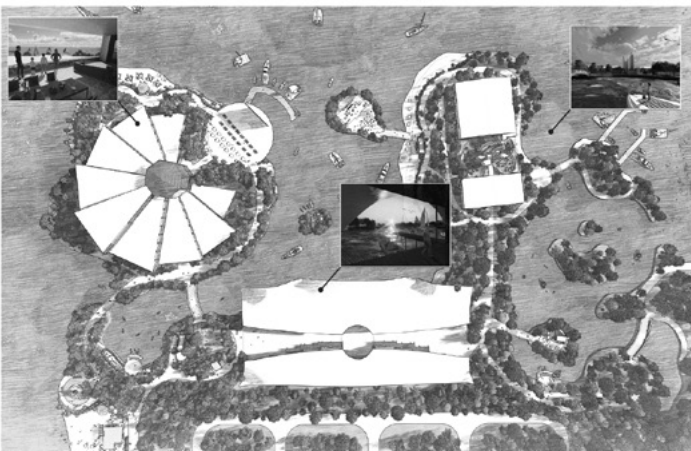
計画内容



水上アクティビティ先進地の海外大会を参考に、計画地へ大会会場を導入し、親水性と国際的な港としての魅力向上を図る。



計画地全体を「WAF (Water Active Front)」と位置づけ、貿易中心の港から、市民や観光客が楽しめる親水性の高い開かれた港へと転換する。



■本課題の目的と対応方法について

一級建築士となるためには、国土交通大臣が実施する一級建築士試験に合格する必要がある、その合格率は総受験者の約10%前後と低く、難易度の高い国家試験の一つといわれている。一級建築士試験は「学科の試験」と「設計製図の試験」から構成され、「設計製図の試験」は「学科の試験」に合格しなければ受験できず、建築基準法令の遵守に加え、課題条件に即した空間構成、構造計画、設備計画が求められる。

一級建築士コースでは、「設計製図の試験」を想定し、制限時間内に手描

きで図面を完成させる作図力を身に付けるための、製図法の基礎を学修することを目的としている。演習の内容としては、まず、平行定規をはじめとする製図用具の扱い方を学んだうえで、グリッドや柱、寸法線に加え、階段やトイレなどの平面図における基本的な要素の作図を行う。次に、過去の製図試験課題を用いて、課題文の読み取りやエスキスの方法を学び、試験課題のトレース、並びにエスキスに基づいた試験課題の作図を行う。最後に、「海の駅」をテーマとした学科オリジナル課題に取り組み、課題文の読み取りからエスキス、作図までの一連のプロセスを実践し、総合的な成果としてまとめる。

(長谷川洋平)



	デザイン系	計画系
【担当】	佐藤 信治 長谷川洋平 吉田 郁夫	山本 和清 江川 香奈 菅原 遼 寺口 敬秀 桜井 慎一

総合演習

デザイン系

「『解築学』を可視化する
一解体と循環の時代を切り拓け
(日本建築学会設計競技)」
(担当：佐藤信治、吉田郁夫)

【応募要領】

私がまだ子どもだった頃、日本の町ならどこに行っても原っぱがあった。オバケのＱ 太郎もおそ松くんも、ドラえもんも天才バカボンも、みんな原っぱで遊んでいた。あの原っぱはどこに行ったのか？

今の日本の町では右も左も建物で埋め尽くされている。なのに私たちはまだ建築しようと、懸命に大学教育を行い、建築士の試験をつくり、工務店や設計事務所やゼネコンを営んでいる。どこに建築しようというのだろうか？そこそこに建っている建物を取り壊さない限り新しい建物など建ちはしない。それが現実だ。もちろん今ある建物に手を加えながら使い続けることもできる。でも新築したいという人もいる。その場合、今ある建物をまるまる解体しないといけなくなる。

さて、解体ってどうやるんだっけ？誰に頼めるんだっけ？いくらかかるんだっけ？解体時に出てくる物たちはどこにどう捨てればいいんだっけ？捨てていいんだっけ？そもそも建物って簡単に解体していいんだっけ？解体はわからないことだからだと気付く。これからの建築を考えるには、まず解体、そしてそれに続く廃棄あるいは循環について考えなければならないのだ。

解いて築く時代。私たちの前には、解体という課題があり、循環という課題がある。この「解築学」ともいえるべきものが求められる時代に相応しい、プロジェクトの設定と設計、システムや技術の提案、新しい理論や概念を想

起させる表現。そうしたものが多様に瑞々しく提案されることを期待している。具体の敷地での設計案でも良いし、具体の地域での建物の解体や循環の仕組みの提案でも良い。それぞれにこの課題に相応しいと思われる図面を用いた提案を工夫して応募してもらいたい。

審査委員長 松村秀一

【応募規定】

- A. 課題
「『解築学』を可視化する
一解体と循環の時代を切り拓け
- B. 条件
実在の場所を設定すること。
- C. 応募資格
本会個人会員、または会員のみで構成するグループとする。
- D. 提出物
下記 1 点または 2 点を提出すること。
a. 計画案の PDF ファイル（必須）
以下の①～④を A2 サイズ 2 枚に収めた後、A3 サイズ 2 枚に縮小した PDF ファイル。なお、使用する言語は、日本語または英語とすること。（解像度は350dpi を保持し、容量は合計20MB 以内とする。PDF ファイルは 1 枚目が 1 ページ目、2 枚目が 2 ページ目となるように作成する。A2 サイズ 1 枚にはまとめないこと。）
b. 写真等を自由に組み合わせ、わかりやすく表現すること。
- ①設定した計画対象地を具体的に示す
②設計主旨（文字サイズは10ポイント以上を目安とし、日本語の場合は約600字以内、英語の場合は約1200 characters 以内の文章にまとめる）
③計画条件・計画対象の現状（図や写真等を用いてよい）
④各種ドローイング・ダイアグラム
b. 顔写真の JPG ファイル（希望者のみ）代表者および共同制作者のうち、掲載を希望する者の顔が写っているもの 1 枚に限る。なお、サイズは横 4 cm × 縦 3 cm 以内で、容量は 20MB 以内とする。

計画系

「海辺の産業遺構を活かした地域づくり ～浦賀地域における造船所跡地を活用した空間整備の提案～」
(担当：山本和清、江川香奈、菅原 遼、寺口敬秀、桜井慎一)

【課題趣旨】

東京湾の湾口部に位置する浦賀地域は、江戸期より海防・流通の要所として発展し、明治期には国内の造船需要に対応する形で民間の造船所が建造された。造船所の稼働が停止した今日においても、浦賀地域には煉瓦造のドライドックが 2 基現存している。煉瓦造のドライドックは世界的にも希少であり、国内外の煉瓦造のドライドック 4 基の内、2 基が浦賀地域に現存している。中でも、浦賀船渠(株)により 1899 (明治32) 年に建造された「浦賀ドック」は、造船所の閉鎖後もドライドックの保存・活用に向けた地域活動が継続的に行われてきた。2021 (令和 3) 年には、ドライドックおよび周辺敷地を所有していた民間企業から横須賀市への土地・建物の無償譲渡が行われ、浦賀駅周辺の地域活性化を視野に入れた浦賀ドックおよび周辺敷地の再整備が検討されている。

そこで本課題では、「浦賀地域における造船所の跡地活用による整備提案」を行う。今後の浦賀地域の地域活性化に寄与する土地利用、施設計画、親水空間を提案するものである。計画地内にあるドライドックは「静的保存」と「動的保存」のいずれも提案可能とする。産業遺産の保存・活用の在り方をグループごとに議論し、ドライドック特有の空間性や歴史性を考慮した提案を期待する。

地域内の回遊性の向上を検討する際には、浦賀駅と計画地をつなぐ道路沿いの遊歩道 (208 号線) や、計画地の北側に位置する民有地の整備提案も可能 (建築物の提案は不可) とする。また、

計画地は浦賀湾の最奥部に位置し、豊かな水辺環境を有するため、水上ネットワークの構築に関わる各種施設の提案だけでなく、水辺環境を活かした親水空間整備および水辺・水上利用の提案を期待する。

【計画地概要および前提条件】

敷地面積 | 約28,000㎡

関連制度 | 用途地域：工業地域、建ぺい率：60%、容積率：200%、その他：臨港地区 [工業港区]

▷提案コンセプトに応じたドライドックの保存・活用方法を提案すること。なお、ドライドックの内部および周辺の再整備も可能とする。

▷計画地内に容積率の半分 (100%、延床面積28,000㎡) 以上の施設を計画・設計すること。

▷浦賀駅からのアクセス性を促進させる提案を行うこと。提案の際には、208号線沿いの遊歩道や計画地の北側の民有地の整備提案も可能とする。

▷浦賀湾の水域や計画地の水際を活かした親水空間整備および水辺空間利用を提案すること。

【計画上の主なポイント】

- ①浦賀地域の歴史、文化に関する調査を行い、その特性を考慮した計画とする。
- ②三浦半島のスケールからみた周辺地域と計画地の関係を考察し、浦賀地域の位置付けを明確にした上で、計画地の提案コンセプトを提示する。
- ③浦賀地域の資源に関する調査を行い、地域資源のネットワークの構築を考慮した提案を行う。
- ④計画地周辺の水辺環境 (浦賀湾) の水面活用や水辺空間整備を想定した計画とする。
- ⑤地域特性や来訪者属性 (ターゲット) を考慮して計画対象地に必要となる施設を検討する。
- ⑥各グループの提案方針に基づいた施設の規模について類似した事例を調査した上で設定する。

江口和李・川神爽来
・藤井光稀・横山晃己

■コンセプト

高度経済成長期に建てられた郊外型団地は、高齢化と空き家の問題に直面し、いまその役目を終えようとしている。そこでわれわれは建物を畑として活用し、コミュニティの場を生み出しながら自然に還していく解体のかたちを提案する。

上層階からガビオンを創り、種がまかれ、作物が育つ。根がコンクリートを

を侵食し、自然の力を借りながら解体されていく。畑は住人たちが上階に足を運び、身体を動かし、交流を育むきっかけの場所にもなる。解体は暮らしに寄り添いながら行われ、下層階に暮らしながら上層階が畑へと変わっていく。日当たりや風によって畑ごとに解体の速度は異なり、団地の輪郭がやがて地形のように崩れていく。その変化を住人だけでなく、まち全体で見守っていく。

やがて住人が団地を離れたあとは、地域の子どもたちが畑を引き継ぐ。団地内を飛び交うドローンが種や作物を運び、解体を助ける。人と自然、テクノロジーが交差するなかで、団地は世代を超えて受け継がれながらその姿を

変えていく。

これは団地が人と自然に寄り添いながら、風景へと溶けていく物語。

■講評

「解いて築く時代。解体と循環という課題に向き合う『解築学』ともいうべき提案」が求められた。

本チームは「高度成長期の団地」を題材に、高齢化、空き家、コミュニティの活力低下という社会課題に正面から向き合った。団地の問題は全国共通であり、普遍性を備えた課題選定がまず高く評価できる。

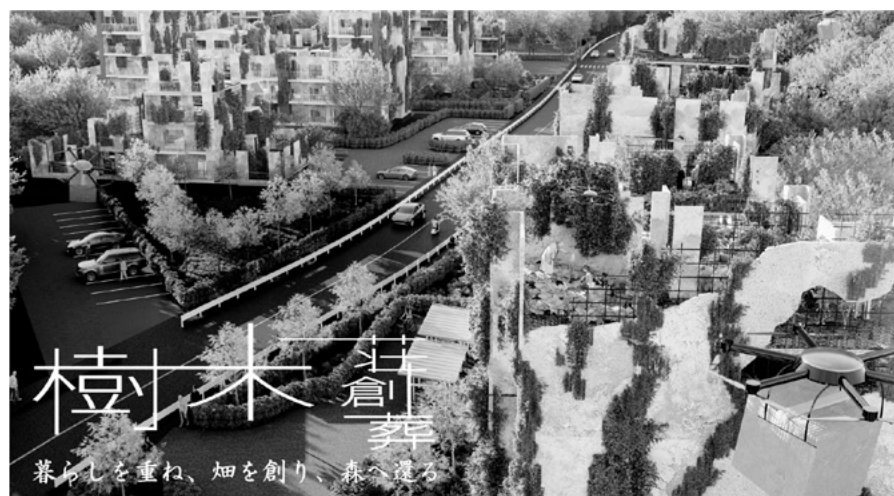
解体のアイデアも独創的である。「植物の根がコンクリートを侵食す

る」という本来は建物にとってデメリットとなる作用を、解体手段として応用した点に新規性がある。さらに上層階の空き家を住民の畑として開放し、耕作を通じて侵食を促すことで、共同作業がコミュニティ再生の契機ともなる一石二鳥の構想となっている。

また、住みながらの解体に伴う漏水や高層階への物資運搬といった提案上生じる課題に対し、防水層やドローン活用など具体的な解決策を示しており、きめ細かな自己検証に基づく提案として特筆に値する。

加えて、樹木に覆われた団地が自然の風景へ溶け込んでいく物語を一枚の絵に結晶させた表現力も豊かである。
(吉田郁夫)

日本建築学会設計競技2025 佳作・タジマ奨励賞



団地の高齢化と上層階の空き家化

1960〜70年代の高度経済成長期に、人口増加や住宅不足を背景として大量に建設された団地では、当時入居した住民の高齢化が進んでいる。
特にエレベーターのない団地では、階段の利用が高齢者にとって大きな負担となるため、上層階を中心に空き家が増加している。また、住民の死亡や介護施設への転居など、ライフステージの変化も空き家増加の要因となっている。

計画地：津田沼グリーンハイツ（千葉県船橋市田喜野4丁目）

本敷地はかつて農地や林地として利用されていたが、1973年に人口増加に対応する大規模団地として開発された。公園や学校も整備され、当時の理想的な住宅地として多くの家族が暮らし続けた。しかし世代交代が進まず、周辺環境の変化やアクセスの悪さも重なり、現在は高齢化が進んだ団地となっている。



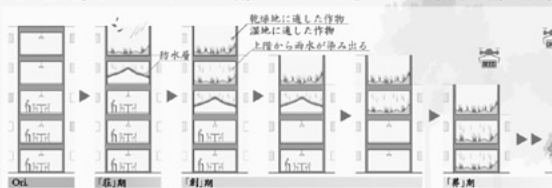
団地が森へと還るプロセス

まず業者が解体とガビオンの整備し、高齢者が種をまき畑をつくる。解体の管理は業者、畑の管理や収穫は高齢者が担う。作物や道具の交換、種子の運搬はドローンが支援し、子どもたちも環境教育として関わる。やがて地域全体で団地の解体が進められていく。



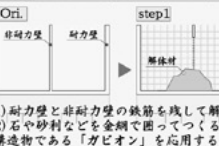
畑の成長に合わせて段階的に溶かす

空き家となっている上層階から順に解体を進めていく。同じフロアであっても日当たりや風通しなど環境条件の違いにより、解体の進行速度にはばらつきが生じる。そのため、住戸ごとに解体のタイミングを見極めながら段階的に解体していく。



畑を整備しながら溶かす

I 一部を残して解体しガビオンを作る



1) 耐力壁と非耐力壁の鉄筋を残して解体。
2) 石や砂利などを金網で囲ってつくる箱状の構造体である「ガビオン」を応用する。

壁と鉄筋に囲まれた床スラブの上に解体材を、山やくぼみをつくるように地形的に敷き詰め、そこに種をまく。

II 劣化・腐食の促進

クラックを進行させることで解体材の劣化・腐食を早める。

II-1 植物の根による割れ

クラックが生じる仕組み+中性化

II-2 地形のくぼみによる割れ

乾燥収縮+化学的腐食

1) 敷き詰められた解体材の隙間に根が入り込む。成長に伴い根が太く伸び、根が周囲の解体材を押し広げる。

2) 根がCO2や有機酸を分泌し酸性化が局所的に生じる。

3) この二つの現象が根の周囲で起こることで解体材の割れが拡大

1) くぼみに雨水（弱酸性）や土壌から降りてくる水（弱酸性）が溜まる。

2) 雨水が長期たまること、乾くことを繰り返す。

3) コンクリート中の水酸化カルシウムが溶けコンクリートが弱くなる。pHの変化による強度や密度の低下によりクラックが拡大。

point I point II point III point IV point V point VI

point I point II point III point IV point V point VI

point I point II point III point IV point V point VI

point I point II point III point IV point V point VI

point I point II point III point IV point V point VI

point I point II point III point IV point V point VI

point I point II point III point IV point V point VI

point I point II point III point IV point V point VI

point I point II point III point IV point V point VI

point I point II point III point IV point V point VI

point I point II point III point IV point V point VI

point I point II point III point IV point V point VI

point I point II point III point IV point V point VI

point I point II point III point IV point V point VI

point I point II point III point IV point V point VI

point I point II point III point IV point V point VI

point I point II point III point IV point V point VI

秋山慎之介・池田拓未
・糸魚川颯大・増淵 慈

■コンセプト

現代の都市は、経済合理性に基づく「スクラップアンドビルド」の加速により、建築が歴史を重ねる間もなく消費されている。とくに銀座は更新速度が激しく、象徴的建築が次々と消滅している。本提案は、解体を終わりでなく再編集のプロセスと捉え、全国から失われていく建築の「顔」や「記憶」を収集・記録し続ける動的な建築

博物館を構想するものである。

計画地には、廃止が決まった全長約2.5kmの東京高速道路（KK線）を選定した。解体予定の建物から、ファサードを「視覚的な記憶」として、柱や内装などの部材を「空間の精神性」として抽出。これらをKK線の高架空間へ再構成・配置することで、単なる保存を超えた継承装置として機能させる。また、「解体・保存・展示委員会」を介してオーナー側と市民側の対立を解消する仕組みを構築し、円滑な記憶の継承を促す。かつての保存活動に関わった人々や来館者が、再構成された空間に触れることで、個人の感情と都市の歴史が共鳴し、新たな体験が生まれる。加速する都市の代謝の中で、失わ

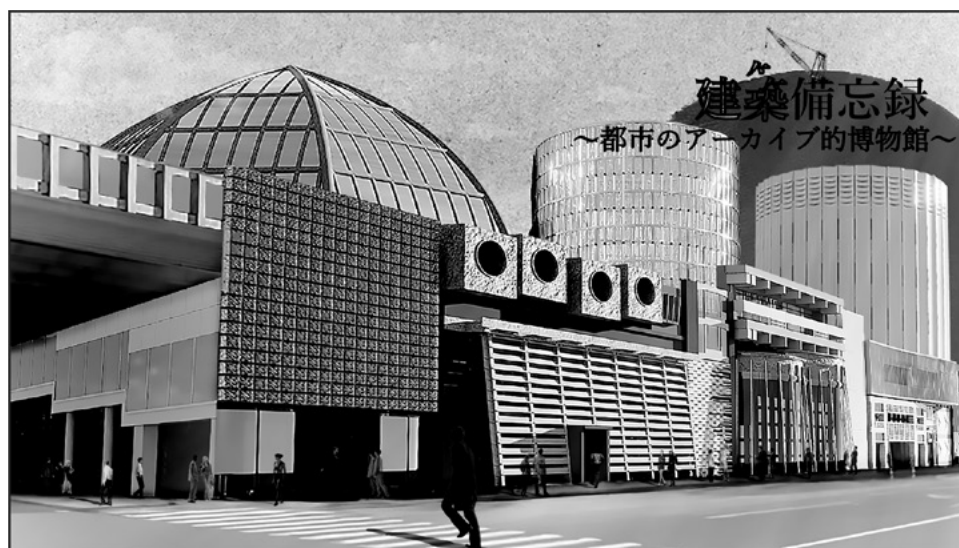
れていく記憶を蓄積し、成長し続ける建築の在り方を提示したい。

■講評

名作と称される現代建築でさえ、懸命な保存運動にもかかわらず、経済的合理性の前では容易に失われてしまう。本提案は、そうした保存的価値の高い建築作品の一部を収集し、機能を失った自動車道路の高架躯体を利用して、建築博物館として再編成する試みである。建築のオーナーにとってその維持管理には多大な負担が伴い、保存に伴う対立の末に手放される現実を踏まえると、建築空間の記録につながる「解築」のシステムを提案するという

設計者の主張には説得力がある。また、KK線が位置する銀座周辺は、国内外から多くの来訪者を集める地域であり、建築保存に対する文化的リテラシーの高さや、施設維持のための資金調達の可能性といった観点からも、本計画は一定の実現性を備えていると評価できる。

一方で、継承方法として提示された、建築のファサードやインテリアのいわゆる「サンプリング」「カットアップ」「リミックス」とよばれる手法については、慎重な検討が求められる。対象となる作品への理解や敬意が十分に読み取れない部分もあり、分析や解釈をより深めると提案の強度を高めることができたと思う。（長谷川洋平）



00 背景～加速する忘却～



近現代の都市は高代謝のスクラップアンドビルドを繰り返し、街を象徴する建築も次々と解体される。保存の声もあるが更新の速度に追いつかず、建物は名残惜しくも消えていく。速度に支配された建築は歴史を重ねることをやめよう。だからこそ、解体が増える今、新たな重なる方を模索する必要がある。解体ではなく加速する速度の中で解いて繋ぎ解築によって失われていく記憶の再構築を試みる。

01 救地説明～高速で解体が行われる場所～

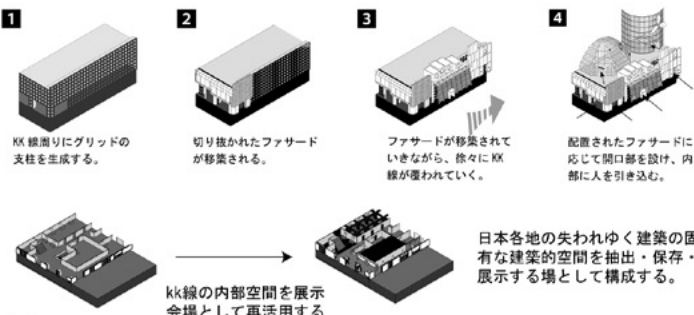
1 KK線

本提案の計画地は、東京都中央区銀座の西側を

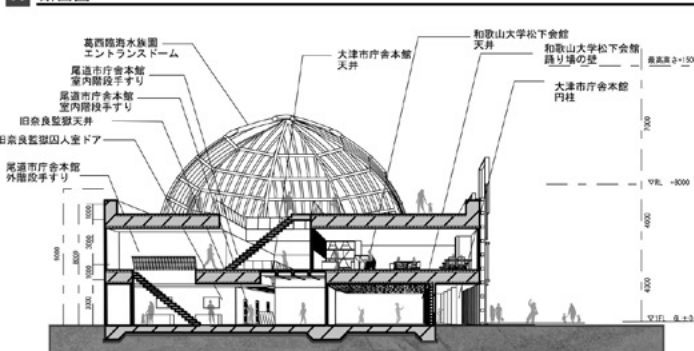
囲むように走る東京高速道路（KK線）で行うKK線は、首都高速と3か所で接続する全長約2.5kmの高架道路である。しかし大型車の通行に制限があることから首都高速の新たなルート「新京橋連絡路」の整備に合わせて廃止が決まった。現在、東京都ではこのKK線の高架部の再活用方法について検討を進めており都市空間の新たな活用方法が模索中である。KK線は特殊な経緯で建設されたため、正式な住所が定まっていない。

02 提案～歴史を保存し成長する建築博物館～

解体の速度に合わせて保存を行う仕組みを思考し、建築物の顔であるファサードと内部空間を集め、失われていく記憶を都市に限らず全国から収集し、記録しながら成長していく建築博物館を提案する。



05 断面図



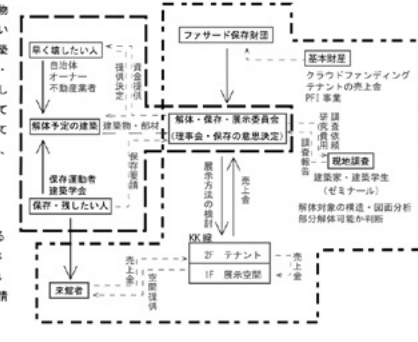
03 記録システム～構築される関係性～

1. 保存の流れ

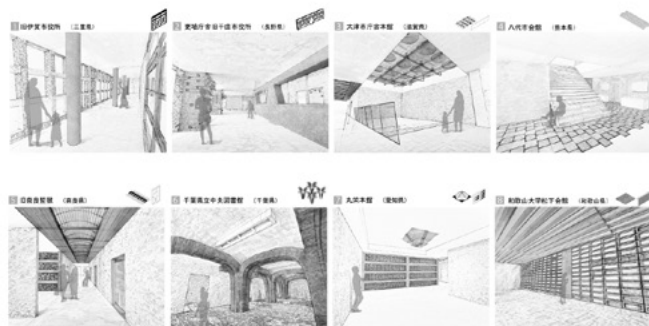
老朽化などを理由に解体予定となった建築物がある。自治体やオーナーは早く壊し新しいものを建てたいが、保存を求める市民や建築学会と対立している。そこで「解体・保存・展示委員会」が、オーナー側に資金を提供し建物や象徴的な部材を提供してもらいつつ保存活動に関わった人々が来館者としてKK線に訪れる。その空間に身を置くことで、彼らの記憶が再認識される。

2. お金の流れ

KK線の2階テナント売上金、クラウドファンディング、PF1事業を基本財産とする「ファサード保存財団」を設立。財団を母体に、「保存・解体・展示委員会」が組織される。委員会は、解体予定の建築物に関する情報収集や調査を行い、象徴的な部材などをKK線で保存・展示品として再構築する。



06 内観パース～内部記録展示～



磯部莉緒・大野紗矢香
・酒井 優

■コンセプト

本提案は、神奈川県横須賀市の廃校「走水小学校」を対象に、解体を起点とした循環型建築の在り方を再考するものである。全国の廃校の約20%が校舎の活用が見込めないまま放置され、関係性を失い老朽化している。学校建築は長期使用を前提としながらも、解体やその後の利活用は設計段階で十分に考慮されてこなかった。学校

は単に知識を得る場ではなく、他者との関係構築や社会性を育む空間でもあった。本提案では、廃校をただ撤去するのではなく、その「解体過程」を学びと体験の場に転換し、「地域特性を活かして解体しながら元の環境を取り戻す建築」を提案する。計画では校舎をスパン単位で20年かけて解体を進め、各時期に応じて教育・実験・生態系再生など多様な活動を展開する。体育館跡地に海水揚水装置を設け、海水を導入し流下と漁網により鉄筋の自然腐食を促す。併せて地域資源を取り込み、素材循環と多様な行為を生む空間とする。本提案の段階的な解体を制度化することで、廃校活用に展開可能となり、教育・地域経済・環境の循環に貢献す

る新たな建築の枠組みを提示する。

■講評

2025年度の日本建築学会コンペの課題は、「『解築学』を可視化する―解体と循環の時代を切り拓け―」であった。その趣旨は、「解いて築く時代。私たちの前には、解体という課題があり、循環という課題がある。」と出題者が入選作の講評で述べているように、建築も循環型社会の一員であるということを示唆している。

本計画は、神奈川県横須賀市を対象としている。そこで循環させる対象は、学校である。全国には、少子化で廃校になった小中学校が多数存在している。本計画で取り上げた走水小学校もその

一つである。海沿いに建つRCの校舎はまだ十分に使えるにもかかわらず児童生徒が集まらないということで廃校になってしまった。しかしながら、廃校になっても躯体は十分に性能を発揮できる状態にあるという矛盾が顕在している。そこで彼女たちは、解築のテーマを、RC構造の校舎が壊れていく過程を循環型社会の教材として捉え、解体過程を段階的に可視化していく工夫を施した。可視化する方法は、校舎を廃棄された漁網を利用し、海という自然の力でゆっくりと自然に帰すようにした。こうすることで、地元の方々に愛されてきた校舎がある日突然無くなるのではなく、人々の記憶に残るようになるのである。(佐藤信治)

塩のほどき

解体する過程を空間として扱い、地域に根付く環境要素を用いてゆっくり解体していく提案
解体に残る残りを排除し新しい建築物として利用されるまで記憶を引き継ぐ



A2:S=1/100 コンセプト模型

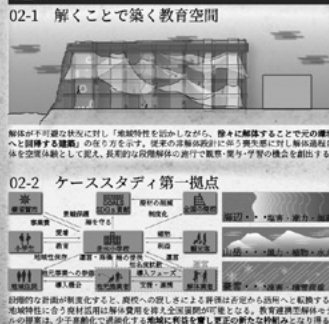
01 残り続ける廃校舎



01-2 学校が人に与える価値

学校は知識を得るだけでなく多様な人と交流を促す、社会性や個性を育む場でもある。卒業とともに失われる授業以外の体験的学習を促す。廃校活用計画にはかつての学びや記憶に代わりたいという思いが人々を惹きつけるのではない。

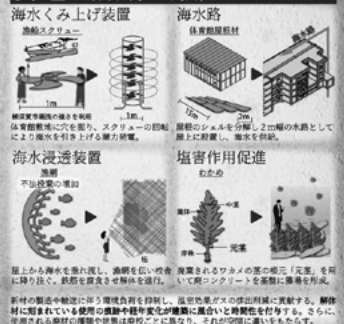
02 風景へ還る設計



03 海に最も近い廃校舎



04 塩と解体材の利用



05 時間による空間体験の変化



ひらかれた浦賀、つながる半島。

石井結葵子・佐藤彼方・
野中奈桜・山田海月・和田武士
■コンセプト

「開国の地」である浦賀を、三浦半島の魅力を発信する拠点として再び開くことをコンセプトとした。陸上には、三浦半島の食と文化を集めた施設や高級ホテルを整備し、さらにホテルと連携する浮体式ホテルを展開する。浮体式ホテルは、鎌倉・逗子葉山・三浦・横須賀といった各エリアを行き先とし、浦賀を起点に“まだ見ぬ三浦半島”を

巡る旅を体験できる仕組みである。また、かつて船を送り出していた浦賀ドックを発着地として活用することで、歴史を受け継ぎつつ新たな役割を与えることを目指した。

施設計画においては、ドックと主要施設を「いかり」（意味：旅の出発点であり、思い出を留める象徴）の形に見立て、ランドスケープと建築が一体となるように構想している。

■講評

江戸期より海防、流通、造船の街として発展し、国内外の諸都市との関係を海に関わる産業によって構築してきた浦賀。本提案は、こうした浦賀特有の文脈を読み取り、プログラムや施設の配置・建築形態に関連付けさせた作品といえる。本提案の特徴は「2つ

の回遊性の工夫」である。1点目は錨や鎖などの船舶を想起させるデザインコードを活かし、計画敷地内のランドスケープや建築物（宿泊棟）の形状に落とし込み、敷地内を回遊することの楽しさを生み出していることである。2点目は三浦半島の沿岸部に立地する各エリアを、フローティングホテルに乗り込み移動させるという、スケールの大きい回遊性である。このフローティングホテルは浦賀を象徴するレンガドックから出発するとされており、まさしく、浦賀らしい船出を演出している。こうした浦賀特有のコンテクストをマクロ・ミクロの回遊性のプログラムに落とし込んだ点は評価に値する。

（菅原 遼）

ひらかれた浦賀、つながる半島。



施設



浮体式ホテル



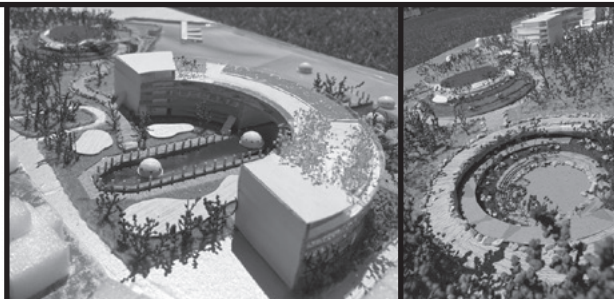
ドッグの活用



「開国の地」である浦賀を三浦半島の魅力の発信地として再び開く

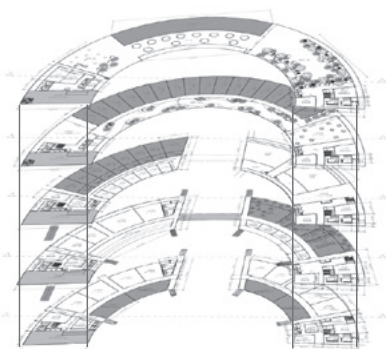
提案背景

浦賀を含む三浦半島地域全体で人口減少や、それに伴う地域産業の衰退などが課題となっている。まちの衰退を最小限に抑えるべく、地域の魅力や歴史を活かすことで地域全体に活力とにぎわいを広げるための取り組みが求められている。

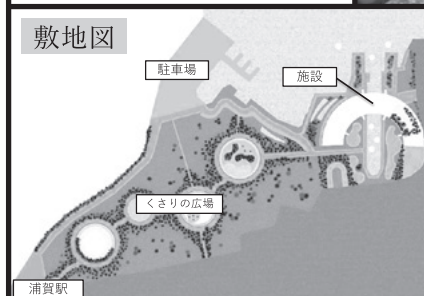


施設イメージ図

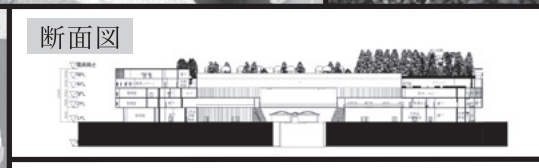
一般客に加えて富裕層もターゲットとし、動線やサービスの差別化を行った。



敷地図



断面図



立面図



- 1F: 工芸製作体験、ショップ
- 2F: 飲食店、ギャラリーなど
- 3F: 温泉・スパ
- 4F: 高級ホテル
- 5F: 屋上プール、バー

安藤大智・片山太一
・佐々木省太郎・三田晴貴
・米村爽汰

■コンセプト

本計画では、既存のレンガドックを活かし、若い人にも受け入れられるコンテンツを提案する必要があると考えた。そこで、現地調査時ドックの見た目がタルトの生地似ていると感じ、そこからタルトをコンテンツとして打ち出すことにした。

施設は海の駅とし、浦賀タルトの工

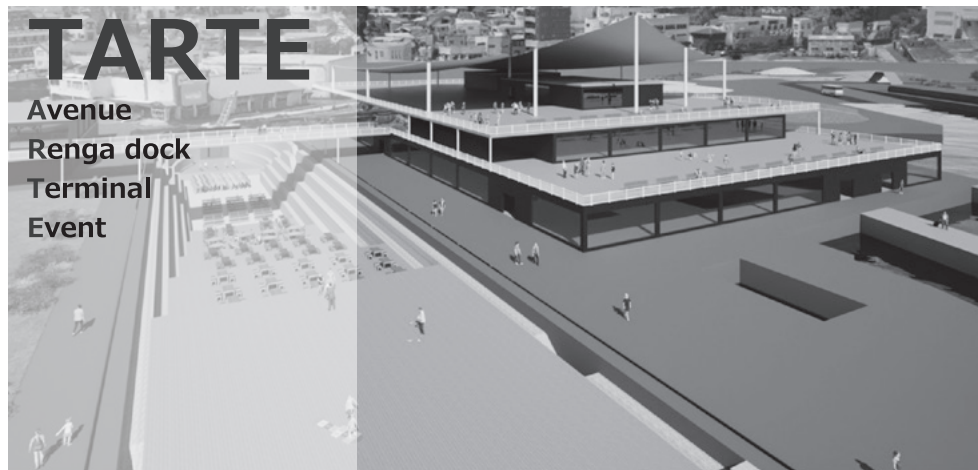
房と体験型施設、舟運ターミナルの機能を持つ、歴史とタルトの二つのコンテンツが交わる拠点として整備した。タルト工房は自作タルトを作れる体験や製作風景を見られるように施設を整備した。また、舟運ターミナルからは観光船で横須賀の海際の歴史スポットを巡る海上ルートミュージアムと既存の航路と浦賀ドックを結んだ渡し、羽田空港や千葉県との連絡船を整備した。レンガドックは上部を飲食スペース、下部を展示スペースに分けた。上部から下部にかけて段々のデッキがあり、デッキの段差部分とデッキにはガラス床が設置され下部空間を望めるように整備した。また、デッキはドックの形状に合わせて設置し、かつて利用

されていたレンガドックを肌や視覚でも感じられる空間とした。北側の敷地には波に模した四季折々の花が季節ごとで違う丘に咲き、季節ごとで違う風景が楽しめる空間で撮影スポットや癒しの空間である波の庭を整備した。また、ドックサイドや敷地海際部分にテラスを設置し、水辺の解放感を与える計画とした。

■講評

TARTE (タルト) とは洋菓子の「タルト」、浦賀のレンガドックの様相からタルトを連想したことと端を発したネーミングとのこと。一見、単純で、アルファベットのスペルも違うし、浦賀との関係がないと思いきや、よく

よく聞くと、浦賀のことを入念に調べ上げた上でのネーミングであった。「Tart」「Avenue」「Renga dock」「Terminal」「Event」の頭文字をとったこのコンセプトは、浦賀の未来をデザインする重要な要素が散りばめられている。提案プランについても目を見張るものがある。浦賀駅から眼前に広がる四季を彩る花々の広場は浦賀の新たな景観資源になり得るし、その先に建つターミナル施設とタルト工房は、レンガドックを挟むように配置され、浦賀のシンボルとしての存在感がある。また、本グループはそれぞれ役割分担を行い、バランス良くプランニングを進めてきていたことも評価できる点も付け加えておきたい。(菅原 遼)



敷地分析

①観光資源のジャンルの幅

横浜などと比べると観光資源の幅が狭い

②観光地の点在

観光地が広域に点在していて観光しにくい

③若年層が少ない

比較的若年層の観光客が少ない

①歴史 × イベント

浦賀の歴史とイベントを掛け合わせる

②海上ルートミュージアム

舟運で観光地をめぐる

③コンテンツ

若年層に刺さるコンテンツを作る。

コンセプト

Tart (タルト)

浦賀の新たな観光資源として
浦賀ドックの形状を模したタルトを採用

Avenue (アベニュー)

既存の遊歩道と駅をかつて利用されていた
クレーン軌道を意識した整備計画

Renga dock (レンガドック)

レンガドックの非日常的な空間で
飲食や音楽イベント、浦賀の歴史展示を行う

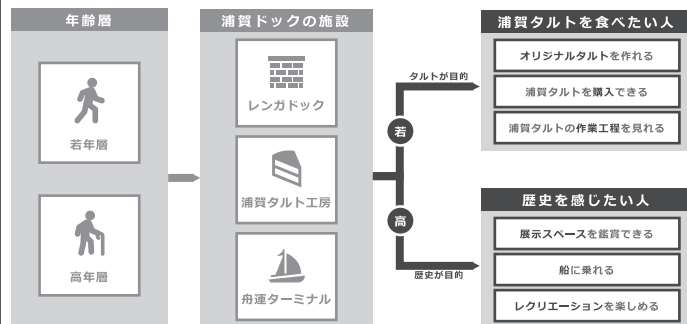
Terminal (ターミナル)

既存の渡し舟に加え横須賀市の観光地や
羽田空港と金谷港を舟運で繋ぎ、浦賀を観光拠点に

Event (イベント)

週末にはレンガドックを活用したイベントを開催し、
老若男女楽しめる場所に

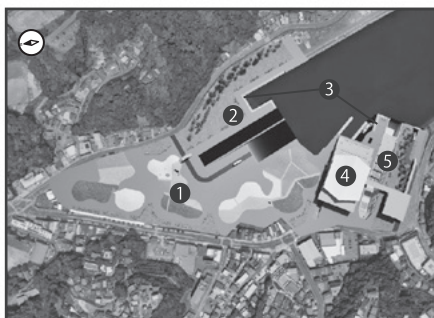
TARTE



これまでツアーなどでしか立ち入りできなかった浦賀ドックを一般開放し、レンガドックの唯一無二の空間で造船の歴史を体感できるようにする。また、浦賀ドックの特有の形状から着想を得た「浦賀タルト」を、若年層を惹きつけるコンテンツとして展開する。これにより、浦賀の歴史に触れたい人や、浦賀タルトを作ったり食べたりしたい人、あるいはその両方を楽しみたい人など、老若男女問わず楽しめる場となる。さらに、浦賀を中心に舟運によって横須賀の観光名所や羽田空港、千葉の金谷港と結ぶことで、横須賀の新たな観光拠点となる。

配置図

駅からも海を視覚的に感じることができるようにはいを計画した。また、海からやってくる船上から見て浦賀のランドマークになるように各要素がドック周辺を囲む配置を計画する。



①波の庭

波のような丘に春夏秋冬に咲く四種類の花畑が広がり、駅側からも海を感じられる空間

②ドックサイドテラス

北側のドックは水を張り、その背後の空間をオープンスペースとしてキッチンカーなどを並べてイベント開催することも可能

③海際階段

浦賀湾に落ちたり、浦賀湾を眺めながら憩える空間

④海の駅

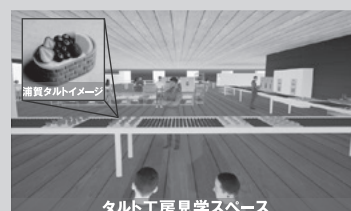
舟運ターミナルの他に浦賀タルトの工房としての機能もあり、タルトの手作り体験も可能

⑤レンガドック

レンガドックの特有の空間で飲食やステージイベント、展示など非日常を体験できる



海の駅



タルト工房見学スペース

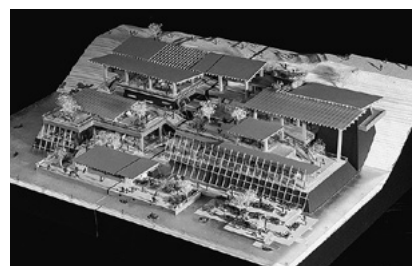
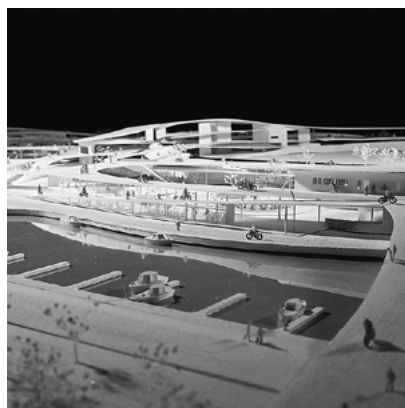
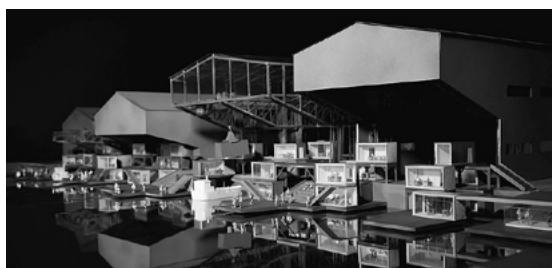
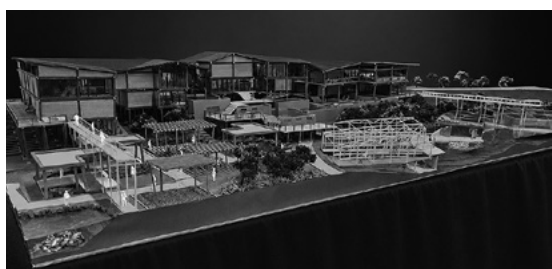


ドック上部の飲食スペース



ドック下部の展示スペース

【担当】 佐藤 信治
長谷川洋平



酒井 優

はじめに

本提案は皇居濠における水の停滞と都市環境との断絶を課題とし、自然浄水と空間操作を通じて都市に開かれた環境インフラへ転換する。東京の中心に位置する皇居濠を対象に、水を浄化し循環ネットワークを形成することで、東京の水と熱環境の改善を目指す。桜田濠を拠点に歴史遺構として保存されてきた江戸城の防御構造を環境インフラとして再編し、沈殿、ろ過、曝気の

自然浄水を空間化。浄水と人の滞在を重ね、停滞する水面を都市に開かれた環境インフラへと転換し、都市環境や奥行き、公共性を再構築することを目的とする。

防御の痕跡が残る自然の宝庫

東京はビルが密集し熱環境が悪化している。治水と防御のために築かれた濠内部の水が停滞しているため、皇居で発生する気化熱は周囲へ届かず留まっている。皇居濠には江戸城に由来する石垣や曲輪などの防御構造が現在も残存しており、自然地形を読み替えた断面的な段階性を有する特異な空間として維持されている。これらは歴史保存のために単に残していくのではなく、広大な自然を都市環境へ寄与させるべきだ。

きだ。

古びた浄水設備と劣悪な水環境

水環境は濁りや臭気が指摘され、給水の多くを雨水に依存している。外部水系との接続が弱まり、雨水に依存した停滞した状態にあり、循環ポンプや曝気装置などの機械的処理が導入されているものの、都市環境に対して積極的に作用しているとは言いにくい。既存の隠された機械的な浄水施設ではなく、景色と調和した自然に委ねる浄水を加えることで、緑と景観、神聖さがより市民に安らぎを与えるだろう。

内の守りから環境の守りへ

濠の浄水を空間化する。接続する地域特性に合わせて4カ所計画し水の循環ネットワークを生むことで、東京の



曲輪：城郭の内外を段階的に区切り、距離と緊張を作る空間構造

隙間と奥行き：視線の誘導、移動の段階性、心理的なアクセス制限

皇居の浄水を浄化し循環ネットワークを形成することで、東京の水と熱環境の改善を目指す。

南側の桜田濠を第一拠点として、「江戸城防御構造の反転手法」を用いて、都市を支える浄水インフラと

人の拠り所が一体となる新しい都市環境の守り方を提案する。

01 防御の痕跡が残る自然の宝庫

一現状一

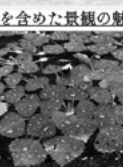
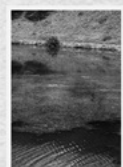
水が担う役割の軸



東京はビルが密集し熱環境が悪化している。治水と防御のために築かれた濠内部の水が停滞しているため、皇居で発生する気化熱は周囲へ届かず留まっている。歴史保存だけではなく、広大な自然を都市環境へ寄与させるべきだ。

02 古びた浄化設備と劣悪な水環境

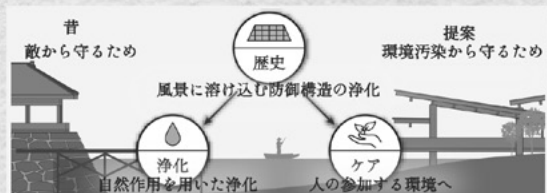
一背景一



環境は濁りや臭気が指摘され、給水の多くを雨水に依存している。既存の隠された機械的な浄水施設ではなく、景色と調和した自然に委ねる浄水を加えることで、緑と景観、神聖さがより市民に安らぎを与えるだろう。

03 内の守りから環境の守りへ

一提案一

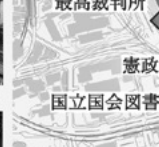
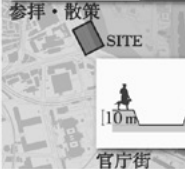
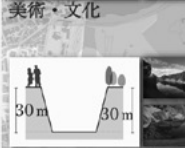


濠の浄水を空間化する。接続する地域特性に合わせて4カ所計画し水の循環ネットワークを生むことで、東京の熱環境を劇的に改善することを目指す。江戸城の防御構造の痕跡と浄水システムを形體の起源とする。

04 微地形の奥行きと緑

一調査一

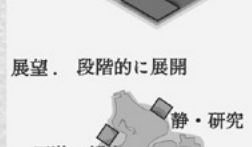
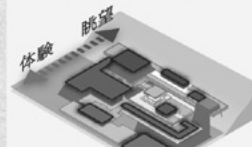
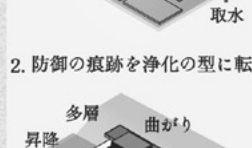
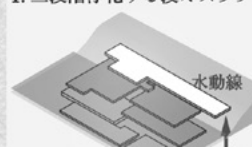
異なる断面が魅せる地域との接続



第一拠点として南側の桜田濠を選定。水面が深く土塁と高低差によって都市から濠底までの断面的な距離が大きい。人の視線や身体が下へ沈み込むような奥行きと緑を活かして、消失した奥性と人の居場所を再定義できるのではない。

04 ダイアグラム

1. 三段階浄化する段々スラブ



熱環境を劇的に改善することを目指す。江戸城の防御構造の痕跡と浄水システムを形態の起源とする。

微地形の興行と緑

今回は第一拠点として南側の桜田濠を選定。水面が深く土壁と高低差によって都市から濠底までの断断的な距離が大きい。人の視線や身体が下へ沈み込むような興行と緑を活かして、消失した奥性と人の居場所を再定義できるのではないかと。

そこで本研究では、防御構造が本来持っていた「流れを制御する段階性」に着目し、その構造を自然浄水のプロセスへと読み替えることで、環境と人の関係を再編する建築的手法を提案する。対象敷地として選定した皇居南側

の桜田濠の地形的特徴を活かし、都市側から濠底へと段階的に降りていく空間構成を導入する。

水の流れを制御する空間装置へ

具体的には、防御構造を抽象化し、沈殿・濾過・曝気の三段階からなる自然浄水プロセスを断面方向に配置することで、水の浄化の進行と人の関与の段階を重ね合わせた。スラブを段状にずらすことで重力による水の流下を促し、浄化機能を空間として可視化すると同時に、人の移動や滞在が段階的に変化する構成とした。また、石垣の重厚さに対して木架構の軽やかさを対比させることで、心理的・身体的距離を調整し、奥へと導く空間の厚みを形成している。さらに、ポリウム間に隙

間を設けることで光や風を取り込み、内外の境界を曖昧にしながら、環境と一体化した建築を実現している。

浄水プロセスと人の居場所が重なる場

浄水施設を単なる設備として隠すのではなく、人の滞在や活動と重ね合わせることで、環境インフラを公共空間として再定義する。利用者は都市側から段階的に空間へと入り、初めは水を眺める位置に立ち、次第に観察し、最終的には浄化活動や手入れに関わることができる。このように、水の状態変化と人の関与の度合いが連動することで、環境を守る行為を日常の中に組み込む空間体験を創出する。

活動の段階を上げる

さらに、本計画は単一の施設にとど

まらず、濠全体へ段階的に展開することで、浄水の循環ネットワークを形成することを想定している。これにより、皇居濠全体の水環境の改善だけでなく、都市に点在する水辺に興行と居場所を連続的に生み出し、都市と皇居の関係を再編する可能性を持つ。従来、内側を守るために構築された防御構造を、環境と都市を守るための構造へと転換することで、歴史遺構の保存と環境改善を同時に実現し、新たな都市基盤として位置付けることができる。

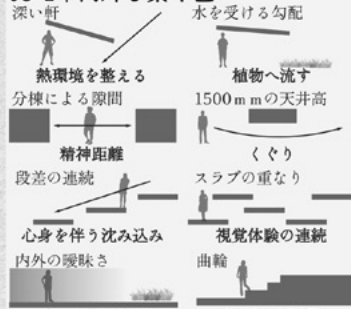
以上より、防御構造の段階性を環境インフラへと読み替え、水の浄化と人の滞在を重ね合わせることで、都市に失われた奥行と公共性を再構築する新たな建築的手法を提示する。

かつてに卒制展2026 ほうじょう賞 / 全国合同卒業設計展「卒、26」総合資格賞 / 第38回千葉県建築学生賞 特別賞 / 日本建築学会「第67回全国大学・高専卒業設計展示会」巡回展 出展 / 第57回毎日・DAS 学生デザイン賞 入選

05 防衛線から公共装置へ 境界再編

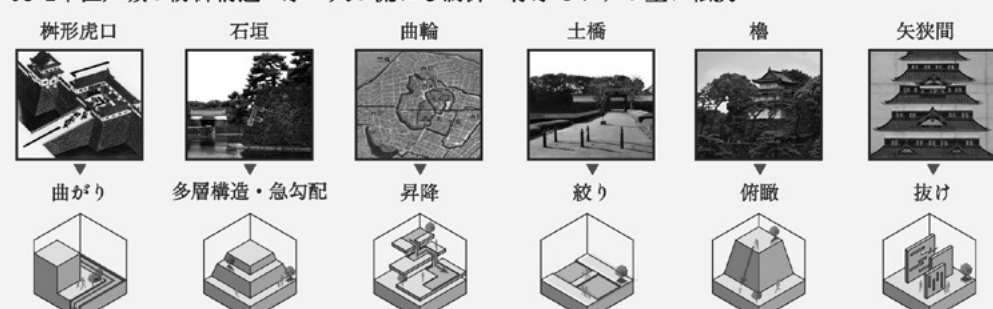
一手法一

05-1 | 内外を繋ぐ色



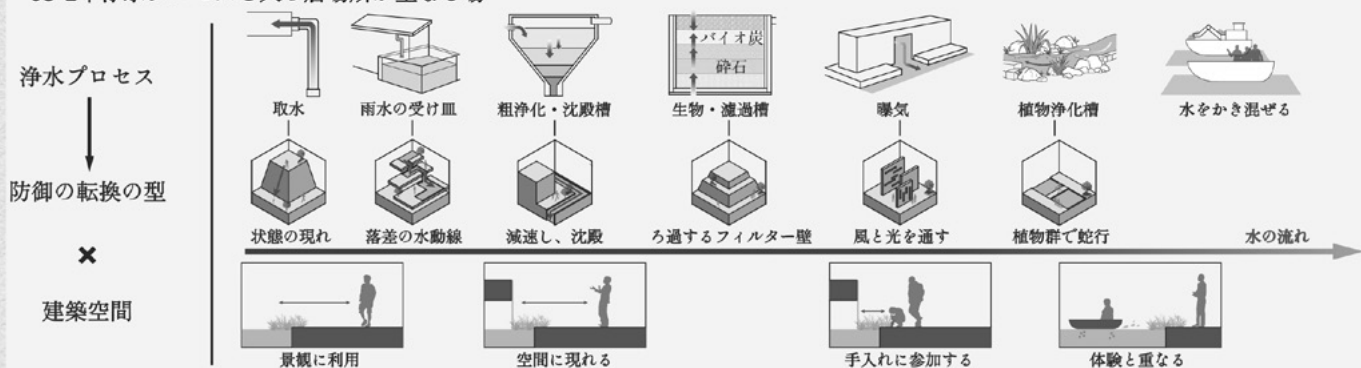
石垣の重さ、濠の水の青緑、地形の土、都市ビルのグレーを抽出し素材と色を決定。段上に重なるスラブと皇居との心理的、身体的距離を段階化。

05-1 | 江戸城の防御構造＝水・人の流れを制御→浄水とケアの型に転換



取水から浄水浄水プロセスの流れを見せる型として、江戸城の防御構造を、流れを制御するロジックに抽象化し、六つの型に整理して平面・断面・開口のデザインコードとして用いる。防御構造を「内を守る構造」から「水と環境を守る構造」へと更新し、浄水施設でありながら歴史的景観と調和する建築として立ち上げる。

05-2 | 浄水プロセスと人の居場所が重なる場



浄水プロセスを形態の起源として防御の型が担う。浄水過程と、滞在・観察・学びが近接する場として人の居場所となる。浄化の進行段階に応じて、皇居の神聖さに近づく儀礼を人が水に近づく段階性によって人と皇居の距離を操作する。これにより、「形式的に保存されてきた歴史や自然を持つ皇居」と「機能性や効率性で作られた近代都市」のつなぎ方を更新する。水を守る行為（浄水に携わる）と過ごすこと（自然を感じ自身を受け入れる居場所）成立する。

08 水と関わり滞在する曲輪の風景

一空間構成一



岩瀬から広がる「輪・環・圏」

— 自転車車を起点とした都市のかたち —

大野紗矢香

戦後80年。戦争で多くのものを失ったが、一方で多くのものを生み出した。競輪場もその一つである。競輪場の多くは、戦後復興期に地方財政を支えるための都市装置として全国各地に整備された。戦後の混乱期において、公共事業や都市基盤の整備を支える財

源として機能し、日本の復興と都市形成の一端を担ってきた存在である。しかし現在では、開催日や特定の利用者に依存した運営形態や利用者層の高齢化が進み、日常的に多様な人が利用する場ではない。広大な敷地を持ちながらも、その利用は時間的にも社会的にも限定されており、都市の中で有効に活用されているとは言い難い状況にある。また、高い外周壁に囲まれており内部と外部が明確に分離され、周辺地域との関係は希薄である。かつて都市を支えた競輪場は、現在物理的・心理的に閉じた存在となり、その在り方が問われている。

本計画地は、富山県富山市岩瀬地区に位置する富山競輪場である。富山競

輪場は住宅地や、水辺空間に隣接する立地でありながら、高い外周壁によって町から切り離され、内部の活動は日常の風景と交わることなく閉じられている。一方で岩瀬地区は、かつて北前船の寄港地として栄え、港町として発展してきた歴史がある。現在も古い町並みや祭り、漁業や工業といった多様な営みが重なり合い、固有の文化や風景を形成している。しかし近年では少子高齢化が進み、小学校廃校の危機や、伝統の継承者不足などの問題点を抱えている。また、町の大部分を工場地、競輪場が占めているため子どもから高齢者までが自由に集い、滞在し、交流できる広場の空間が不足しており、町の中で人の流れや活動が自然に重なり

合う場が求められている。また、運河や水辺といった魅力的な空間資源を有しているが十分に日常の中で活かされているとは言えず、町のポテンシャルが顕在化していない状況にある。

岩瀬地区には、ライトレール、水上バス、サイクリングロードといった複数の移動手段が重なり合うという特徴がある。これらは単なる交通インフラではなく、人の流れを生み出し、町の構造を形づくる重要なレイヤーである。移動は効率的に目的地へ到達するための手段として扱われることが多いが、本来はその過程の中で風景や人の営みに触れ、町を知る契機となるものである。こうした視点に立つと、岩瀬における移動の重なりは、町の新たな価値



岩瀬から広がる「輪・環・圏」

— 自転車車を起点とした都市のかたち —

01. 閉じた競輪場

競輪場は戦後復興を支えた都市装置である。しかし、現在は来場者の減少や投票形態の変化により役割が揺らぎ、巨大な敷地は町から切り離された存在となっている。歴史ある港町・岩瀬の中で、この競輪場の新しい役割が求められている。

競輪場の昔

- ① 現地で観戦、現地で投票
- ② 復興財源
- ③ 来場を前提とした集客型施設
- ④ 管理のための閉鎖的構造

競輪場の現在

- ① インターネット投票の拡大
- ② 収益補助
- ③ 来場者数の減少・稼働率の低下
- ④ 巨大敷地の余剰化・町との断絶

背景

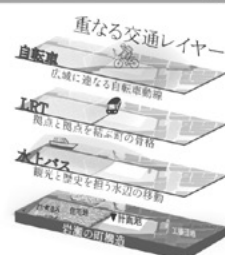


02. 移動が重なる中心

富山県富山市岩瀬地区に位置する富山競輪場周辺を計画地とする。サイクリングロード、LRT、水上バスといった複数の移動が交差するこの場所に着目し、本計画ではそれらの移動のレイヤーを基盤として、人の流れと滞在が連続する都市空間を提案する。

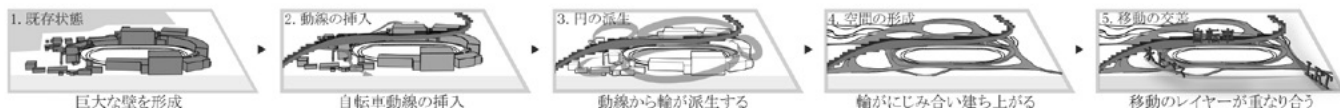


敷地



03. 動線から生まれる建築

ダイアグラム



内部が可視化された観客席

日常にひらかれた観戦

開放的な運河沿い



を生み出す可能性を内包しているといえる。

そこで本提案では、岩瀬の立地特性を生かし、この競輪場の内部に一本の自転車動線を挿入し、町を横断する新たな移動の軸として再構成することを試みる。既存のサイクリングロードを競輪場内部へと引き込み、これまで閉ざされていた敷地を貫くことで、町の中に連続した流れを生み出す。この動線は単なる通過のための経路ではなく、水辺、広場、展望といった多様な場を結びつけながら、人々の滞在や交流を誘発する空間として計画する。移動の途中に立ち止まり、周囲の風景や人の気配を感じることができるよう、スケールや視線、動きに応じた空間の変化

を組み込むことで、通過と滞在が重なり合う体験を生み出す。

また、これまで競輪バンク外周部に集約されていた施設を敷地内に分散配置することで、空間を緩やかに分節しながら連続させる構成とする。点在する建築群は動線に沿って立ち上がり、動きと呼応しながら配置されることで、建築と動線が一体となった空間を形成する。これにより、サイクリストが通り抜けるだけでなく、住民が散歩し、観光客が滞在し、来訪者が観戦や交流を楽しむなど、多様な主体の活動が重なり合う状況が生まれる。それぞれの行為が独立して存在するのではなく、視線や気配を通じて緩やかに関係し合うことで、新たな都市的風景が立

ち現れる。

さらに、地形の操作や植栽計画を通じて、人の視線や身体感覚に働きかける空間を構築する。わずかな高低差や起伏を設けることで、視線の高さが変化し、遠景から近景へと連続的に風景が展開する。草花や水辺、小さな生き物の気配に目が向くような環境を整えることで、人のスケールと自然のスケールが重なり合う体験が生まれる。こうした環境の中での移動は、単なる効率的な移動ではなく、周囲の環境や時間の流れを感じ取る行為へと変化していく。

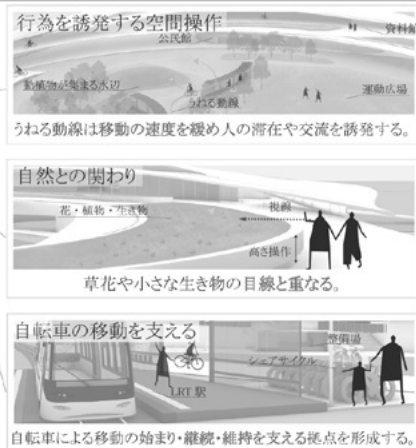
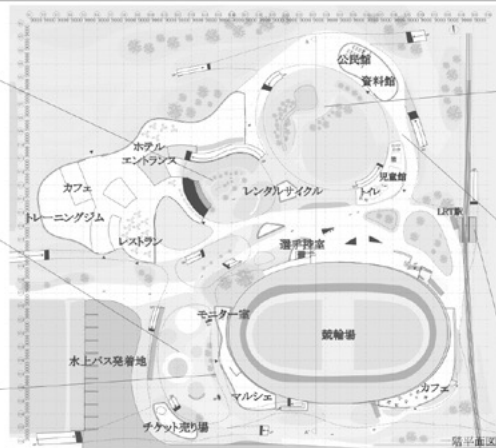
また、雨天時においても水の流れや滞留をデザインに取り込むことで、気候条件が空間体験の一部として現れる

よう計画する。雨水は植栽や地形を介して緩やかに循環し、水辺空間へと導かれる。これにより、雨の日にも異なる表情の風景が生まれ、天候と人の活動が連動する場となる。移動は天候や時間帯といった環境の変化と結びつきながら、多様な体験を内包するものとなる。

閉じられた競輪場を町に開き、分断されていた空間と活動をゆるやかにつなぎ直す。移動を基盤として人の流れと滞在が重なり合う場を生み出すことで、競輪場と町の関係は再構築される。かつては限られた人々のための施設であった競輪場は、多様な人々が日常的に関わる場へと変化し、町の中に新たな活動の層を生み出していく。

かつてに卒制展2026 大川賞 / 新潟建築卒業設計展 Session! 2026 8選 / 赤れんが卒業設計展2026 100選 / 全国合同卒業設計展「卒、26」50選 / 第3回日本大学合同卒業設計展 金野千恵賞・6選 / 第49回学生設計優秀作品展 出展 / 第57回毎日・DAS 学生デザイン賞 佐野正一賞〈建築部門〉

04. 派生する輪の広場



05. 町の一部へとひらく

計画前・後の比較

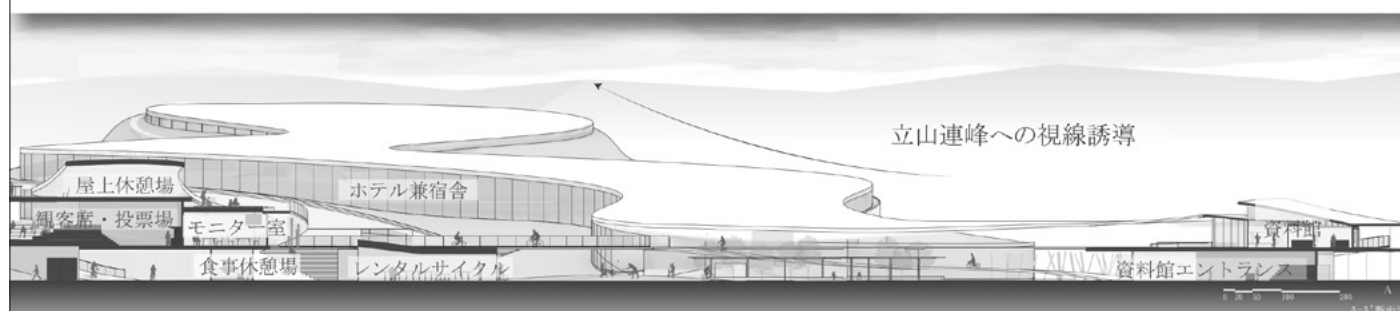
計画後

閉じた競輪場を、移動と滞在が重なり合う町の一部へとひらく

計画前



移動を基盤に人の流れと滞在を重ね合わせることで、競輪場は閉じた存在から、町の中に開かれた場へと再編される。通過する人、立ち止まる人、集う人の活動が重なり合うことで、日常の中に多様な関わりが生まれ、ここは町の営みを支え続ける、欠かすことのできないよりどころとなる。



川神爽来

日本の淡水域は、気候変動や治水事業等の人為的介入により環境が単調化し、生物の生息場が失われている。世界自然保護基金の報告でも淡水生物の減少は陸・海域に比して突出して深刻だが、社会的関心は低く、保全策の再考が急務である。

日本一の遊水地数を持つ埼玉県にお

いて、気候変動に伴い治水施設の増加が予測される。本計画の敷地「芝川第一調節池」は、かつての湿地跡地に整備され、周囲に住宅地や畑が隣接し人々の生活圏に近い特徴を持つ。多様な命を育んだこの場所は、治水目的の整備により地域住民と水環境の間に空間的・心理的な隔絶を生んでしまった。

本計画は、この既存インフラを人と水をつなぐ建築として水族館を再解釈し、淡水魚の保全・繁殖拠点となるフィールドミュージアムへと再構築する。風や光、天候といった自然のゆらぎをあえて施設に取り入れることで、閉鎖的な水槽では見られない魚本来の姿を引き出し、途切れた生態系の循環を再びつなぎ合わせることを目指す。

玄関口となり、水資源循環を体現する拠点

地形への負荷を抑える木造高床式とし、屋根は展示用水を確保する雨水集水に特化した形状とした。屋外の貯水槽により屋根形状で集められた雨水と河川水や池水を調合し、水質を中和・安定させ、水族館の利水を支える。

6つの池を多角・多面に観察し、池を知る

地下空間にて池を側面から観察できる断面水槽を配置した。池の環境に応じた6種類の展示形状が多様な観察体験を生む。また、来館者が維持管理の担い手となるかいぼりを行い、水族館での展示学習を保全活動へ直結させる。

陸から池へとシームレスに体験し、浅瀬を知る
水位変動に追従する浮体の展示場と、視線が抜けるヴォールト屋根で構成す

る浅瀬の展示場を整備した。断面水槽で陸から深場へ続く地形を切り取り、浅瀬のエコトーンを可視化している。

一息しながら河川状水槽を巡り、川を知る

水面へ開かれた円弧状のカフェ内部に水槽展示を融合した。屋外の河川状水槽や入り江、親水階段といった滞留空間を通し、河川の魚や調節池に生息する魚の生態を観察できる。

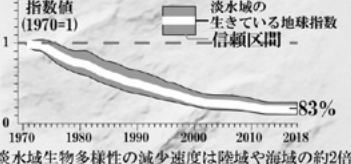
人の生業と魚のゆかりがごのつながりから、風景を知る

魚の遡上を見せる水田魚道を展示の核とする。ワークスペースを農業文化の継承と水辺の生態系調査を両立する、土間仕様の半屋外研究所として計画。3階の展示室には都市と自然が隣接する地域特性を空間として提示する。

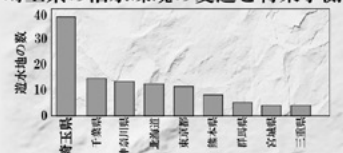
第26回埼玉卒業設計コンクール展 埼玉建築設計管理協会賛助会賞 / 第57回毎日・DAS 学生デザイン賞 入選

01. 課題

01. 日本における淡水魚の減少



埼玉県治水環境の変遷と将来予測



昨今の状況から調節池は不可欠な治水施設となり、今後も県内での整備は増えていくと考えられる。

02. 敷地

02. 芝川第一調節池 (埼玉県さいたま市)

昭和以降、都市化により洪水被害が増加した。これを受け、かつて低湿地であった場所に芝川第一調節池が計画され、洪水時の水を一時的に貯留する役割を担っている。周辺は住宅や畑が広がり、人の暮らしに近い治水施設である点が特徴である。

04. 計画

04. 広大な水辺の命を繋ぐ作用

▼水のパビリオンを巡る感性体験

広大な敷地に点在する、素材の異なる建築群。屋外を歩いて巡る移動そのものが、感性を刺激する豊かな体験となる。



▼水生生態系と共生する建築物

- ① 水面に張り出したデッキやキャノピーを設ける
直射日光を遮り、魚の体力の消耗を抑える
- ② 浅瀬を築きヨシを植栽
一魚の産卵場所や稚魚の隠れ家を出し
- ③ 建築や人が作る影が、水中に明暗を作り出す
一明暗の対比が奥行きと透明感を強調し、断面水槽で魚の姿を鮮明に映す



人の手による広域への介入が可能になることで生態ピラミッドの中核となる淡水魚の生息環境が守られる。



03. 提案

03. 立ち入り制限区域である調節池を活用したフィールドミュージアムの提案

本計画は、この既存インフラに「人と水をつなぐ建築」として水族館を再解釈し、淡水魚の保全・繁殖拠点となるフィールドミュージアムとして再構築することを目的とする。ランドスケープの手法により、季節の移ろいや降雨による水質の変化さえも生息環境の一部として許容する。そのゆらぎのある環境こそが、淡水魚本来の生態を引き出し、来館者にリアルな自然の営みを体感させる。

大地と一体化した建築・土木によって、人と自然の間に途切れた生態系の循環を再びつなぐ

05. 計画

05. ランドスケープと建築群によるフィールドミュージアム

フィールドミュージアムの玄関口となるこの建物は、敷地内で唯一浸水リスクのない場所に配置し、研究室や事務室などの管理機能を集約している。また、ライブラリーや店舗など、入館者以外も利用できる機能を併設し、地域に開かれた施設としている。

コンクリート造のパーゴラをエントランスとし、そこから続く地下において池を観察できる断面水槽を整備。周囲の植物や日影の影響により、6つの池それぞれに固有の水中環境が形成される。

浅瀬は淡水魚にとって、餌を産み育て、敵から身を隠し、餌を食べるために欠かせない場所であり、水と陸の生き物が行き来する場所でもある。こうした水面下の魚の様子を、多様な視点から観察する。

調節池の広大な水面に向かって視界が開けた場所。動植物が収束する場所には、池を一望できるカフェを設置。また、池沿いのエリアでは水面への眺望を確保しつつ、陸側には川魚の観察場、池側には魚が集まる入り江を整備。

見沼代用水と芝川という二つの水脈を支えられた水田というランドスケープそのものを、生きた展示資料として活用する。単なる自然観察にとどまらず、人と自然が再び共生していくための具体的な手法を発信する拠点とする。

フィールドミュージアムの玄関口となるこの建物は、敷地内で唯一浸水リスクのない場所に配置し、研究室や事務室などの管理機能を集約している。また、ライブラリーや店舗など、入館者以外も利用できる機能を併設し、地域に開かれた施設としている。

コンクリート造のパーゴラをエントランスとし、そこから続く地下において池を観察できる断面水槽を整備。周囲の植物や日影の影響により、6つの池それぞれに固有の水中環境が形成される。

浅瀬は淡水魚にとって、餌を産み育て、敵から身を隠し、餌を食べるために欠かせない場所であり、水と陸の生き物が行き来する場所でもある。こうした水面下の魚の様子を、多様な視点から観察する。

調節池の広大な水面に向かって視界が開けた場所。動植物が収束する場所には、池を一望できるカフェを設置。また、池沿いのエリアでは水面への眺望を確保しつつ、陸側には川魚の観察場、池側には魚が集まる入り江を整備。

見沼代用水と芝川という二つの水脈を支えられた水田というランドスケープそのものを、生きた展示資料として活用する。単なる自然観察にとどまらず、人と自然が再び共生していくための具体的な手法を発信する拠点とする。



磯部莉緒

本計画は、商店街を従来の意味で再生することを目的とするものではない。

千葉県匝瑳市八日市場本町通り商店街では、人口減少や高齢化、商業形態の変化により店舗の閉店や空き地化が進行している。現在は通りに面する建物の多くが商業利用されておらず、かつて連続していた商店街の空間は分断され、日常的な賑わいは失われつつある。しかし一方で、年に一度行われる八重垣神社祇園祭の際にはかつての賑

わいが商店街に戻る。本計画では、この「祭りの時間」に着目する。

祭りは単なる一日の出来事ではなく「神輿を修理する」「お囃子を練習する」「屋台の準備をする」「人が集う」「くぐる」といった行為の積み重ねによって成立している。これらは日常の中に点在しながら、祭礼の直前に向かって徐々に密度を増していく時間の層でもある。本計画ではそれらに対応する空間を与えることで建築の構成を導く。機能の集積ではなく、身体的行為の連なりから空間を立ち上げる。

計画する建築は、門、飲食、練習、展示、修理の五つの機能から構成される。通りに面して設けられる格子状の門は、鳥居のようにくぐる行為を生み

出し日常と祭礼の時間を切り替える境界として機能する。その先には飲食の場が配置され、祭りの賑わいを日常の中に引き戻す開かれた空間となる。隣にはお囃子の練習場があり、音が通りへと滲み出すことで準備の気配が街路に広がる構成とする。展示空間では神輿や祭礼に関わる道具を可視化し、祭りの記憶を日常の中に留める。そして最も奥には神輿の修理・改修・保管の場を配置し、祭礼を支える裏方の行為を受け止める。

これらの空間は、通りに開かれた外部から半屋外、さらに内部へと段階的に奥へ入り込むように配置される。門をくぐることで空間の性質が切り替わり、開かれた場から内的で密度の高い

空間へと連続していく。このような構成により、祭りの準備から本番、そしてその後までの時間を一体的に受け止める。

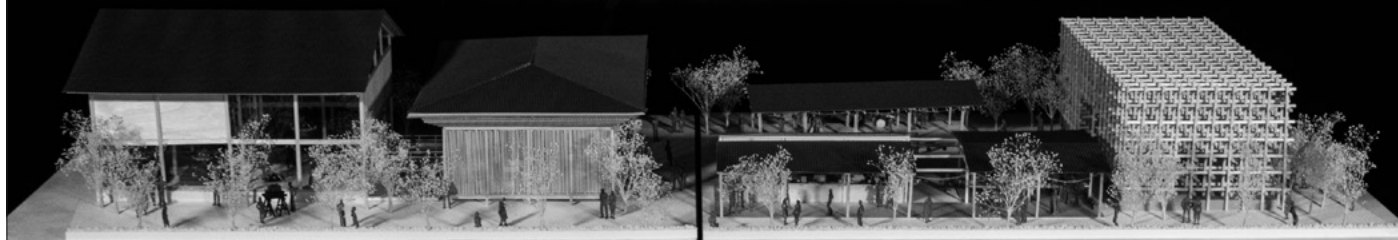
また、ここで生まれる行為や空間の関係は周囲に点在する空き店舗や空き地へと拡張されうる。祭りに関わる行為が周辺へとにじみ出すことで、断片化された商店街に新たな関係性が編み直され、時間の連続性が再び立ち上がることを目指す。

本計画は、商業を再び成立させることによって賑わいを取り戻すのではなく、祭りという地域に根付いた身体的営みを支えることで、商店街が持ち続けてきた時間の層を空間として支えるものである。

赤れんが卒業設計展2026 100選 / 第38回千葉県建築学生賞 奨励賞

「祭礼のあとで」

—八日市場本町通り商店街に残された時間—



神輿修理・改修の様子



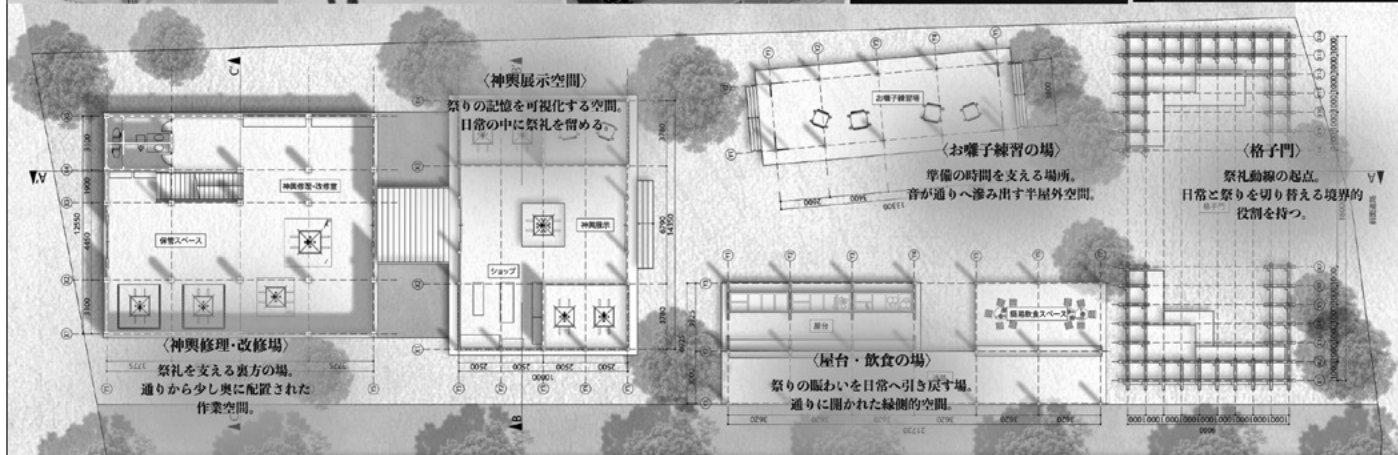
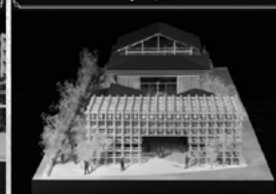
神輿展示空間



お囃子練習場の様子



鳥観図



中央広場の様子



屋台の様子



格子下の通路の様子



正面入り口



島嶼に建つ軌道の断片 —現地資源を用いた青ヶ島の変型宇宙港の提案—

有本百花

本計画は、近年需要が高まりつつある宇宙開発において、その拠点となる宇宙港の在り方を再定義するものである。従来の宇宙港は、打ち上げ時に発生する騒音や振動、爆風に対する安全確保のため、広大な閉鎖海域や空域を必要とし、周辺地域から隔絶されたインフラとして成立してきた。本計画は、こうした宇宙港を地域と切り離された存在ではなく、共存しながら成長する

基盤として位置付け直す。

計画敷地は伊豆諸島の青ヶ島である。噴火によって無人島となった歴史を持ちながらも、島民の力によって遷住を果たした愛にあふれる島である。この島には、人口減少とそれに伴う産業衰退という課題がある。また、絶海の孤島の所以となる輸送制限によって、本土から大量の建築資材を運ぶことが困難である。しかし、航路の少なさはロケット発射時の安全海域を確保しやすく、二重カルデラ地形は生活圏と離れていることから新しい産業が導入しやすい。本計画では、青ヶ島特有の地形や課題を宇宙港建設への利点として捉える。宇宙建築で用いられる ISRU の思想を建築へ転用することで、未活

用の現地資源を用いた建設と運用を成立させる。

計画は、カルデラ内部にロケットの発射施設等を集約し、尾根に一般利用施設を配置する。これにより、一般利用施設が産業と島民・観光客との中間領域となる。

建材には、島内で得られる木材、玄武岩、海水を利用したコンクリートを用いる。島内の木は地熱の影響で高くまっすぐ育たず、柱や梁への転用が不可能である。島内での建設を可能とするため、小さい単位のユニットを規格化し、それらを組み合わせる建築手法とする。これにより、建設行為そのものが地域資源の循環と結びつき、島の新たな産業基盤を形成する。

建築はキューブ状のユニットを基本単位とし、積層、回転、ずらし、分散といった操作によって構成される集合体として計画する。ユニットは地形勾配や用途に応じて配置密度や高さを变化させ、均質なグリッドではなく、不均質な連続体として展開する。これにより、拡張や更新が可能な変型の空間構成を実現する。また、宇宙建築でも用いられるハニカム構造を木に利用し、建築内の環境操作や産業から人々を守るシェルターとして機能する。

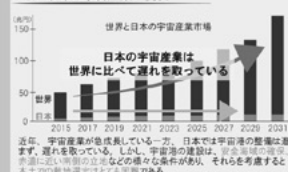
本計画は、宇宙港を単なる発射拠点としてではなく、時間とともに増築・更新され、地域と関係を結びながら持続的に成長する建築として提示するものである。

第57回毎日・DAS 学生デザイン賞 入選

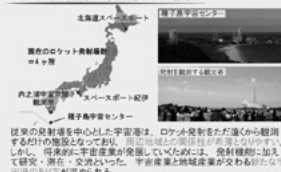


01 宇宙港の新しい在り方

01-1 日本の宇宙産業の現状

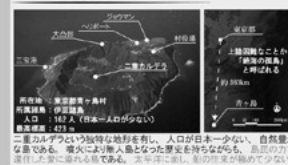


01-2 地域産業から隔絶された存在

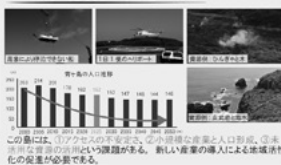


02 青ヶ島のもつポテンシャル

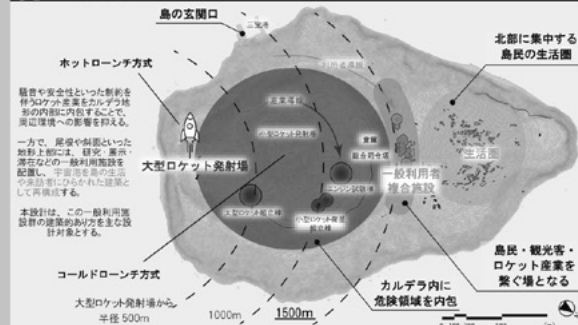
02-1 絶海の孤島「青ヶ島」



02-2 島が抱える3つの課題

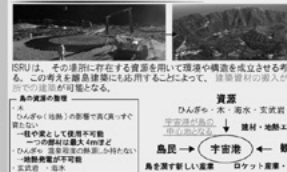


04 地形による配置計画



03 地域資源を用いた離島型宇宙港

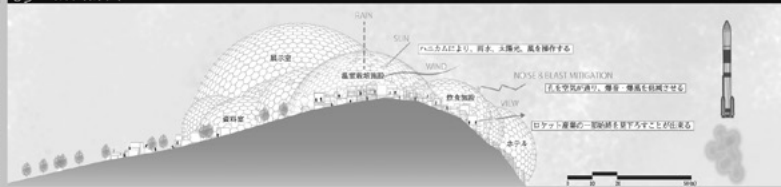
03-1 ISRUを離島へ応用



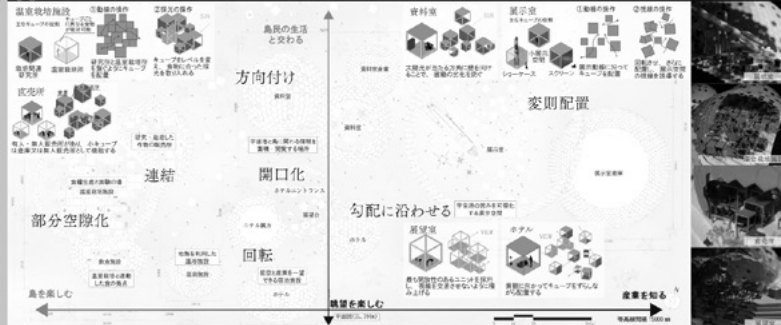
03-2 規格化したユニットでの建築



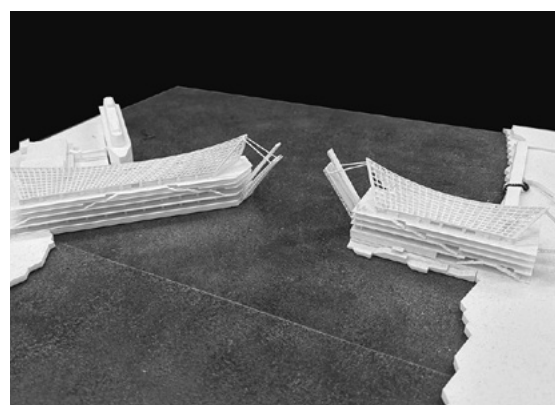
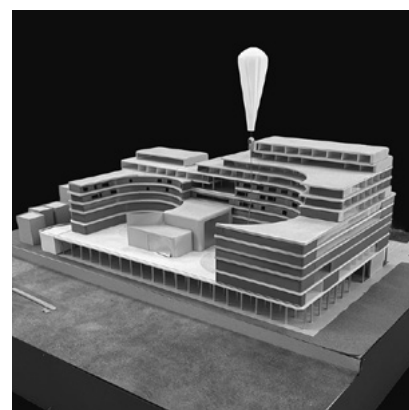
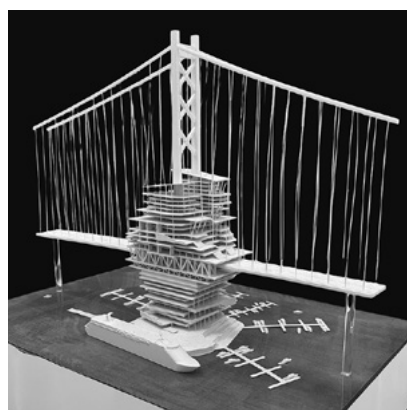
05 断面計画



06 キューブの組み合わせによる空間操作



【担当】 佐藤 信治
長谷川洋平
小林 直明



富永玲央

1. はじめに

観光庁は2030年までに訪日客6,000万人、旅行消費額15兆円を達成することを目標としているが、日本の観光ゲートウェイである首都圏の空港は、2032年に約23万回分の発着枠が不足すると予測されている。既存の羽田・成田両空港は、夜間運用制限や地上施設の不足といった構造的限界を抱えてお

り、これ以上の増便や滑走路の増設は困難である。

本提案は、東京湾の海上に新空港を計画することで、需要を分散しつつ、国際旅客の多様なニーズに応える「目的地としての空港」を構築することを目指している。具体策として MICE 機能を併設し、乗り継ぎ時間を交流・滞留へと転換させることで、非航空収益の増加とアジアの主要ハブ空港としての機能強化を目的とする。

2. 計畫背景

2.1 首都圏空港の容量限界と供給不足

2.1.1 首都圏空港の需要増加

2032年の首都圏航空需要は年間94万回に達すると予測され、現行の処理能力71万回を大幅に上回る。発着枠の不

足は航空会社の自由度を制限し、国際的なハブ機能競争における遅れを招いている。

2.1.2 羽田空港の発着状況

都心への近接性からビジネスや訪日客の需要が集中しており、慢性的な高需要によって処理能力に大きな負荷がかかっている。

2.1.3 成田空港の夜間空港制限

周辺環境への配慮から深夜・早朝の離着陸が制限されており、24時間運用が求められる国際航空ネットワークや物流において競争上の不利となっている。

2.2 日本の観光業の現状

2.2.1 日本の観光推進と課題

観光客増加に伴うオーバーツーリズム

ムが深刻化しており、今後は「高付加価値旅行層」の誘致と地方への分散が急務である。

2.2.2 インバウンドによる空港需要の増加

アジア近距離や北米等からのトランジット需要が拡大しており、空港の滞在価値を高めるインバウンド対策が不可欠となっている。

2.2.3 MICE 施設による期待と課題

MICE は消費単価が高く経済効果が大きいですが、都心部での開催はインフラ負荷や混雑を助長する懸念がある。

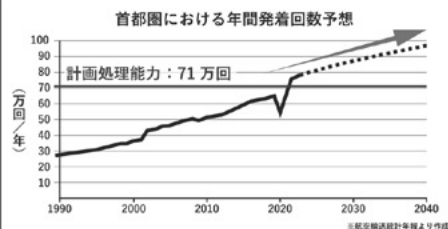
2.3 LCC 航空の需要増加

若年層や観光客を中心に LCC 利用が急増しており、航空市場全体におけるシェアが着実に拡大している。

2.4 空港の目的地としての価値



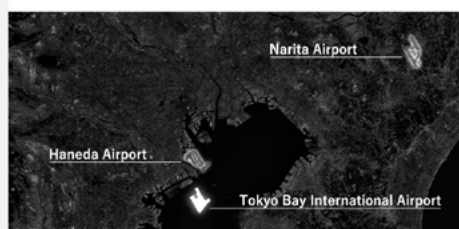
01 首都圏空港需要の増加



02 羽田・成田の容量限界と物理的課題



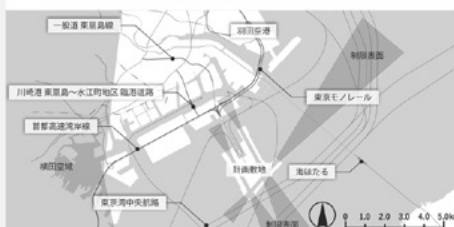
03 首都圏に新たな新空港を計画する



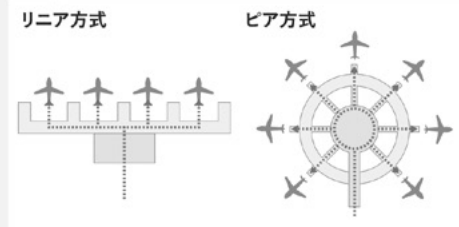
04 国際需要に向けたMICEの併設



05 環境・運用体制に考慮した川崎沖



06// ピア方式による空港とMICEの統合



シンガポールのチャンギ空港のように、空港を「目的地」として再定義し、滞在行動を誘発する空間構成を導入することが国際競争力向上の鍵となっている。

2.5 首都圏第三空港の誘致

羽田のD滑走路や茨城空港だけでは将来の需要を支えきれず、構造的限界を打破するための第三空港整備が不可欠である。

3. 計画方針

3.1 計画の目的と背景

既存空港を補完し、MICE施設を併設した次世代型ハブ空港を構築することで、日本においても空港を「目的地」として再定義し、地域経済への波及効果を図る。

3.2 計画の基本方針

3.2.1 首都圏の航空機発着回数の引き上げ

2032年に予測される約23万回分の発着枠不足を新空港が担い、既存空港の需要集中を緩和する。

3.2.2 羽田・成田と連携した空港ネットワークの再編

都心に強い羽田、長距離・貨物の成田に対し、新空港はビジネス・トランジット客の「受け皿」となる国際交流拠点を創出する。

4. 基本計画

4.1 計画敷地

4.1.1 神奈川・川崎市 川崎沖海上

空域管理、気象条件、騒音影響を多角的に検討し、既存空港との干渉が少なく安定した離発着が可能な川崎沖を

選定した。

4.1.2 敷地特性

首都高速湾岸線や東京モノレールの延伸を活用することで、多様な交通手段による高い利便性を確保する。

4.2 規模計画

関西空港や仁川空港の事例を分析し、年間旅客数5,300万人、年間発着回数約23万回の処理能力を目標として設定した。

5. 建築計画

5.1 全体計画

空港機能に国際会議場や宿泊施設を統合し、滞在型・目的地型空港を創出することで、非航空収益の最大化を目指す。

5.2 配置計画

5.2.1 滑走路の配置

4,000m級滑走路3本を整備。うち1本を横風対応とし、海上立地の特性を活かした杭式構造を採用して環境負荷を抑制する。

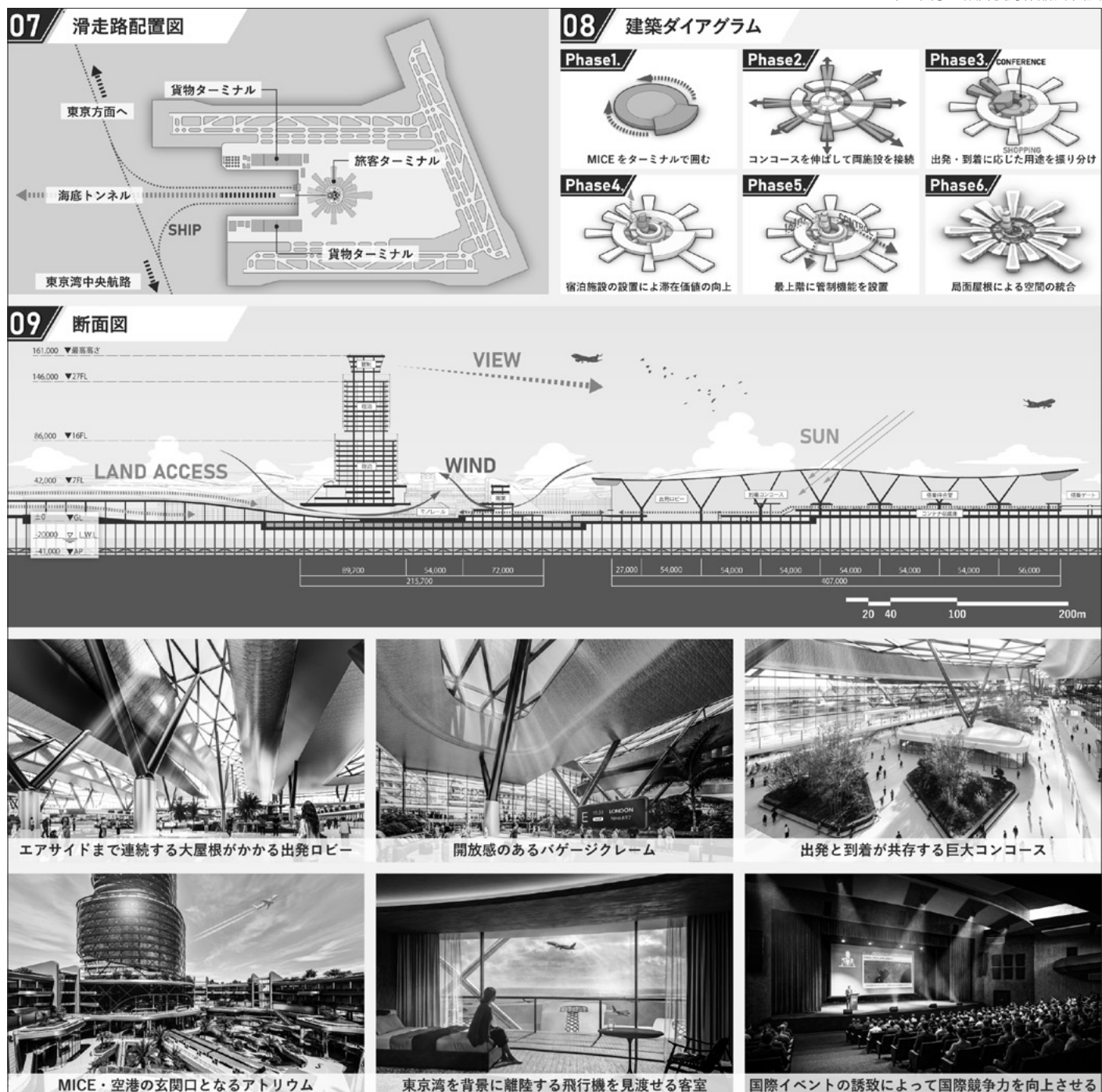
5.2.2 ターミナルの配置計画

動線を短縮化するピア型を採用。出発・到着動線が交差する中央にMICE機能を配置し、旅客流動を交流と消費へとつなげる。

5.3 空港とMICEの機能的統合

ターミナル基部に効率的な動線を配置する一方で、中心部に滞在の核となるMICE・商業機能を積層させる。大空間による視覚的連続性やエアサイドへの機能配置により、空港を通過点から国際交流拠点へと拡張する。

第49回学生設計優秀作品展 出展



門谷采実

1. 研究の背景と温泉街の再生事例

日本の温泉街は、戦後の高度経済成長期に団体旅行を前提とした大規模ホテル集中型の空間を形成しました。しかし現代では、個人旅行へのニーズ移行や施設の老朽化、情報発信の遅れなどにより、多くの温泉地が深刻な衰退に直面しています。国内外の25の温泉地の再生事例を分析した結果、成功の鍵は「公共空間のデザイン戦略」が既

存建築の再活用」「ハードとソフトの連携」にあることが判明しました。本提案は、単一の建物改修ではなく面的な広がりを持つ「エリアリノベーション」の有効性を提示し、静岡県東伊豆町の「熱川温泉」を実践的な計画対象地に選定しています。

2. 熱川温泉の現状と構造的課題

熱川温泉は、約100℃の高温源泉が毎分6,000リットル湧出し、街中に13本の「温泉櫓（やぐら）」から湯けむりが立ち上る、国内有数の「地熱都市」です。しかし、海から急峻な斜面にかけての立体的地形の魅力は、海岸沿いに壁のように建ち並ぶ巨大な高層ホテル群によって視覚的に分断され、海への眺望が失われています。さらに、

急勾配の坂道が歩行者の回遊性を著しく阻害し、温泉配管や櫓などのインフラは維持管理不足で老朽化し「負の遺産」と化しており、空間・経済・社会・環境の複合的な課題が絡み合っている現状が浮き彫りになりました。

3. 全体構想と基本計画

(Thermal-Culture-Landscape Loop)

これらの課題に対し、本計画は「Thermal（熱エネルギー）」「Culture（生活文化）」「Landscape（立体的景観）」の3要素を循環・連環させる全体構想を提案しています。最大の目的は、分断された海・川・斜面・源泉をつなぐ回遊ネットワークの再構築です。具体的には、視界を遮る海岸沿いの旧大規模旅館群を大幅に「減築」

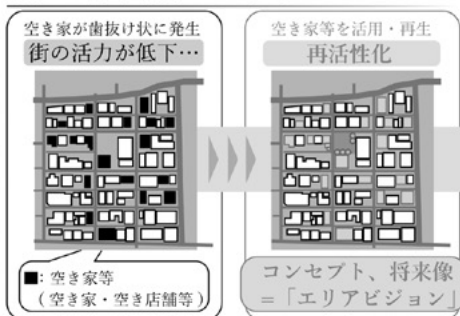


温泉熱と景観資源を軸とした温泉街の再編に関する建築提案

1. 敷地「東伊豆町熱川温泉」



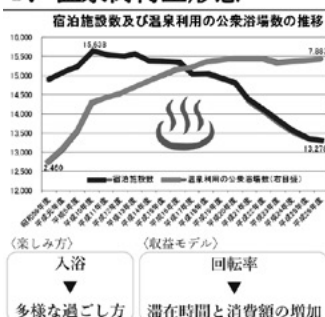
2. エリアリノベーション



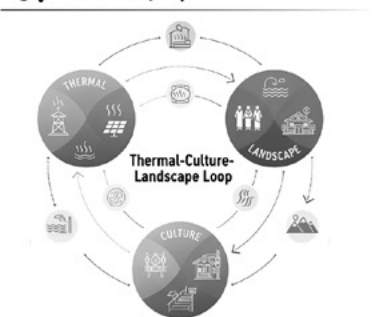
3. 敷地図



4. 温泉街再生形態



5. コンセプト



し、山側から海への眺望軸を回復させます。また、街のインフラである温泉槽を単なる設備ではなく、エネルギーを五感で体感できるサテライト拠点（Thermal Follies）として再定義し、周辺の空き家や倉庫を蒸気体験ラボや足湯併設のキオスク、静寂な滞在離れヘリノベーションして点在させます。

4. 建築計画とランドスケープ設計の統合

具体的な建築手法として、減築した既存の鉄筋コンクリート（RC）躯体を人工地盤として残し、その上部に軽量で断熱性に優れた CLT（直交集成板）を用いた木造架構を増築するハイブリッド構法を採用しました。これにより、重機搬入が困難な斜面地での施工制約を克服し、地盤への負荷を劇

的に軽減します。さらに、豊富な地中熱を建築空調に組み込む「躯体蓄熱放射空調システム（TABS）」を導入します。地中熱ヒートポンプで作った冷温水をコンクリートスラブ内に循環させることで、エアコンの風や音に頼らない静穏で快適なふく射熱空調を実現しました。用途面では、過剰な宿泊定員を適正化し、大浴場、客室、デジタルデトックス、食文化、ラウンジなど「6つの分棟（パビリオン）」へコンバージョンします。ランドスケープ設計においては、重力流を利用した段状の水盤や海辺の露天風呂を配置し、東伊豆特産の柑橘類（ミカンなど）をシンボルツリーとした植栽を行うことで、自然と建築が溶け合う歩行空間

（Thermal Lane）を創出しています。

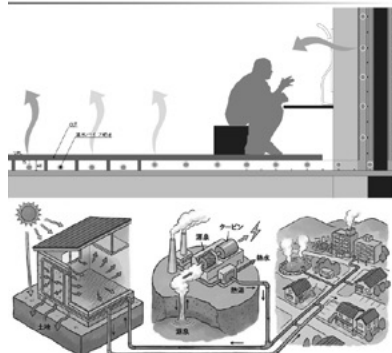
5. 事業スキームと地域循環型経済の構築

本計画の実現性を担保するため、行政、地元事業者、民間企業（東急グループ等のデベロッパー）が連携する「SPC（特別目的会社）」主導の自律的官民連携モデルを提示しています。SPCが廃業旅館を一括取得してリノベーションし、リゾート運営とエネルギー販売（熱供給）を一体的に担うことで収益基盤を安定させます。ここで得た利益の一部は、景観保全や住民の交通・生活支援などの地域インフラに還元（レベニューシェア）され、観光振興が住民生活の向上に直結するエコシステムを構築します。

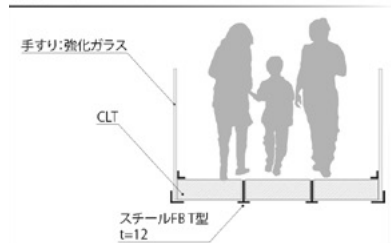
6. 結論と展望

本提案は、熱川温泉が抱える「地理的制約」と「施設の老朽化」という負の側面を、建築的介入によって「独自の景観価値」と「クリーンエネルギー資源」へと反転させる野心的な試みです。過剰な巨大施設を減築・分棟化し、地域資源である地中熱を CLT や躯体蓄熱といった現代の環境技術と統合する本モデルは、脱炭素社会に対応した「エネルギー自立型リゾート（Green Onsen Model）」の具現化と言えます。これは、単なる一つの温泉街の改修にとどまらず、衰退傾向にある全国の温泉街に対し、地域固有の自然資源と建築的介入を融合させることで、持続可能な地域空間へと再編するための実践的なモデルを提示するものです。

6. 躯体蓄熱



7. CLT



8. 平面計画



敷地内ランドスケープ



地中熱発電を学ぶラボ



山並みと一体化した風景



海を一望できる展望デッキ

フィリピンマニラにおけるセルフビルド建築の提案

金井和奏

1. はじめに

近年、開発途上国を中心とした急速な都市化に伴い、都市内部での貧富格差が深刻化している。フィリピンにおいても経済成長の恩恵が都市貧困層に十分行き渡っておらず、マニラ首都圏ではスラム街の拡大や非公式居住地の増加が顕著である。

本提案は、拡大し続けるマニラのスラム地域に対し、住民が主体となって居住空間を形成し、長期的かつ確実に

環境を改善していくための仕組みを提案するものである。具体的には、セルフビルドによる住居建築活動を通じ、住民を受動的な支援対象から「住環境を共につくる主体」へと転換させ、地域コミュニティの形成と住民の自立を促すことを目的とする。

2. 計画背景

2.1 フィリピンが抱える貧困格差の問題

フィリピンは年平均6%前後の安定したGDP成長を維持しているが、所得分布を見ると上位10%の層が国全体の所得の約4分の1を占めており、経済成長が国民の生活向上に直結していない。

現地視察（2025年2月・7月）の結果、スラム住民は「住居」「衛生」

「職」「教育」といった生活基盤が不安定な環境にあり、廃材を用いた住宅で常に災害リスクに晒されている実態が確認された。

2.2 マニラにおけるスラム地域の現状

マニラ首都圏の湾岸地域には約230万人以上のスラム居住者が推計されている。1990年代に実施された政府主導の廃棄物処分場（スモークーマウンテン）開発政策（SMDRP）による集合住宅整備は、家賃や生活費の負担から十分に機能せず、再びスラムへ流入する結果となった。このことは、単なる住居提供だけでは不十分であり、労働や教育と結びついた解決が必要であることを示している。

2.3 貧困の悪循環と教育格差

貧困環境は教育機会の不平等に直結しており、小学校中退率は全国平均を上回る。食糧不足や学校の過密化により教育を断念せざるを得ない子どもが多く、それが将来の不安定な職や低収入につながる「貧困の悪循環」を生んでいる。

3. 計画方針

3.1 計画の目的

住民が自ら「居住空間」を形成し、段階的に生活を発展させる住居施設を提案する。政府主導の大規模再開発ではなく、住民主体の持続的な改善を目指す。

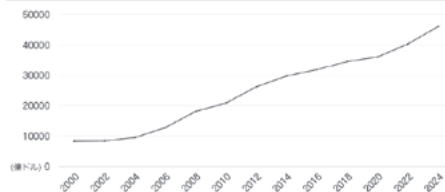
3.2 計画敷地の選定：スモークーマウンテン跡地

かつての巨大廃棄物集積地であるスモークーマウンテン跡地を選定した。

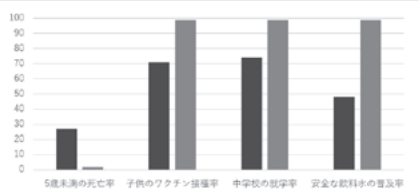


フィリピンマニラにおけるセルフビルド建築の提案

フィリピンマニラにおける貧困格差



フィリピンにおけるGDP成長率
GDPは順調に成長するも、貧困層にまで経済効果が行き渡らない



セルフビルドを用いた研究提案



住民自らが住環境の改善に加わる提案



現地視察の様子

選定理由は以下の通りである。

〈周辺との連続性〉隣接する大規模スラム「ハッピーランド」等と連続した文脈で捉え、段階的改善の場とする。

〈環境的ポテンシャル〉一定の緑地化が進んでおり、自然を取り込んだ住環境の再構築が可能である。

〈資金的障壁の回避〉政府の活用方針が定まっていない土地を活用することで、貧困地域での最大の課題である土地取得費を回避する。

3.3 計画の基本方針

〈セルフビルドによる安心の創出〉住居建築活動を通じて、誰もが住処を奪われない環境をつくる。

〈社会とのつながり〉教育機関や宗教法人の拠点を併設し、社会との永続的

なネットワークを構築する。

〈就労・教育の安定〉建設現場を職業訓練の場とし、スキルアップを通じて社会参加を支援する。

〈ローリング支援による段階的提案〉ユニット単位の提案とし、家族数や生活変化に応じ増築・拡張を可能にする。

4. 基本計画

4.1 建築・構造計画

フィリピンの伝統的住居「バハイコ」の構法をモデルとした、現地素材（竹、ニッパヤシ等）によるセルフビルド住宅である。

〈高床式構造〉竹を用いた高床式とし、洪水対策と湿気対策、通気性の確保を図る。

〈自然素材の活用〉ニッパヤシの屋根、

麻の蚊帳を用い、日射遮蔽と感染症リスク、害虫侵入の低減を両立する。

〈環境制御〉機械設備に依存せず、重力換気や雨水利用システムを導入し、インフラ未整備地に対応する。

4.2 空間計画と段階的發展

〈コアユニット〉基本的な生活（寝る・食べる・休む）を支えるユニットから開始する。

〈成長する住居〉計画中期以降は、家族構成の変化に応じて住戸を拡張し、機能を追加していく。

〈研究技術の導入〉ペロプスカイト太陽電池、バイオマストイレなど、計画の成熟度に応じて段階的に導入する。

4.3 産業と持続可能性

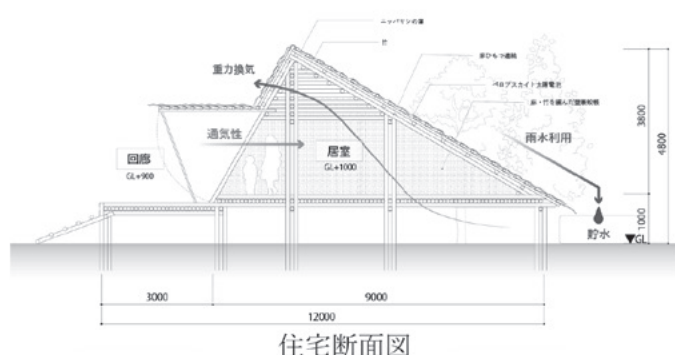
現地資源の活用により、輸送コスト

やCO₂排出を削減するとともに、住民の技能習得を通じた雇用創出と地域経済の活性化を図る。

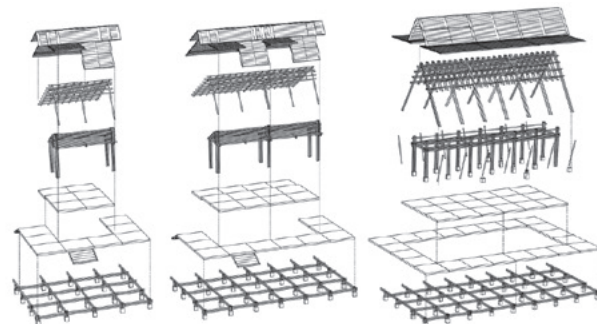
5. SDGs への貢献と展望

本提案は、貧困の解消（Goal 1）、健康と福祉（Goal 3）、質の高い教育（Goal 4）、クリーンエネルギー（Goal 7）、働きがい（Goal 8）、不平等の是正（Goal 10）、持続可能な街づくり（Goal 11）、パートナーシップ（Goal 17）の多方面からSDGsに寄与する。

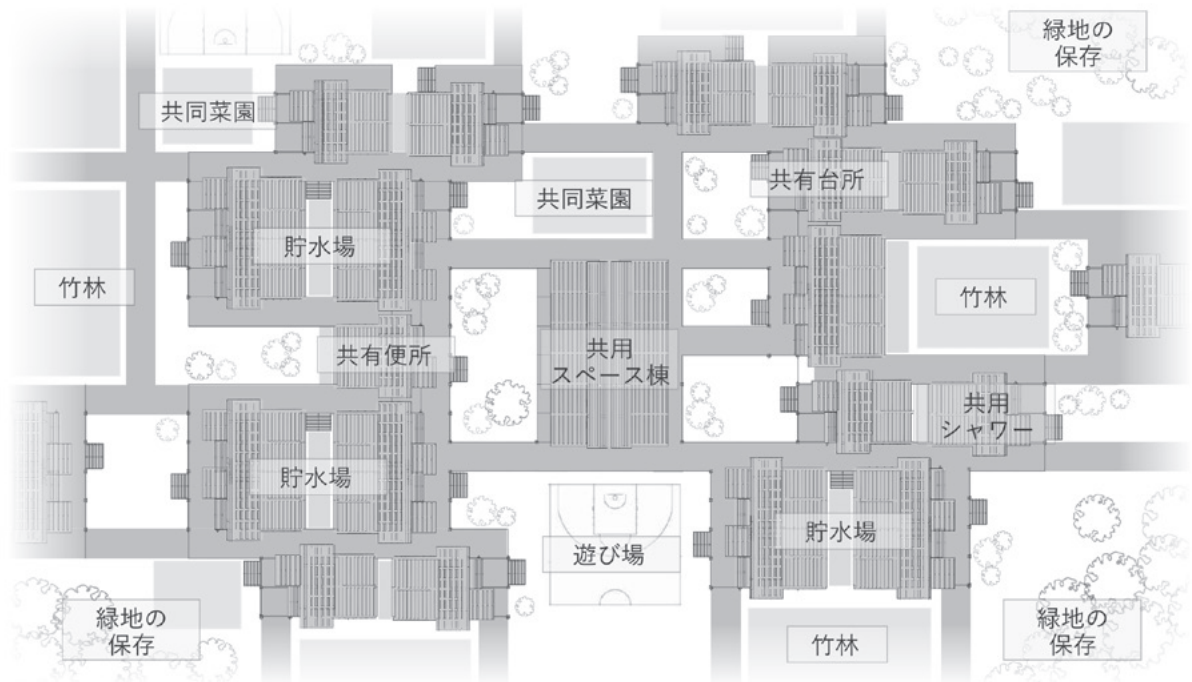
住民自らが建築に参加することは、単なる住宅確保を超え、社会参加の機会と相互扶助の基盤を築く。NGOや宗教法人、行政、大学などの連携を通じ、貧困を主体的に改善していく持続的なコミュニティ形成を目指す。



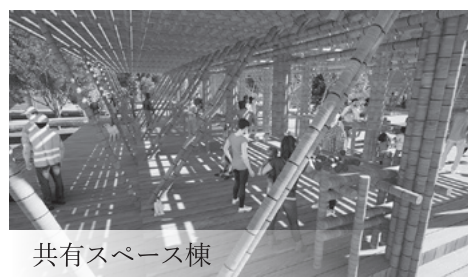
住宅断面図



セルフビルドのシステム図



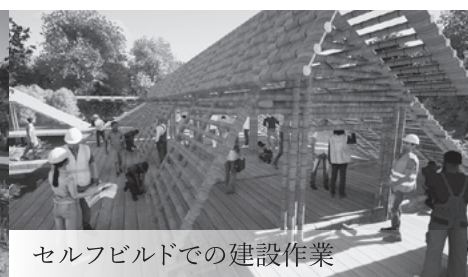
増築により広がるサスティナブル住宅群



共有スペース棟



回廊デッキ



セルフビルドでの建設作業

■コンペ受賞歴一覧

世界一 1作品（その他のコンペ 1作品）

日本一 37作品（卒業設計 23作品、建築学会コンペ 1作品、その他のコンペ 13作品）

日本二 29作品（卒業設計 2作品、建築学会コンペ 5作品、その他のコンペ 22作品）

日本三 13作品（卒業設計 1作品、建築学会コンペ 5作品、その他のコンペ 7作品）

その他受賞数 533作品

年度	卒業設計(●)／修士設計(○)	建築学会コンペ	その他のコンペ
昭和52年	●第10回毎日・DAS 学生デザイン賞 ・最優秀賞「金の卵」賞／石渡孝夫(建築学科海洋コース) 日本一		
53	●第11回毎日・DAS 学生デザイン賞 ・最優秀賞「金の卵」賞／富田善弘(建築学科海洋コース) 日本一		
54	●第12回毎日・DAS 学生デザイン賞 ・最優秀賞「金の卵」賞／小林直明(建築学科海洋コース) 日本一		
56	●第14回毎日・DAS 学生デザイン賞 ・最優秀賞「金の卵」賞／吉本宏 日本一 ・同入選／松本康治		
57	●第15回毎日・DAS 学生デザイン賞 ・建築部門賞／稻村健一 日本一	●「地場産業振興のための拠点施設」 ・支部入選／鈴木洋一	
58	●第16回毎日・DAS 学生デザイン賞 ・最優秀賞「金の卵」賞／遠藤卓郎 日本一 ○④日本港湾協会主催マリノポリス計画コンテスト ・優秀特別賞／川口利之	●「国際学生交流センター」 ・全国入選佳作／稻村健一 ・支部入選／大久保豪、杉田祐之、花岡豊、星野博史	
59	○第17回毎日・DAS 学生デザイン賞 ・入選／稻村健一		●第11回日新工業設計競技「ノアの箱船」 ・3等／遠藤卓郎、岩崎博一 日本三 ●R.I.B.A 英国王立建築家協会国際学生デザインコンペ ・入賞／中村耕史、秋江康弘、稻村健一 ●第19回セントラル硝子国際設計競技「グラスタワー」 ・佳作／秋江康弘 ●三井ホーム住宅設計競技「2×4による新しい住まい」 ・佳作／川口利之、菅沼徹、筒井毅 ●桜門建築会第1回学生設計コンクール「建築学生交流センター」 ・佳作／稻村健一
60	●第18回毎日・DAS 学生デザイン賞 ・入選／富田誠	●「商店街における地域のアゴラ」 ・全国入選3等／藤沢伸佳、柳泰彦、林和樹 日本三	●A.I.A アメリカ建築家協会国際学生コンペ ・2等／秋江康弘 日本二
61	●第19回毎日・DAS 学生デザイン賞 ・入選／小野正人	●「外国に建てる日本文化センター」 ・全国入選3等／小林達也、佐藤信治、小川克巳 日本三 ・支部入選／渋谷文幸 ・支部入選／林和樹、鶴飼聡(建築)、高橋義弘(建築)	●桜門建築会第2回学生設計コンクール「桜門校友クラブ」 ・1等／山崎淳一、松尾茂 ・佳作／小林達也、佐藤信治 ●第6回ホクストン建築装飾デザインコンクール「まちなかの公共トイレ」 ・佳作／小林達也
62	●第20回毎日・DAS 学生デザイン賞 ・入選／海老澤克	●「建築博物館」 ・支部入選／松尾茂、横堀士郎、石川仁、鳥海清二(建築) ・支部入選／小野正人、小沢一実、渡邊俊幸	●ミサワホーム住宅設計競技 ・入選／小林達也
63	●千葉県建築三会学生賞 ・銅賞／近藤陽次 地域三 ・奨励賞／毛見究	●「わが町のウォーターフロント」 ・全国入選1等／新岡英一、橋本樹宜、丹羽雄一(建築)、毛見究、草薙茂雄 日本一 ・全国入選佳作／園部智英、石川和浩、原田庄一郎 ・支部入選／松尾茂、山本和清 ・支部入選／岩川卓也	●'88膜構造デザインコンペ ・佳作／山口明彦 ●第2回千葉ふるさと住宅設計コンクール ・佳作／川村佳之 ●桜門建築会第3回学生設計コンクール「ゲストハウス」 ・1等／山口明彦、原利明(建築)、渡辺一雄(建築) ・2等／加藤麻生 ・3等／飯田隆弘、丹羽雄一(建築)、有馬哲也(建築) ・佳作／小堀泰毅、伊藤剛 ・佳作／長谷川晃三郎、佐久間明

年度	卒業設計(●)／修士設計(○)	建築学会コンペ	その他のコンペ
平成1年	●第22回毎日・DAS 学生デザイン賞 ・建築部門賞／長谷川晃三郎 日本一 ・入選／佐久周明 ●千葉県建築三学生会賞 ・金賞／佐久周明 地域一 ・奨励賞／長谷川晃三郎	●「ふるさとの芸能空間」 ・全国入選2等／新岡英一、長谷川晃三郎、佐久周明、岡里潤 日本二 ・全国入選3等／丹羽雄一(建築)、益田勝郎 日本三	●石川県建築士会設計競技「垂直複合体」 ・1等／矢野一志、佐藤教明、菊池貴紀、廣川雅樹、安田友彦、鈴木宏佑 日本一 ●第1回横浜アーバンデザイン国際コンペ ・選外入選／長谷川晃三郎 ●第3回千葉ふるさと住宅設計コンクール「安全で魅力ある三世代住宅」 ・入選／山本和清
2	●第23回毎日・DAS 学生デザイン賞 ・入選／山口哲也 ●千葉県建築四学生会賞 ・金賞／矢野一志 地域二 ・銅賞／山口哲也 地域三	●「交流の場としてのわが駅わが駅前」 ・全国入選2等／植竹和弘、根岸延行(建築)、中西邦弘(建築) 日本一 ・全国入選3等／飯田隆弘、佐藤教明、山口哲也 日本三	●石川県建築士会設計競技「海に浮かぶ市場」 ・3等／川久保智康、野沢良太 日本三 ●第2回横浜アーバンデザイン国際コンペ「ウォーターフロントの再生に向けて」 ・佳作／矢野一志、佐藤教明、大坪一之、屋田直樹、佐藤滋晃、菊池貴紀、菅野聡明、門脇桂子、馬場昭光 ●BAY'90デザインコンペ (BAY'90開催記念学生建築設計競技) ・優秀賞／佐久周明 日本二 ・佳作／益田勝郎 ●桜門建築会第4回学生設計コンクール「建築家ギャラリー」 ・2等／岡里潤、寺尾浩康、馬場昭光 ・佳作／植竹和弘、白石充、根岸延行(建築) ・佳作／山口哲也、佐藤教明 ・佳作／広部剛司、佐藤岳志、菅浩康 ●第10回ホクストン建築装飾デザインコンペ「都市公園に建つフォーリー」 ・佳作／武田和之、岡里潤
3	●第24回毎日・DAS 学生デザイン賞 ・建築部門賞／高橋武志 日本一 ●千葉県建築三学生会賞 ・金賞／高橋武志 地域二 ・奨励賞／廣川雅樹	●「都市の森」 ・1部全国入選2等／山口哲也、河本憲一、廣川雅樹、日下部仁志、伊藤康史、高橋武志 日本二 ・2部全国入選最優秀／片桐岳志 ・2部支部入選／布川亨、八代国彦(建築)、堤秀樹	●JIA オープンデザインコンペ「都市の解体と再構築」 ・1等／佐藤教明、山口哲也、木口英俊 日本一 ・佳作／川久保智康、野沢良太 ●'91メンブレインデザインコンペ「アーバンビルとメンブレイン」 ・最優秀賞／河本憲一、石井昭博、関戸浩二、福田昌弘 日本一 ●第2回長谷エイメージデザインコンペ「現代の夢殿」 ・入選／川添隆史、渡辺千香子 ●第18回日新工業建築設計競技「都市空間の再生計画」 ・入選／川久保智康、野沢良太、花沢真哉、高山一頼、伊藤裕、森泉尚之、額村康博、布川亨、八代国彦(建築) ●第3回タキロンデザインコンペ「時代の風をはらむ都市装置」 ・3等／降旗恭子、黒田佳代 日本三 ・入選／木口英俊 ●第5回千葉ふるさと住宅設計コンクール「共働き家族のための住宅」 ・奨励賞／川添隆史 ●第2回学生のためのフレッシュデザインコンペ ・フレッシュデザイン賞／木口英俊、渡辺昇 ●1991第1回 BUFF 国際建築デザインコンペ「東京の住まい」 ・佳作／佐藤教明
4	●第25回毎日・DAS 学生デザイン賞 ・建築部門賞／片桐岳志 日本一 ・入選／寶田陵 ●千葉県建築三学生会賞 ・金賞／片桐岳志 地域二 ・銅賞／寶田陵 地域三 ●東京ガス・銀座ポケットパーク「卒業設計制作展」第10回記念『1993卒業設計制作大賞』 ・金賞／寶田陵 日本一 ・銅賞／片桐岳志 日本三	●「わが町のタウンカレッジをつくる」 ・1部全国入選3等／佐藤教明、木口英俊 日本三 ・1部全国入選佳作／廣川雅樹、寶田陵 ・1部支部入選／山口哲也、河本憲一 ・1部支部入選／木口英俊、高橋武志 ・2部支部入選／関谷和則、石渡義隆 ・2部支部入選／平崎彰、望月喜之	●盛岡・水辺のデザイン大賞 ・専門部門佳作／佐藤信治、河本憲一、廣川雅樹、伊藤康史、日下部仁志、高橋武志、伊藤賢 ●奈良・TOTO 世界建築トリエンナーレ ・佳作／川久保智康、野沢良太、永島元秀 ●'92メンブレインデザインコンペ「オートキャンプ場」 ・2等／片桐岳志 日本二 ・佳作／高橋武志、関戸浩二 ●桜門建築会第5回学生設計コンクール「わがヒーローとの出会い」 ・2等／片桐岳志、岡田和紀 ●アーキテクチャー・フェア KOBE 学生設計競技「神戸・学園東地域福祉センター」 ・佳作／吉田幸正 ●川鉄デザインコンペ'92 ・佳作／三輪政幸 ●第3回学生のためのフレッシュデザインコンペ ・フレッシュデザイン賞／佐藤教明 ●第19回日新工業建築設計競技「記憶の住む家」 ・佳作／野沢良太 ●1992第2回 BUFF 国際建築デザインコンペ「東京屋台空間」 ・佳作／竹内大介、高山一頼、穴倉尚行 ●DYNAX 第2回建築学生・設計大賞'92「〈太陽・月・炎〉の家」 ・奨励賞／竹内大介、高山一頼、穴倉尚行 ・奨励賞／石井昭博、寶田陵、西上順久

年度	卒業設計(●)／修士設計(○)	建築学会コンペ	その他のコンペ
平成4年			●第4回タキロン国際デザインコンペ「風の道・水の道」 ・3等／山口哲也、川久保智康、木口英俊、永島元秀、布川亨 日本三 ・3等／高橋武志、石井昭博 日本三 ●1992新建築住宅設計競技「スタイルのない住宅」 ・佳作／川久保智康、高山一頼 ●「(仮称)中原中也記念館公開設計競技」 ・佳作／山口哲也、木口英俊
5	●第26回毎日・DAS 学生デザイン賞 ・洋々賞／吉田幸正 日本二 ・入選／関谷和則 ●千葉県建築三会学生賞 ・金賞／関谷和則 地域二 ・銀賞／吉田幸正 地域二	●「川のある風景」 ・1部全国入選佳作／片桐岳志、小野和幸 ・1部支部入選／石井昭博、林正輝、福田昌弘、山口泰永 ・2部全国入選佳作／橋本廉太郎、神蔵良隆、藤生利道 ・2部全国入選佳作／関谷和則、三輪政幸	●石川県建築士会設計競技「21世紀の公園」 ・佳作／片桐岳志 ●第4回長谷工イメージデザインコンペ「現代のさや堂」 ・入選／片桐岳志 ●JIA 東海・北陸支部第10回設計競技「磐座〜いわくら〜」 ・銀賞／田中宏、岡田和紀、澤田憲子、倉川友紀 日本二 ・佳作／岡田和紀、田中宏、澤田憲子、倉川友紀 ●新知的生産環境1993デザインコンペティション「グループによる新しい知的生産環境の在り方」 ・優秀賞／小野和幸 日本二 ●第4回学生のためのフレッシュデザインコンペ ・フレッシュデザイン賞／岡田和紀、田中宏、木口英俊、川久保智康
6	●第27回毎日・DAS 学生デザイン賞 ・入選／清水信友 ・入選／戸國義直 ●千葉県建築三会学生賞 ・金賞／清水信友 地域二	●「21世紀の集住体」 ・1部支部入選／小野和幸、田村裕彦、高野勇治(建築)、國武陽一郎(建築)	●まちづくりコンクール'94「都市を水からデザイン」 ・優秀賞／関谷和則、石渡義隆、館古保 日本二 ・佳作／田村裕彦、岡田和紀、小野和幸、鳥居延行 ・特別賞／井上真樹、馬淵晃 ●桜門建築会第6回学生設計コンクール「磯野家のすまい」 ・優秀賞／小野和幸、井上真樹、小山貴雄 ●川鉄デザインコンペ'94 ・学生大賞／関谷和則、石渡義隆、館古保 日本一 ●小山市城東地区街角広場デザインコンペ ・佳作／坪山幸王、佐藤信治、石井昭博、林正輝、福田昌弘、石渡義隆、関谷和則、館古保、清水信友 ●新知的生産環境1994デザインコンペティション「高齢者のための新しい知的生産環境の在り方」 ・入賞／小野和幸 ●第1回 ARCASIA 学生賞1994「永続性ある発展を目指した都市居住と住宅改革」 ・優秀賞／小野和幸、高野勇治(建築)、岡田和紀、山越寧(建築) 日本二
7	●第28回毎日・DAS 学生デザイン賞 ・入選／田村裕彦 ●千葉県建築四会学生賞 ・銅賞／浦野雄一 地域三 ・奨励賞／田中厚三	●「テンポラリー・ハウジング」 ・1部支部入選／清水信友	●JIA 東海支部第12回建築設計競技「紙〜紙で街に仕掛ける〜」 ・銀賞／井上真樹、馬淵晃 日本二 ●第9回千葉ふるさと住宅設計競技「ライフサイクルを見据えた安全で快適な住まい」 ・奨励賞／田中厚三 ●第5回 BUFF 国際建築デザインコンペ「東京水空間」 ・選外優秀作品賞／広瀬倫恒 ●世界の民族人形博物館国際学生アイデアコンペ ・佳作／梶原崇宏、村松保洋 ●第3回札幌国際デザイン賞「雪の生活文化」 ・佳作／馬淵晃 ●第6回学生のためのフレッシュデザインコンペ ・作品展示／下平将也 ・作品展示／川崎拓二
8	●第29回毎日・DAS 学生デザイン賞 ・入選／富永恒太 ●千葉県建築四会学生賞 ・銀賞／中村武晃 地域二 ・奨励賞／小川太士		●石川県建築士会設計競技「インテリジェンスファクトリー」 ・選外優秀作品賞／小山貴雄 ●第10回千葉県街並み景観賞 ・準特選／鳥居延行 地域三 ●桜門建築会第7回学生設計コンクール「キャンパスコア」 ・キャンパス賞／田中厚三、松元理恵 ●第10回千葉県ふるさと住宅設計競技「増改築を考慮したロングライフの住宅」 ・奨励賞／田中厚三 ●第10回建築環境デザインコンペティション「東京湾内のエコシティー」 ・佳作／小山貴雄 ●第2回九州デザインコンペティション「バリアフリーデザイン」 ・協賛企業賞／小山貴雄、田中厚三、安藤亮、北田紀子、峰村亮(生産建築) ●第6回優しい食空間コンテスト「食空間デザイン」 ・入選／馬淵晃 ●第9回ゆとりある住まいコンテスト「住まいの収納」 ・1等／田中厚三 日本一

年度	卒業設計(●)／修士設計(○)	建築学会コンペ	その他のコンペ
平成8年			●'97GREEN DESIGNING IN YAMAGATA「地球環境にやさしいデザイン」 ・奨励賞／馬淵晃
9	●第30回毎日・DAS 学生デザイン賞 ・入選／市原裕之 ・入選／針生康 ●千葉県建築四会学生賞 ・奨励賞／市原裕之 ・奨励賞／針生康	●「21世紀の学校」 ・1部全国入選2等／村松保洋、渡辺泰夫 日本二	●石川県建築士会設計競技「ヒーリング・プレイス」 ・優秀賞／富永恒太 日本二 ●第8回学生のためのフレッシュデザインコンペ ・作品展示／宮下新 ・作品展示／佐藤洋、木村太輔、村松可奈子、北田紀子 ●校門建築会三学部建築学生交流フォーラム ・審査員特別賞／長井厚、田中啓一、寺内学、関香織、村田昌彦 ●運輸省「みんなでつくろう海洋国日本 未来のアイデア大募集」 ・学校部門 フロンティア賞／鳥居延行、若山喜信、金田岩光 ●日本大学理工学部建築学科「TEMPORARY SPACE COMPETITION(DOME COMPE)」 ・優秀賞／石川阿弥子、大野貴司、桶川嘉子、山田博栄 ●第5回秀光学生コンペティション 新知的生産環境1997「挑戦するオフィス」 ・入賞／富永恒太 ●東京建築士会第33回建築設計競技「コミュニティコアとしての小学校の再生」 ・佳作／佐藤信治、市原裕之、田中克典、長井厚
10	●第31回毎日・DAS 学生デザイン賞 ・入選／大野貴司 ●千葉県建築四会学生賞 ・金賞／大野貴司 地域二		●第4回北陸の家づくりコンペ「環境共生住宅」 ・最優秀賞／田中克典 日本一 ・優秀賞／長井厚 日本二 ●第2回太陽電池を用いた創造的構築物「太陽の恵みと建築との調和」 ・奨励賞／市原裕之 ●壁装材料協会主催「第6回明日のインテリア・アイデア・コンクール」 ・会員企業賞／伊藤昌明
11	●千葉県建築四会学生賞 ・銀賞／寺田健 地域二 ・特別賞／江橋亜希子		●第5回北陸の家づくり設計コンペ「60年住む家」 ・優秀賞／塙貴宏 日本二
12	●第33回毎日・DAS 学生デザイン賞 ・入選／渡邊昌也 ●千葉県建築四会学生賞 ・奨励賞／原香菜子 ・奨励賞／渡邊昌也	●「新世紀の田園居住」 ・タジマ奨励賞／青山純、岡田俊博、岡部敏明、木村輝之、斉藤洋平、重松研二、秦野浩司	
13	●第34回毎日・DAS 学生デザイン賞 ・建築部門賞／秦野浩司 日本二 ●千葉県建築四会学生賞 ・奨励賞／秦野浩司 ・奨励賞／木村輝之	●「子どもの居場所」 ・関東支部入選／齋藤洋平、木村輝之	●栃都市開発技術サービス「坪井地区を対象としたエコ・テクノロジーの活用によるまちづくり計画の提案」 ・優秀賞／山端俊也 日本二 ・佳作／大工原洋充、舟岡徳朗 ●栃東京建築士会「住宅課題賞」 ・入選／羽根田治
14	●第35回毎日・DAS 学生デザイン賞 ・入選／丸山貴広 ・入選／山下忠相 ●千葉県建築四会学生賞 ・奨励賞／栗田耕史 ・奨励賞／長坂悠司		●第2回仏壇デザインコンペティション2002 森正 ・審査員長特別賞／齋藤正憲、渡邊昌也、伊藤麻也、坂元晋介 ●福山大学建築会デザインコンペティション2002 ・佳作／白砂孝洋 ●栃東京建築士会「住宅課題賞」 ・入選／清水大地 ●第8回飛騨・高山学生家具デザイン大賞 ・入選／丸山貴広
15	●第36回毎日・DAS 学生デザイン賞 ・入選／川崎未来生 ●千葉県建築四会学生賞 ・奨励賞／川崎未来生 ・奨励賞／白砂孝洋		●新建築住宅設計競技2003 ・2等／川崎未来生 日本二 ●福山大学建築会デザインコンペティション2003 ・金賞／片桐雄歩 日本一 ・入選／白砂孝洋 ●栃東京建築士会「住宅課題賞」 ・入選／中村智裕
16	●第37回毎日・DAS 学生デザイン賞 ・入選／永嶋順一 ・入選／佐藤俊介 ●千葉県建築四会学生賞 ・特別賞／稲垣直秀 ・奨励賞／勝又洋	●「建築の転生・都市の転生」 ・全国入選佳作／丸山貴広、鈴木貴之、塚本哲也、長坂悠司、吉田健一郎 ・東海支部入選／土井涼恵、内田真紀子	●福山大学建築会デザインコンペティション2004 ・佳作／土井涼恵 ・入賞／勝又洋 ・入賞／奥田祥吾 ・佳作／三村舞、勝岡田洋子、望月菜生 ・佳作／渡辺秀哉 ●栃東京建築士会「住宅課題賞」 ・入賞／賀山雄一

年度	卒 業 設 計(●)／修 士 設 計(○)	建 築 学 会 コ ン ペ	そ の 他 の コ ン ペ
平成17年	●第38回毎日・DAS 学生デザイン賞 ・入選／鈴木啓史 ・入選／渡辺秀哉 ●第18回千葉県建築学生賞 ・優秀賞／渡辺秀哉 【地域二】 ・奨励賞／鈴木啓史 ○第4回 JIA 大学院修士設計展 ・出展／京野宏亮	●「風景の構想―建築をととしての場所の発見」 ・関東支部入選／金子太亮、勝又洋、中村智裕	●9坪ハウスコンペ2005 ・佳作／金子太亮 ●TEPCOインターカレッジデザイン選手権 ・優秀賞／金子太亮、京野宏亮 【日本二】 ●福山大学建築会デザインコンペティション2005 ・入賞／桔川卓也 ・佳作／河原一也、信戸佑里 ●(社)東京建築士会「住宅課題賞」 ・入選／五十嵐大輔
18	●第39回毎日・DAS 学生デザイン賞 ・入選／桔川卓也 ●卒業設計日本一決定戦 ・日本三／桔川卓也 【日本三】 ●卒業設計裏日本一決定戦 ・裏日本一／桔川卓也 【日本一】 ●第19回千葉県建築学生賞 ・特別賞／河原一也 ・奨励賞／丹沢裕太 ●第30回学生設計優秀作品展 ・レモン賞／桔川卓也 ○第5回 JIA 大学院修士設計展 ・出展／勝又洋 ・出展／金子太亮	●「近代産業遺産を生かしたブラウンフィールドの再生」 ・関東支部入選／金子太亮、勝又洋、中村智裕 ・関東支部入選／鈴木啓史、三村舞、渡辺秀哉 ●「美しいまちをつくる むらをつくる」 ・最優秀賞／渡辺秀哉 ・足立区長賞／鈴木啓史、三村舞、渡辺秀哉	●SMOKERS' STYLE COMPETITION 2006「パブリックスペースと分煙」 ・佳作／勝又洋 ●TEPCO インターカレッジデザイン選手権「現実を虚構化する住宅／虚構を現実化する住宅」 ・最優秀作／勝又洋 【日本一】 ●(株)ナムラコンチネンタルホーム事業本部・(株)日本住研 第3回住まいのデザインコンテスト「わたしが暮らす家」 ・優秀賞／勝又洋、金子太亮 【日本二】 ●(社)東京建築士会「住宅課題賞」 ・入選／島田かおり
19	●第40回毎日・DAS 学生デザイン賞 ・入選／赤澤知也 ・入選／丸山大史 ●第20回千葉県建築学生賞 ・優秀賞／小松崎博敏 【地域二】 ・奨励賞／西村秀勇 ○第6回 JIA 大学院修士設計展 ・出展／三村舞		
20	●第41回毎日・DAS 学生デザイン賞 ・建築部門賞／椎橋亮 【日本一】 ●第21回千葉県建築学生賞 ・奨励賞／上條経伍 ・奨励賞／爲季仁 ●第32回学生設計優秀作品展 ・出展／椎橋亮 ●第49回全国大会・高専卒業設計展示会 ・出展／椎川恵太 ○第7回 JIA 大学院修士設計展 ・出展／五十嵐大輔		●木愛の会 第1回設計競技「新しい木の建築―魅了する木造都市へ―」 ・入賞／大西慧
21	●第42回毎日・DAS 学生デザイン賞 ・建築部門賞／細矢祥太 【日本一】 ・出展／下泉宏記 ●卒業設計日本一決定戦 ・100選／鴨志田航 ●第22回千葉県建築学生賞 ・市民賞／永田陽子 【地域二】 ・奨励賞／永田陽子 ・奨励賞／鴨志田航 ●第33回学生設計優秀作品展 ・出展／鴨志田航 ●第50回全国大会・高専卒業設計展示会 ・出展／細矢祥太 ●全国合同卒業設計展「卒、10」 ・7選入選／大西慧 ○第8回 JIA 大学院修士設計展 ・出展／小松崎博敏	●「アーバンフィジックスの構想」 ・関東支部入選／鴨志田航、本多美月 ●「美しくまちをつくる むらをつくる」 ・最優秀賞／朽木健二 【地域一】	●第1回日本大学校門建築会学生設計コンペティション「未来の住処をデザインする」 ・東京ガス SUMIKA 賞／細矢祥太、益山未樹 ・佳作／細矢祥太、益山未樹 ・佳作／椎橋亮 ●第7回「真の日本のすまい」 ・日本建築士会連合会会長賞／爲季仁、鈴木啓史 【日本一】 ●(社)東京建築士会「住宅課題賞」 ・入選／増田佳菜子

年度	卒業設計(●)／修士設計(○)	建築学会コンペ	その他のコンペ
平成22年	●第43回毎日・DAS 学生デザイン賞 ・最優秀賞「金の卵」賞／杉田陽平 【日本一】 ・入賞／松井創斗 ●第23回千葉県建築学生賞 ●優秀賞／杉田陽平 【地域二】 ●特別賞／松井創斗 ●JIA東海学生卒業設計コンクール2011 ・佳作／杉田陽平 ●赤レンガ卒業設計展2011 ・一般賞 8 位／杉山洋太 ●JIA 全国卒業設計コンクール2011 ・出展／松井創斗 ●第34回学生設計優秀作品展 ・出展／古明地雲母 ●全国大学・高専卒業設計展示会 ・出展／杉山洋太	●大きな自然に呼応する建築 ・関東支部入選／大西慧、菅原遼	●ハンサムプレゼンテーションコンペ2010 ・アーキテクタ賞／小川雅人 ●第 6 回「新・木造の家」設計コンペ ・優秀賞／嶋真史 ●第 2 回文化遺産防災アイデアコンペ ・佳作／爲季仁、平山雄基 ●第 2 回日本大学校門建築会学生設計コンペティション ・佳作／増田佳菜子、小山勇氣 ●建築新人戦 ・100選／小山勇氣 ●椅子のある風景 北の創作椅子展2010 ・入選／永田陽子、椎橋亮 ●ハンスグローエ ジャパン バスルーム デザインコンペ2010 ・佳作／椎橋亮、永田陽子
23	●第44回毎日・DAS 学生デザイン賞 ・建築部門賞／石原幹太 【日本一】 ・入賞／渡部亘 ●第24回千葉県建築学生賞 ・優秀賞／石原幹太 【地域二】 ・市民賞／石原幹太 【地域二】 ・奨励賞／渡部亘 ●赤レンガ卒業設計展2012 ・特別賞／石原幹太 ●JIA 全国卒業設計コンクール2012 ・出展／渡部亘 ●第35回学生設計優秀作品展 ・出展／井上彩花 ●卒業設計日本一決定戦2012 ・20選／菅原雅之 ・100選／渡部亘 ●全国合同卒業設計展「卒、12」 ・7 選／菅原雅之 ●DIPLOMA 2012 ・学科代表掲載作品／菅原雅之 ●日本建築学会 建築デザイン発表会 ・部門優秀賞／菅原雅之 ・部門優秀賞／石原幹太 ●Vectorworks 教育支援プログラム OASIS ・優秀研究賞／菅原雅之 ●MITSUBISHI CHEMICAL JUNIOR DESIGNER AWARD 2012 ・都築響一賞／菅原雅之 【日本一】 ●全国大学・高専卒業設計展示会 ・出展／渡部亘		●第17回北陸の家づくり設計コンペ ・北日本新聞社賞／杉田陽平、菅原雅之、渡部亘 ●第 3 回日本大学校門建築会学生設計コンペティション ・佳作／渡部亘 ・佳作／涌井匠、海藤航、斉藤亮介 ●キルコス国際建築設計コンペティション2011 ・満田衛資賞佳作／涌井匠、福田雄太
24	●第45回毎日・DAS 学生デザイン賞 ・入賞／涌井匠 ●第25回千葉県建築学生賞 ・特別賞／涌井匠 ・奨励賞／海藤航 ●MITSUBISHI CHEMICAL JUNIOR DESIGNER AWARD 2013 ・佳作／涌井匠 【日本二】		●第10回 R&R 設計アイデアコンテスト ・入賞／松井創斗、斎藤亮介、山川大喜、川崎将 ●FUTURE DESIGN 2012 未来エレベーターコンテスト ・審査員賞／田原拓、川崎将、山川大喜、善財寛之 ●建築新人戦 ・100選／山川大喜 ●第 4 回ハーフェレ学生デザインコンペティション ・妹尾賞／石原幹太、伊藤春樹、古江志人、遠洞躍斗 ●ALA 建築 Project 建築学生の挑戦「都市と空き地」Vol.2 ・優秀作品／松井創斗、堤昭文、辻普 ●第 4 回文化遺産防災アイデアコンペティション ・佳作／榎本翔太、涌井匠、杉田陽平 ●歴史的空間再編コンペティション2012 ・入選／杉田陽平、涌井匠、川崎将、徳永尚亮 ●平成24年度「横須賀市の海を活かしたまちづくり」コンペ ・最優秀賞／梅田淳、海藤航、福田雄太、涌井匠 【地域三】 ・企画賞、デザイン賞／伊藤春樹、斉藤亮介、中山淳雄、望月堅二

年度	卒業設計(●)／修士設計(○)	建築学会コンペ	その他のコンペ
平成24年			●キルコス国際建築設計コンペティション2012 ・永山祐子賞佳作／涌井匠
25	●第26回千葉県建築学生賞 ・奨励賞／山川大喜 ・奨励賞／川崎将		●歴史的空間再編コンペティション2013 ・入選／菅原雅之、遠洞躍斗、樋浦直紀、井出健、鶴田亜有美、中山博貴 ●建築新人戦 ・100選／出山亮 ●平成25年度「横須賀市の海を活かしたまちづくり」コンペ ・最優秀賞／遠洞躍斗、田原拓、堤昭文、岩本桃果、阿部紘樹 【地域】 ・企画賞、デザイン賞／山川大喜、森浩平、徳永尚亮、善財寛之、鈴木彩美、大谷涼 ●キルコス国際建築設計コンペティション2013 ・遠藤秀平賞銀賞／山川大喜、辻普、藤本幸汰、白坂真 ・古谷誠章賞佳作／菅原雅之
26	●第47回毎日・DAS デザイン賞 ・入賞／滝村菜香 ・入賞／出山亮 ・入賞／藤本幸汰 ●第27回千葉県建築学生賞 ・特別賞(JIA 全国出展)／山影悠時 ・奨励賞・市民賞2位／志萱侑太 ●全国合同卒業設計展「卒、15」 ・審査委員賞(藤村龍至賞)／山影悠時 ●卒業設計日本一決定戦2015 ・100選／山影悠時 ・100選／志萱侑太 ●福岡デザインレビュー2015 ・最優秀賞／堤昭文 【日本一】 ●赤レンガ卒業設計展2015 ・審査委員賞(中山英之賞)／滝村菜香 ●第38回学生設計優秀作品展 ・レモン賞／堤昭文 ●日本建築学会 建築デザイン発表会 ・審査委員賞(篠原聡子)／山影悠時 ●MITSUBISHI CHEMICAL JUNIOR DESIGNER AWARD 2015 ・入選／志萱侑太 ・入選／山影悠時		●建築新人戦 ・101選／高橋翔 ●第8回 JACS 住宅設計コンペ2014 ・佳作／川崎将、志萱侑太、高橋翔 ●キルコス国際建築設計コンペティション2014 ・五十嵐淳賞(銅賞)／遠洞躍斗、森浩平、浅見花 ●第6回日本大学校門建築会学生設計コンペティション ・審査委員賞／山川大喜、滝村菜香、斉藤賢司 ・佳作／涌井匠、遠洞躍斗、山影悠時 ●歴史的空間再編コンペティション2014 ・20選／涌井匠、出山亮、森浩平、樋浦直樹、染谷萌衣、高橋政頼 ●平成26年度「よこはまの海を活かしたまちづくり」コンペ ・デザイン賞／出山亮、井出健、宇山浩和、戸田寛康、樋浦直樹 ・佳作／志萱侑太、亀田宏樹、滝村采香、福島弘明、増田顕弘
27	●第48回毎日・DAS 学生デザイン賞 ・建築部門賞／高橋翔 【日本一】 ●第28回千葉県建築学生賞 ・市民賞2位・奨励賞／高橋翔 ・奨励賞／重田秀之 ●第39回学生設計優秀作品展 ・出展／高橋翔 ○第39回学生設計優秀作品展 ・出展／山川大喜 ○第14回 JIA 関東甲信越支部大学院修士設計展2016 ・出展／川崎将	●日本建築学会建築文化週間学生グランプリ2015 ・入選／志萱侑太、重田秀之、高橋翔、千葉雄介、中西宏直、濱嶋杜人	●日本造園学会90周年記念全国大会 U-30国際アイデアコンペティション ・佳作／森浩平、杉田陽平、松井創斗 ●Floating City Project Architectural Design Contest ・佳作／佐藤信治研究室 ●シェルターインターナショナル学生設計競技2015 ・一次予選通過／出山亮、森浩平、蒲生良輔 ●第9回 JACS 住宅設計コンペ2015 ・特別賞(長谷川豪賞)／遠洞躍斗、滝村菜香、小貫笑美依、佐々木秀人 ・佳作／志萱侑太 ●平成27年度「よこはまの海を活かしたまちづくり」コンペ ・最優秀賞／高橋翔、千葉雄介、中西宏直、今村夏波 【地域】 ●公共施設オープンリノベーションマッチングコンペティション ・実施採択／川崎将 ●第7回日本大学校門建築会学生設計コンペティション ・佳作／出山亮、森浩平、蒲生良輔 ●歴史的空間再編コンペティション2015 ・10選／出山亮 ・20選／遠藤躍斗、山影悠時、森浩平、上田紗矢香、小貫笑美衣 ・50選／川崎将、滝村菜香、高橋政頼、中西宏直、門口稚奈、蒲生良輔、濱嶋杜人 ●第13回主張する「みせ」学生デザインコンペ ・審査委員特別部門賞／志萱侑太、山本雄太郎 ●第1回学生、コンペティション「共のレシビ」 ・特別賞／山川大喜、志萱侑太、千葉雄介 ●キルコス国際建築設計コンペティション2015 ・近藤哲雄賞銀賞／志萱侑太

年度	卒業設計(●)／修士設計(○)	建築学会コンペ	その他のコンペ
平成28年	●第29回千葉県建築学生賞 ・市民賞／蒲生良輔 地域二 ・奨励賞／蒲生良輔 ・奨励賞／濱嶋杜人 ●せんだいデザインリーグ - 卒業設計日本一決定戦 ・100選／上田紗矢香 ・100選／宮嶋悠輔 ●全国合同卒業設計展「卒、17」 ・総合資格学院賞／上田紗矢香 ●第40回学生設計優秀作品展 ・出展／蒲生良輔 ○第40回学生設計優秀作品展 ・出展／志萱侑太 ○第15回 JIA 関東甲信越支部大学院修士設計展2017 ・出展／出山亮	●日本建築学会設計競技 ・タジマ奨励賞／宮嶋悠輔、門口稚奈、谷醒龍、濱嶋杜人	●ERI 学生デザインコンペ2016 ・佳作／蒲生良輔、小貫笑美依、福富大真 ●歴史的空間再編コンペティション2016 ・50選／佐々木秀人、新部瑤介、加藤毅三 ●都市のパブリックスペースデザインコンペ ・佳作／志萱侑太、金井亮祐 ・佳作／永富快、上田紗矢香、山本雄太郎 ●㈱東京建築士会「住宅課題賞」 ・入賞／黄起範
29	●第49回毎日・DAS 学生デザイン賞 ・金の卵賞／黄起範 日本一 ●第30回千葉県建築学生賞 ・特別賞／黄起範 ・奨励賞／赤堀厚史 ○第41回学生設計優秀作品展 ・出展／千葉雄介 ○第16回 JIA 関東甲信越支部大学院修士設計展2018 ・出展／高橋翔	●日本建築学会設計競技2017「地域の素材から立ち現れる建築」 ・全国入選佳作・タジマ奨励賞／赤堀厚史、中村圭佑、佐藤未来、加藤柚衣 ・四国支部入選／松下知可、青木絵子、島田将武、浅野健	●建築新人戦 ・16選／服部立 ・100選／勝部秋高 ・100選／山本壮一郎 ・100選／笹川雄基 ●歴史的空間再編コンペティション2017 ・50選／重田秀之、宮嶋悠輔、金井亮祐、山本淳樹、Lunenкова Anastasia、渡辺真理恵、三枝晃、笹川雄基 ●シェルターインターナショナル学生設計競技 ・34選／蒲生良輔、山本淳樹 ●都市のパブリックスペースデザインコンペ2017 ・佳作／永富快、山本雄太郎、上田紗矢香 ・佳作／志萱侑大、金井亮祐
30	●第50回毎日・DAS 学生デザイン賞 ・金の卵賞／服部立 日本一 ●第31回千葉県建築学生賞 ・最優秀賞／勝部秋高 地域二 ・特別賞／根本一希 ・市民賞／勝部秋高 地域二 ●赤レンガ卒業設計展2019 ・審査員賞／高橋遼太郎 ●デザイン女子 No. 1 決定戦 ・都市・建築部門賞1位／渡辺真理恵 日本一 ○第42回学生設計優秀作品展 ・出展／上田紗矢香 ○第17回 JIA 関東甲信越支部大学院修士設計展2019 ・出展／佐々木秀人	●日本建築学会設計競技2018「住宅に住む、そしてそこで稼ぐ」 ・東海支部入選／山本壮一郎、根本一希、桜井南実、服部立、住古文登	●建築新人戦 ・8選／中村美月 ・100選／西遼 ●歴史的空間再編コンペティション2018 ・第5位／佐々木秀人、金井亮祐、根本一希、桜井南実、小林陽太、中村美月、松下将也 ●キルコス国際建築設計コンペティション2018 ・金賞／蒲生良輔、山本淳樹、三枝晃、山内颯、西村寿々美、郎敬萬 日本一 ・銀賞／勝部秋高、篠原健 ●桜建デザイン・コンクール2018 ・入選／佐々木秀人、山本壮一郎、渡辺真理恵、西村寿々美 ●住宅課題賞2018 ・入選／小山田駿志 ●ひろしま建築学生チャレンジコンペ2018 ・9選／西遼、小山田駿志、山内颯
31 (令和元年)	●第51回毎日・DAS 学生デザイン賞 ・出展／中村美月 ●第32回千葉県建築学生賞 ・最優秀賞／横畑佑樹 地域二 ・特別審査委員賞／横畑佑樹 ●せんだいデザインリーグ2020 - 卒業設計日本一決定戦 ・20選／中村美月 ・100選／小山田駿志 ・100選／横畑佑樹 ●全国合同卒業設計展「卒、20」 ・特別賞(総合資格賞)／横畑佑樹 ・8選／西村寿々美 ●赤レンガ卒業設計展2020 ・最優秀賞／中村美月 日本一 ○第43回学生設計優秀作品展 ・出展／横畑佑樹	●日本建築学会設計競技2019「ダンチを再考する」 ・関東支部入選／小山田駿志、大石展洋、中村美月、渡邊康介 ・タジマ奨励賞／小山田駿志、大石展洋、中村美月、渡邊康介 ・全国入選佳作／根本一希、勝部秋高	●歴史的空間再編コンペティション2019 ・グランプリ／横畑佑樹、山本壮一郎、中村美月、大石展洋、大久保将吾、駒形吏紗、臼杵葵

年度	卒業設計(●)／修士設計(○)	建築学会コンペ	その他のコンペ
令和2年	●第52回毎日・DAS 学生デザイン賞 ・入選／藤田大輝 ●第33回千葉県建築学生賞 ・優秀賞／山戸善伸 地域二 ・入選／佐藤駿介 ●全国合同卒業設計展「卒、21」 ・総合資格賞／中村正基 ・八木祐理子賞／神林慶彦 ●オンライン卒制展2021 ・秋古浩気賞／藤田大輝	●日本建築学会設計競技2020「外との新しいつながりをもった住まい」 ・佳作／根本一希、渡邊康介、中村美月 ・佳作／勝部秋高、篠原健 ・タジマ奨励賞／石井健聖、大久保将吾、駒形史紗、佐藤駿介、鈴木亜実 ・四国支部入選／鷹田知輝(日本大学)、横畑佑樹(同)、西遼(岡山県立大学)、植田美鈴(日本大学)	●第11回 JIA・デスクチャレンジ設計コンペ ・山脇賞／古角虎之介、小山田駿、鷹田知輝、横畑佑樹 ●第7回宇宙建築賞 ・3位／福田晃平、水口隆、佐藤宏樹(芝浦工大) ●歴史的空間再編コンペティション2020 ・準グランプリ／根本一希、中村美月、渡邊康介 日本二 ・ベスト16／古角虎之介、山戸善伸、神林慶彦、中村正基 ・最優秀 SNOU 賞／古角虎之介、山戸善伸、神林慶彦、中村正基 ●土木デザイン設計競技景観開花。2020 ・最優秀作品賞／横畑佑樹、根本一希、中村数基、藤田大輝、小林功基、有馬成美 日本一 ●木の家設計グランプリ2020 ・優秀賞／中村正基、山本壮一郎、中村美月、山田遥南、石本かえで、田畑輝 日本二
3	●第34回千葉県建築学生賞 ・優秀賞／小林真子 地域二 ・奨励賞／太田優人 ●せんたいデザインリーグ2022 卒業設計日本一決定戦 ・100選／関亮太	●日本建築学会設計競技2021「まちづくりの核として福祉を考える」 ・関東支部入選／藤田大輝、渡辺真理恵、石井健成(工学院大)、黒田尚幹(同) ・近畿支部入選／小山田駿志、古角虎之介、高橋朋、福田晃平 ●日本建築学会建築文化週間学生グランプリ2021「銀茶会の茶席」 ・原田祐季子賞／大木貴裕、小林真子、中泉拓己、森田優莉、山戸善伸 ・風岡喜一賞、木村知弘賞／小山田駿志、謝雨辰、鈴木晶美子、増田悠玖、渡邊愛 ●日本建築学会関東支部第22回提案競技「美しいまちをつくる、むらをつくる」 ・特別賞／中村美月、横畑佑樹、神林慶彦、小川香奈、安藤大翔、山田莉央 日本二	●第8回 POLUS 学生建築デザインコンペティション ・佳作／福田晃平、山戸善伸 ●第12回 JIA・デスクチャレンジ設計コンペ ・入選／古角虎之介、小林真子、鷹田知輝 ●建築学縁祭 ～ROOKIE 戦～ ・100選／三谷翼空 ・100選／荒井基就 ●VectorWorks 学生作品コンテスト ・最優秀賞／安藤大翔 地域二 ●JAPAN WOOD DESIGN AWARD2021 ・入選／小山田駿志 ●第9回ヒューリック学生アイデアコンペ ・佳作／中村美月、横畑佑樹、中村正基 ●U30復興デザインコンペ2021「複合災害と新たな都市像」 ・最優秀賞／藤田大輝、渡辺真理恵、山田遥南、川田遥、西辻優世、石黒敬太、尾沢圭太 日本一 ●歴史的空間再編コンペティション2021 ・10位／藤田大輝 ・最優秀 SNOU 賞／藤田大輝
4	●第54回毎日・DAS 学生デザイン賞 ・入選／安藤大翔 ・入選／大木貴裕 ●第35回千葉県建築学生賞 ・特別賞・市民賞／川内俊太郎 ・奨励賞／尾沢圭太 ●せんたいデザインリーグ2023 卒業設計日本一決定戦 ・100選／三谷翼空 ●赤れんが卒業設計展2023 ・100選／法橋礼歩 ・100選／大木貴裕 ・100選／梅澤秀太 ・100選／三谷翼空 ・100選／石黒敬太 ●全国合同卒業設計展「卒、23」 ・50選／三谷翼空 ●新潟建築卒業設計展 Session! 2023 ・東海林賞／梅澤秀太 ●第46回学生設計優秀作品展 ・出展／梅澤秀太 ○第46回学生設計優秀作品展 ・出展／中村正基 ●群青建築展2023+ ・姉崎賞／安藤大翔 ・姉崎賞／法橋礼歩	●日本建築学会設計競技2022「『他者』とともに生きる建築」 ・関東支部入選／中村正基、神林慶彦	●WASA 世界建築学生賞 2022 ・入賞／三谷翼空、梅澤秀太 ・入賞／三谷翼空、梅澤秀太、安藤大翔、尾沢圭太、法橋礼歩 ●住宅課題賞2022 ・入選／櫻井彩音 ●U30復興デザインコンペ2022「災害を生きる都市」 ・8選／安藤大翔、藤田大輝、任晴雯、鈴木雄士、山口直也、奥村碩人 ●The 12th Virtual Design World Cup ・C デイビッド・ツェン賞／梅澤秀太 ●建築学縁祭 ～Rookie 戦～2022 ・100選／樋口大雅 ・100選／八阪柊吾 ●VectorWorks 学生作品コンテスト ・奨励賞／富永玲央
5	●第36回千葉県建築学生賞 ・JSCA 千葉・構造デザイン賞（特別賞）／八阪柊吾 ・特別賞／浅井駿来		●第12回子どものまち・いえワークショップ提案コンペ ・土肥賞／三谷翼空 ●Design Review 2024 ・10選／富永玲央 ・62選／藍野友輝

年度	卒 業 設 計(●)／修 士 設 計(○)	建 築 学 会 コ ン ペ	そ の 他 の コ ン ペ
令和5年	●全国合同卒業設計展「卒、24」 ・50選／藍野友輝 ・50選／富永玲央 ●JIA 全国卒業設計コンクール2024 ・出展／浅井駿来 ●新潟建築卒業設計展 Session! 2024 ・8選／浅井駿来 ●第47回学生設計優秀作品展 ・出展／富永玲央 ○第47回学生設計優秀作品展 ・出展／太田優人	●日本建築学会設計競技2023「環境と建築」 ・タジマ奨励賞／仲澤和希、佐藤航太、奥村碩人、玉木芹奈 ・北海道支部入選／安藤大翔、太田優人 ・東北支部入選／荒木陽哉、山口直也、黒坂龍之介 ●日本建築学会関東支部第24回提案競技「まちなか再生に取り組む伊勢崎市の未来を創造する」 ・佳作／鈴木雄士、富永玲央、佐村拓郎、小林弘真、姫野由衣、熊谷百花(共立女子大学)	●ARCASIA Students' Design Competition 2023 ・国内代表／藍野友輝 ●建築学縁祭 ～ Rookie 戦～2023 ・誠賀建設賞／菊池康太 ・佳作／姫野由衣 ・石井秀幸賞／若松瑠苒 ・100選／田中修斗 ●建築新人戦2023 ・100選／若松瑠苒 ●VectorWorks 学生作品コンテスト ・奨励賞／姫野由衣 ●木の家設計グランプリ2023 ・銀賞／八阪柊吾 日本一 ●歴史的空間再編コンペティション2023 ・SNOU パース賞／浅井駿来、樋口大雅 ●2023年度グッドデザイン・ニューホープ賞 ・入選／三谷翼空 ●住宅課題賞2023 ・入選／若松瑠苒 ●第11回ヒューリック学生アイデアコンペ ・佳作／大木貴裕、中村光佑、門谷采実 ・佳作／富永玲央、太田優人、法橋礼歩、鈴木雄士 ・佳作／三谷翼空 ●第11回大東建託賃貸住宅コンペ ・選外佳作／若松瑠苒、太田優人、柏木玲菜、樋口大雅、園田悠太 ●第50回 五三会建築設計競技 ・藤森雅彦賞／藍野友輝、三谷翼空、梅澤秀太
6	●全国合同卒業設計展「卒、25」 ・石原賞／姫野由衣 ●新潟建築卒業設計展 Session! 2025 ・新潟ゆきどけ賞／勝野琉生 ・中谷賞／藤崎知輝 ・西口賞／古水理乃 ●第2回日本大学合同卒業設計展 ・優秀賞／菊池康太 ・5選／齋藤慶悟 ●せんだいデザインリーグ2025 ・100選／姫野由衣 ●第37回千葉県建築学生賞 ・最優秀賞／若松瑠苒 地域一 ・特別審査員賞／若松瑠苒 ・千葉県知事賞／若松瑠苒 ・特別審査員賞／菊池康太 ●赤れんが卒業設計展2025 ・100選／勝野琉生 ・100選／園田悠太 ●第25回卒業設計コンクール展 ・埼玉県知事賞／菊池康太 地域二 ●JIA 全国卒業設計コンクール2025 ・出展／若松瑠苒 ●第48回学生設計優秀作品展 ・出展／園田悠太	●日本建築学会設計競技2024「 commons の再構築」 ・関東支部入選／奥村碩人、熊本一希、荒木陽哉、山口直也	●建築学縁祭 ～ Rookie 戦～2024 ・猪熊純賞／酒井優 ・佳作／宮田正博 ・100選／大野紗夕香 ・100選／川村吉平 ・100選／藤井光稀 ・100選／増淵悠 ●建築新人戦2024 ・100選／田村萌依 ●第12回大東建託賃貸住宅コンペ ・佳作／三谷翼空、八阪柊吾、菊池康太 ●木の家設計グランプリ2024 ・優秀賞／佐藤航太、奥村碩人 ・ビルダー賞／若松瑠苒 ●2024年度グッドデザイン・ニューホープ賞 ・入選／菊池康太、西村隆司(芝浦工業大学)、河野奏太(芝浦工業大学) ●住宅課題賞2024 ・入選／酒井優 ●第12回ヒューリック学生アイデアコンペ ・優秀賞／梅澤秀太、藍野友輝、小野田鼓、齋藤慶悟 日本二 ・佳作／富永玲央、若松瑠苒、八阪柊吾、大木貴裕 ●第3回学生プロジェクトデザインコンペティション2024 ・入選／藤崎知輝 ●第14回学生 BIM&VR デザインワールドカップ ・ワールドカップ賞／薄井李空、小野田鼓、齋藤慶悟 世界三 ●スポーツ・健康まちづくりデザイン学生コンペティション2024 ・優秀賞／嶋川隼史、鈴木陸、高田悠真、森田健太郎 ・優秀賞／草野真司、芦ヶ原治希 ●土木デザイン設計競技景観開花。 ・佳作／安藤大翔、樋口大雅、仲澤和希、五十嵐功、酒井優、星野輝太 ・ドーコン賞／浅井翔、鈴木暖、小林弘真、三野宮弘太郎、牧野元汰、田永愛夏 ●Next 東静岡～創る・継げる・結わえる街へ～まちづくりアイデアコンペ ・学生未来賞／藤崎知輝、玉川将太、横山晃己、池田拓未 ●丹青社空間アワード2024 ・審査員特別賞／糸魚川颯大、池田拓未

年度	卒業設計(●)／修士設計(○)	建築学会コンペ	その他のコンペ
令和7年	●第26回埼玉卒業設計コンクール展 ・埼玉建築設計管理協会賛助会賞／川神爽来 ●かってに卒制展2026 ・ほうじょう賞／酒井優 ・大川賞／大野紗矢香 ●せんだいデザインリーグ2026 ・100選／糸魚川颯大 ●新潟建築卒業設計展 Session! 2026 ・8選／大野紗矢香 ●赤れんが卒業設計展2026 ・100選／磯部莉緒 ・100選／大野紗矢香 ・100選／宮田正博 ●全国合同卒業設計展「卒、26」 ・総合資格賞／酒井優 ・50選／大野紗矢香 ●第38回千葉県建築学生賞 ・特別賞／酒井優 ・奨励賞／磯部莉緒 ●第3回日本大学合同卒業設計展 ・西田可貴／糸魚川颯大 ・金野千恵賞／大野紗矢香 ・6選／大野紗矢香 ○第49回学生設計優秀作品展 ・出展／富永玲央 ●第49回学生設計優秀作品展 ・出展／大野紗矢香 ●日本建築学会「第67回全国大学・高専卒業設計展示会」巡回展 ・出展／酒井優 ●第57回毎日・DAS学生デザイン賞 ・佐野正一賞〈建築部門〉 ／大野紗矢香 ・部門賞〈空間デザイン部門〉 ／糸魚川颯大 ・入選／酒井優 ・入選／有本百花 ・入選／川神爽来	●日本建築学会設計競技2025「『解築学』を可視化する」 ・佳作／川神爽来、江口和李、横山晃己、藤井光稀 ・タジマ奨励賞／川神爽来、江口和李、横山晃己、藤井光稀	●第11回宇宙建築賞 ・銅メダル／牧野元汰、川村吉平、田永愛夏 日本三 ●設計展 Flap 2025 ・金賞／渡辺徹 日本一 ・40選／加藤広樹 ・40選／望月琢真 ●建築学縁祭 ～ Rookie 選～2025 ・森田祥子賞／渡辺徹 ・100選／田中舜 ・100選／大塚望夢 ・100選／津田優陽 ・100選／水野隼斗 ・100選／滝藤一星 ・100選／望月琢真 ●建築新人戦2025 ・8選／渡辺徹 ●第1回クレバリーホーム設計コンペ ・優秀賞／小林弘真、五十嵐功、若松瑠苒 日本二 ●2025年度グッドデザイン・ニューホープ賞 ・入選／藤崎知輝、臼井元彬、若野菜々子 ●第25回住宅課題賞2025建築系大学住宅課題優秀作品展 ・入選／木村舞優 ●第13回ヒューリック学生アイデアコンペ ・優秀賞／浅井駿来、富永玲央、五十嵐功、小林弘真、有本百花、酒井優 日本二 ●第19回長谷工住まいのデザインコンペティション ・優秀賞／樋口大雅、小林弘真、大野紗矢香、依田澄生、石渡晴生、渡辺徹 日本二 ●全国合同卒業設計展「Pre 卒、26」 ・10選／望月琢真

令和七年度 設計製図担当教員一覧

1年生（ベーシックデザイン演習）

佐藤信治（ベーシックデザイン演習）／海洋建築工学科
江川香奈（ベーシックデザイン演習）／海洋建築工学科
長谷川洋平（ベーシックデザイン演習）／海洋建築工学科
菅原 遼（ベーシックデザイン演習）／海洋建築工学科
金子太亮（ベーシックデザイン演習）／空間研究所
木内厚子（ベーシックデザイン演習）／STUDIO 8
高野洋平（ベーシックデザイン演習）／高野洋平建築設計事務所
田中克典（ベーシックデザイン演習）／大林組
田中厚三（ベーシックデザイン演習）／清水建設

2年生（デザイン演習Ⅰ、デザイン演習Ⅱ）

佐藤信治（デザイン演習Ⅰ）／海洋建築工学科
江川香奈（デザイン演習Ⅰ、デザイン演習Ⅱ）／海洋建築工学科
長谷川洋平（デザイン演習Ⅱ）／海洋建築工学科
菅原 遼（デザイン演習Ⅰ）／海洋建築工学科
奥村梨枝子（デザイン演習Ⅰ）／YTRO DESIGN INSTITUTE
勝又 洋（デザイン演習Ⅱ）／大成建設
金子太亮（デザイン演習Ⅰ）／空間研究所
川久保智康（デザイン演習Ⅰ、デザイン演習Ⅱ）／川久保智康建築設計事務所
船曳桜子（デザイン演習Ⅰ、デザイン演習Ⅱ）／船曳桜子建築設計
星 裕樹（デザイン演習Ⅱ）／KAJIMA DESIGN
森田敬介（デザイン演習Ⅰ、デザイン演習Ⅱ）／森田建築設計事務所
門間正彦（デザイン演習Ⅰ、デザイン演習Ⅱ）／光井 純アンドアソシエーツ建築設計事務所
山田晶子（デザイン演習Ⅱ）／かめ設計室

3年生（デザイン演習Ⅲ、建築計画及び演習）

佐藤信治（デザイン演習Ⅲ、建築計画及び演習）／海洋建築工学科
長谷川洋平（デザイン演習Ⅲ、建築計画及び演習）／海洋建築工学科
小林直明（建築計画及び演習）／海洋建築工学科
小平純子（デザイン演習Ⅲ）／竹中工務店
勝又 洋（デザイン演習Ⅲ）／大成建設
桔川卓也（デザイン演習Ⅲ）／ナスカ
高野洋平（デザイン演習Ⅲ）／高野洋平建築設計事務所
筒井紀博（デザイン演習Ⅲ）／筒井紀博空間工房
朴 世鎭（建築計画及び演習）／日建設計
村山一美（デザイン演習Ⅲ）／センブンノイチ

4年生（総合演習）

佐藤信治（総合演習デザイン系）／海洋建築工学科
山本和清（総合演習計画系）／海洋建築工学科
江川香奈（総合演習計画系）／海洋建築工学科
長谷川洋平（総合演習デザイン系）／海洋建築工学科
菅原 遼（総合演習計画系）／海洋建築工学科
寺口敬秀（総合演習計画系）／海洋建築工学科
桜井慎一（総合演習計画系）／海洋建築工学科
吉田郁夫（総合演習デザイン系）／吉田建築工房

「TARTE」 安藤大智・片山太一・佐々木省太郎・三田晴貴・米村爽汰

「地域とつながる都市型集合住宅」 長澤悠真・吉澤莉杏

「生態廻帰 ―環境のゆらぎと共振する水族館―」 川神爽来

「水守りの曲輪 防御の痕跡を転換し濠の手入れに参加する」 酒井 優

「ランドスケープとプレゼンテーション」

枝 夕葵・望月琢真・吉村咲穂

石渡晴生・岡田海豊・村谷彩花

「水族館」 平田寿珠・依田怜佳

「樹木荘・樹木創・樹木葬 暮らしを重ね、畑を創り、森へ還る」
江口和李・川神爽来・藤井光稀・横山晃己

「島嶼に建つ軌道の断片 ―現地資源を用いた青ヶ島の可変型宇宙港の提案―」 有本巨花

「建築備忘録 ―都市のアーカイブ的博物館―」 秋山慎之介・池田拓未・糸魚川颯大・増渕 慈

「ミクロの世界に立ってみよう」

永野柚菜・金子美祐・石橋 芯・内海そら・常山貴一・田中元気・氏家優芽・上田悠生

日本大学理工学部

海洋建築工学科

〒 274-8501 千葉県船橋市習志野台 7-24-1

TEL : 047-469-5420

URL : <https://www.ocean.cst.nihon-u.ac.jp/>